山ざくら

第39号　平成20年11月　関東氷上郷友会

おもわず　新しい

NEXTA

人びとが暮らしの中で願っていたことに、それ以上のモノで、最良のカタチで応えていきたい。
そして、人びとの「心」を包み、「夢」を装うことができる企業
ネクスタはそういう存在であり続けたいと考えています。

ネクスタ株式会社

東　京　支　店　111-0051 東京都台東区蔵前2-4-5 K-FRONTビル　TEL 03-3861-2331

ネクスタ ラッピイ株式会社

東　京　工　場　121-0011 東京都足立区中央本町5-22-12　TEL 03-3849-6611
千　葉　工　場　270-0202 千葉県野田市関宿台町2192　TEL 04-7196-1721

ネクスタ パッケイ株式会社

栃　木　工　場　323-1104 栃木県下都賀郡藤岡町藤岡4938　TEL 0282-62-3321

山ざくら

第39号

今朝もまた氷上の里は霧の底

山ざる　第39号　目次

〈表紙〉可部美智子作陶彫〝茜雲〟二〇〇八年作
〈扉・目次写真〉①柏原町母坪・徳田邸の裏庭（俳句＝渡邊隆男）
②③氷上町稲継橋より高見城趾を望む
④山南町岩屋川（小学唱歌・紅葉＝高野辰之作詞）……徳田八郎衛・撮影

郷友よとわに幸あれ……渡邊隆男　5
平成19年度「ふるさとの会」開催……6／会計報告書……9
祝寿の方々ご紹介……10／懇親会スナップ……14／寄附者芳名……49

《ふるさと随想》
狐に化かされた話……木村つた江　18
欅とふくろう……原谷洋美　20
学徒動員の思い出……藤井宏次　22
同郷人との感動の出会い……原川美恵子　24
石橋治郎八氏を回想して……石橋正康　26
母と暮らす丹波にて詠めり……井出恭子　28
ひとつの奇遇―鴨庄村の戦中戦後―……丸川健三郎　30

《丹波研究》
「氷上回廊」と「水分かれ分水界」……八木甫瑳子　38
鎌倉時代の丹波国氷上……日置孝彦　42

《丹波を撮る》……撮影・徳田八郎衛　50

《近況・エッセイ》
アゲハチョウの不思議……村上信夫　56
隠居の条件……三浦　宏　58
創業の理念引き継いで……土井崇司　61
会社は誰のものか？……谷口浩章　63
かくも愛しき存在―ＰＡＲＴⅢ……岡田昌子　65
芦田均の記念講演と自衛隊……臼井小五郎　68
「これからの社会の在り方を考える会」の活動……尾崎美代子　70
人のために役立つ喜び……高松常太郎　72
折々の記(5)……井本義一　73

《山行記》白馬岳登頂記……川端教子　81
山と温泉に魅せられて・Ⅱ……山本喜則　86
《丹波通信》篠山層群は化石の宝庫……小田晋作　89
《私の職場》伝統芸能の生命力で人間再生……清家久美子　92
《会員だより》……94／《ふるさとトピックス―丹波新聞から―》……100
《ＢＯＯＫＳ》……103／《インフォメーション》……108
協賛広告……112／編集後記……124

秋の夕日に照る山もみじ
こいもうすいもかずあるなかに
松をいろどるかえでやつた
山のふもとのすそもよう
谷の流れに散り浮くもみじ
波にゆられてはなれてよって
赤や黄いろの色さまざまに
水の上に織るにしき

郷友よとわに幸あれ

会長　渡邊隆男

「お客さん！終点ですよ」肩を叩かれ、あわてて立ち上がる。人ごとと思い込んでいた八十の齢を、私も乗り越えてしまいました。私の関東氷上郷友会会長のお役目もこのあたりでチョンチョンチョン……拍子木の音も高らかに幕引きとまいりましょう。

前会長の村上末吉さんから郷友会会長のバトンを受けて十二年、私はこの山ざる誌の発行と年数回の理事会、そして秋の大会などの世話役を務めてまいりました。副会長に女性会員の長老・木村つた江さん、誇るべき郷友の画家・常岡幹彦さん、郷友会と会員の動勢に永年精通した坂上勝朗さん、お三方のご協力を得て無事にその責を果たすことができました。また「山ざる」誌の編集には郷友の池田忍さんの時には昼夜を分かたぬご尽力が続けられてきたことをご報告し、この場を借りて皆さまに心から御礼を申しあげます。

次期会長は、郷友会永年のお世話役ですべてを知りつくされた若手？のホープ・坂上勝朗さんにお願い致します。会員諸賢の絶大なご支援をお寄せいただきますようお願いする次第です。郷友会のように、気さくな心情を交換できる親睦の場であればこそ、この会の深い理解者によって導かれるべきでありましょう。私が坂上さんを強く推挙するゆえんです。

さて、オリンピックがまた終りました。文字どおり血湧き肉躍る体力の祭典ですが、それを見る側にはどうも問題がありそうです。それはむき出しの国家意識というか、台頭するナショナリズムの黒い影です。そういえば民族意識またしかりです。国家意識や民族意識が高じれば戦争？が始まります。なぜ自国を、自民族をどうしても勝たせたいのか、そこに民族国家エゴの本性が出るようです。誰が勝っても負けてもよい、美しいものに惜しみない拍手を送りたいものです。

平成十九年度の「ふるさとの会」は、十一月十八日（日）に東京都千代田区の九段会館瑠璃の間において催され、総会・懇親会が例年通り滞りなく執り行われた。

本年は総会に先立ち、前年に丹波市の篠山層群で発見された恐竜の化石について、その第一発見者である村上茂氏（山南町在住）に、発見に至るラッキー・ストーリーをお聞かせいただいた。恐竜の化石は、丹波竜と命名されて、いまなお発掘作業が続けられていることは周知のことだが、期待通りの成果を得られんことを、こころから祈りたい。

総会は会長挨拶のあと、会務報告、会計報告および会計監査報告があり、いずれも全会の承認を得た。なお、本年はことにお諮りする議案はなかったので、これを省略した。

例年は総会のあと、傘寿をお迎えの郷友に会長からお祝いの言葉と、花束をお贈りすることになっているが、本年は、ご案内を差し上げた三名のかたがたのどなたもご出席がなく、祝寿会を省略した。

懇親会は、郷里から丹波市教育長木村寿彦氏、兵庫

県から岡田徹東京事務所次長のご出席を得て、祝辞と市政、県政の現況をお話しいただいた。井戸敏三知事からも、お祝いレタックスが届いている。

宴会は例によって一同飲み食いとおしゃべりに専念する。ことに丹波竜の村上氏は、引っ張りダコのいそがしさで、こっちのグループ、あっちのグループで杯を重ねられていた。

お楽しみのおみやげは、本年も山の芋と丹波黒大豆各十本を、幸運な二十人にさしあげた。ほかに有志のかたがたから寄贈ねがった賞品もあり、抽選会は盛りあがる。寄贈者は左記のとおり。

〈景品寄贈者（敬称略）〉

丹波新聞社＝書籍『田舎は最高』十二冊。上高子＝素麺「揖保の糸」一箱。坂上勝朗＝「ポートピアホテル・ペア宿泊券」一セット。九段会館＝「ワイン」一本。

〈付記〉本年の黒豆の出来柄は、近来に無く不出来で、本年度産のものをお届けすることができませんでした。やむなく十八年度産を送ることになりましたが、販売元の小田垣商店の品質管理もゆきとどいていて、いつもの当年度産のものと、味も色も遜色ないものでした。あらためて、天候に左右される農業に従事されているひとびとの苦労を思ったことでした。

（文責・坂上勝朗）

「丹波竜」化石発見の経緯を語る
村上 茂氏（右）と講演風景（下）

◎平成十九年度「ふるさとの会」出席者

（順不同・敬称略）

〈来賓〉

木村寿彦　丹波市教育長

岡田　徹　兵庫県東京事務所次長

長澤　均　同課長

村上　茂　丹波市上久下地域づくりセンター

〈会員〉

○青垣町（4名）

足立和巳　足立静雄　飯田光雄　安原三智子

○市島町（8名）

渋谷要之助　高見秀史　鶴田ゆき子　藤田　純

藤田　徹　丸川健三郎　丸川宥次郎　吉田勇司

○柏原町（17名）

生田清弘　池田和子　稲岡俊一　上村愛子

植田茂樹　大野善三　岡　吉明　岡田昌子

小田晋作　北村貞子　木下正勝　古倉徹夫

古倉規子　小谷　崇　谷　敬三　常岡幹彦

山本明男

○春日町（4名）

足立知佳子　木村つた江　木呂子恵美子

村上信夫

○山南町（13名）

梅田重二　小田明子　梶原矢寸子　久保良雄

直田　正　勢川武彦　竹中紀代子　野村節三

原谷洋美　広内卓生　藤原ひさ子　若森敏郎

渡邊貴美子

○氷上町（15名）

足立謙悟　足立正喜　足立吉雄　上　高子

上田道代　上野重喜　岸本　勲　小山とし子

坂上勝朗　里　収　谷口浩章　仲矢恵美

本城英明　山口和久　渡邊隆男

○西脇市（1名）

笹倉郁子

会　計　報　告　書

（平成19年7月1日～平成20年6月30日）

関東氷上郷友会
会計理事・谷口　浩章
原谷　洋美

（単位：円）

収入の部			支出の部		
科　目	金額	摘　要	科　目	金　額	摘　要
繰越金	2,404,427	郵便貯金 1,604,427円 定額貯金 800,000円 振替貯金 0円	出版費	801,144	『山ざる』38号
			通信・印刷費	122,020	総会・役員会案内等
			総会費	564,414	総会関係支払
年会費収入	346,000	延160名	会議費	188,000	役員会等
総会費収入	440,000	64名	支払手数料	16,630	振替手数料 16,630円 送金手数料 0円
役員会費収入	184,000	延46名			
編集会費収入	0		消耗・備品費	94,995	事務用品等
寄付金	149,650	延41名	繰越金	2,501,097	郵便貯金 1,701,097円 定額貯金 800,000円 振替貯金 0円
広告料収入	762,500	延64名			
その他	1,723	利子等			
合　計	4,288,300		合　計	4,288,300	

監査の結果、上記の通り相違ありません。

平成20年7月25日

会計監査　岡林逸男

白井小五郎

祝寿の方々ご紹介

郷友会では毎年の総会で八十歳を迎えられる会員に祝寿のお祝いをしておりますが、今年その記念の年に当たられる十一名の方に、以下の項目でアンケートを依頼しました。そのうち、五名の方から回答頂きましたのでご紹介します。（順不同）

①生年月日
②ご出身地
③上京の年月日
④上京の動機
⑤これまでに最も印象に残ることは
⑥祝寿を迎えられてひと言

〈生まれた年＝昭和3年・戊辰・1928年〉25歳以上の男子を有権者とする初めての普通選挙が行われ、議会制民主政治への第一歩を踏み出したが、思想や結社に対する政府の干渉・弾圧は選挙中から露骨をきわめ、3・15事件の大量検挙、治安維持法の改正、特高の設置とファシズムの恐怖がしのび寄ってきた。国産レコードの吹込みが始まり、藤原義江の「波浮の港」や宝塚の「モン・パリ」のレコードが大ヒット、政治家までが演説をレコードに吹き込んだ。ラジオ体操、オカマ帽、フラッパー、ラッパズボンなどが流行した。

アムステルダム五輪で織田幹雄が3段跳びで日本人初の金メダル

芦田　重秋様

①昭和3年12月16日生まれ
②市島町
③昭和24年4月
④大学進学のため。
⑤80年も生きて来ますと中味も多岐に亘りますね。それを有難いと思っています。（具体的でなくてすみません）
⑥敗戦の前年から丹波を出て工場動員、軍人学校入校。その後は高校、大学、サラリーマンと続き、東京では約60年の年月がたちました。帰郷する機会はだんだん減って参りますが、丹波と東京2つの軸で支えられた来し方と思っています。その思いから、本籍は子、孫まで市島に置いていま

した。免許証の記載毎に「ふる里」を実感させています。東京では娘の家族を含めて都合11名、今のところ元気で夫この道を歩んでいます。

今回、氷上郷友会で80年の祝意を表していただく由にて、改めて考えますに、私は数多くの知己、友人の幾重もの輪の中に居ることが出来たからこそ今の幸せをいただいたのだと心の底から思う次第です。縦糸は2本の軸足、そして横糸はこの素晴らしい幾重もの輪です。これによってささやか乍ら一つの織物を紡ぎ出すことができました。有難いことです。

今後とも、変わらぬご厚誼をいただきますようお願いし、御礼の言葉と致します。

大地　富美子様

①昭和3年11月14日生まれ
②氷上町朝阪
③昭和45年3月
④夫の転勤のため
⑤東京には、兄弟のようにして大きくなった従兄弟が4人も居てくれて、何よりも心強く嬉しいです。今も幼い時と同じくチャン呼びで話しています。
⑥東京に住んで早くも38年になります。出来の悪い主婦で何とか終わりそうです。結婚以来29年間一緒に暮らした姑が生前、私は死んだら小野尻(本籍地)の山奥のお墓へは入りたくない、皆の近くにいたいと言っておりましたので思い切ってお墓を移すことに決め、わが家から歩いて10分くらいの霊園に先祖に来てもらいました。その節は真照寺様(堀井隆川様)の檀家にしてもらいお世話になりました。毎年お盆には棚経に参ってくださいます。84歳で亡くなった姑が一番喜んでくれているように思います。お墓は移しても本籍はそのままにしております。

数年前より足腰が痛いので、車いすの生活になり、夫や息子達にも世話をかけているのが心苦しいです。時々孫がひ孫を見せに来てくれるのが楽しみで、戦争のないこんな平和な日が続きますように、終戦の日の今日つくづくと感じました。

久保　豊様

①昭和3年12月5日生まれ
②山南町
③昭和40年8月
④銀行の転勤による
⑤人生には夫々ターニングポイント（転機）がありますが、私の場合は昭和40年、転勤で東京勤務になったこと。そして14年後、50歳のとき全く異業種会社へ出向し、そこで25年勤めたことが当地永住の結果となり、振り返れば私の人生着陸態勢へのターニングポイントとなりました。
⑥15年程前ですが、信用情報誌のコラムに「長寿の心得」というのが載っていて思わず笑ってコピーしたのがありま

す。（何かの引用と思いますが出所不詳、前後略）
〈古稀〉七十歳でお迎えが来た時は、まだまだ早いと言え
〈喜寿〉七十七歳でお迎えが来た時は、せくな老楽これからと言え
〈傘寿〉八十歳でお迎えが来た時は、なんのまだまだ役に立つと言え
〈米寿〉八十八歳でお迎えが来た時は、もう少しお米を食べてからと言え
〈卒寿〉九十歳でお迎えが来た時は、そう急がずともよいと言え
〈白寿〉九十九歳でお迎えが来た時は、頃を見てこちらからボツボツ行くと言え
　さて現実、知、体、記憶、俯瞰等の縮小均衡は歪めませんが、歳並み平均値健康で運よく次の祝寿でもこう言えたら悪い話ではないと思います。

小谷　崇様

①昭和3年2月8日生まれ
②柏原町
③昭和22年4月1日頃
④進学のため（但し、生活困難のため、ほとんど学校の教室には行かず、労組の本部に〝就職〟して、得た賃金の一部を

柏原の家族に送金しました)。

⑤東京に来た時は青空が美しく、人々は防空壕の上にトタン板の屋根をかぶせて暮らしていましたが、今ではビルとアパートがぎっしり建て混み、近所の人々は、地価暴騰で軒並み億万長者になっています。しかし、それらの家々(アパート)に住んでいる労働者はみんな月給10万円台で、家賃(10万円前後)を払えば、残りはごはんを食べて、服を着るのが精一杯。「百円ショップ」が命綱、の有様です。よくなったものやら、悪くなったものやら。

⑥ともかく、のんきに、生き抜きましょう。

渡邊　隆男様

①昭和3年9月6日生まれ

②氷上町朝坂

③昭和20年4月1日、進学のため上京。

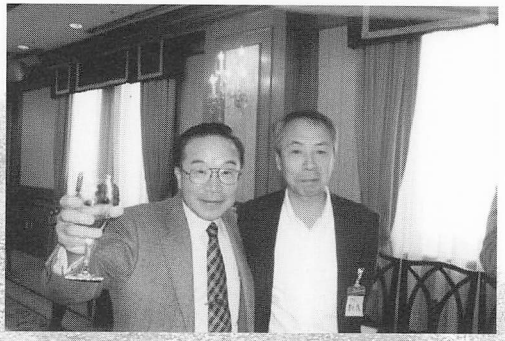
④中学(旧制)4年の春、グライダーの特訓を受けて三級滑空士の免許を取得。〝花の予科練〟を志したが、母に泣いて止められ断念、飛行機に乗れるという航空科学専門学校(後に東海科学専門学校、戦後は東海大学に編入)進学のため上京。東京は毎日が空襲で見渡すかぎりの焼け野原だった。約3か月間は防空壕に住み通学。

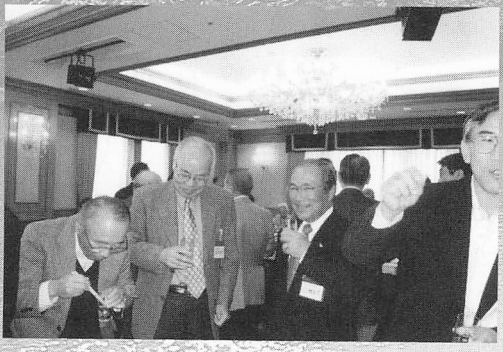
⑤予期こそせよ敗戦によるすべての価値観の変貌には強烈なものがあった。何もかもが希望と夢に満ちたものの、その一方、いかに空腹に耐え抜くかが日々の勝負だった。

⑥この歩み

どこで尽きるか八十路越え

懇親会スナップ





狐に化かされた話

木村　つた江（市島町）

私が小学校低学年の頃（昭和二年）に、村の大人から聞いた話です。

「森坂の峠で○○さんが狐に化かされて、一晩中、山の中をうろうろしとったんやそうな」

「そうかい○○さん、前の日に福知山まで買い物に行ってくる言うて、お昼過ぎに出掛けたんやて。終列車で市島まで帰ったんやけど、近道しよう思うて森坂の峠の下まで提灯の灯りを頼りに帰ったんやて。それまでは覚えとるんやけど、それから先がよう分らんようになって、一晩中歩き廻って気が付いたら朝になっとったんやて。手に持っていた提灯ものうなってしまっていたんやそうな。狐に化かされたらしい言うて、青い顔して朝帰りしたんやそうな。そして、それからが夫婦喧嘩で大騒ぎやったそうや」

この話は忽ち村中に広がりました。そしてそれから、

青年団の中にも、この峠で狐に化かされたと言う人が何人か出たそうです。

その頃、私は、狐って本当に人を化かしたりするのかしら、気味が悪いだけでなく怖いなあと思っていたのです。

森坂の峠道は幅一メートル程の石ころ道で、西側には樹木が鬱蒼と茂っていて昼でも暗い峠でした。

それから何年か経って、私が大人になった頃に、この話には裏があることに気が付いたのです。

その頃の福知山は、京都府内では京都市に次いで2番目に市制が施行されたのです。福知山市は天正七年（一五七九）明智光秀が丹波を平定し、この頃から城下町としての形態を整え、その後、明治四年（一八七一）廃藩置県まで、三百年近く城下町として繁栄しました。明治三十一年（一八九八）には歩兵二十連隊が設営され、軍都としての性格を強める一方、翌年には大阪～福知山間の鉄道が敷設されました。国鉄福知山線です。

この鉄道の終着駅が、市島駅から二つ目の近くて歓楽地のある福知山市です。若い男衆だけでなく、中年の男たちにも恰好の遊興街だったのです。そして猪崎新地には遊廓も出来ました。

村の男たちの朝帰りの言い訳は、みんな狐のせいにしていたようですが、狐こそいい迷惑です。口が利けたらさぞ怒ったことでしょう。

昭和三十一年（一九五六）売春防止法が公布されて遊廓は姿を消し、狐に化かされた話も聞かなくなりました。

私が子供の頃によく聞いた狐の話――暗い夜に山裾にちらちらする狐火、狐日和、狐つきの家、そして人、狐につままれたなど、狐の姿、形はともかく、あの細いつり上がった目。大きく裂けたような口。尖ったような耳と、太い尻尾。すべてが嫌いでした。それなのに稲荷神社のお使いとして庶民に崇められているのが納得出来ませんので、広辞苑で調べてみましたが、何とも気味が悪く得体の知れない動物だと思うと、どうしても好きになれません。でも、あまり詮索していると私自身が狐つきになりそうで、この辺りで終わりといたします。

欅とふくろう

原谷洋美（山南町）

丹波下滝の八幡神社には、御神木のようなケヤキの巨樹がある。幹周りは大人三人の両手を繋いでも抱えきれない程だから、樹齢は何年になるのだろうか。物心付いた時から毎朝毎晩仰ぎ見たケヤキの大きさと、還暦間近になって年に二～三回眺める大きさがさほど変わらないのは、当時から余程の巨木であったのだろう。神社そのものは、もっともっと広くて荘厳な佇まいだったように思うのだが、自分の目線が高くなり、少しは見聞も増えて比較するものが多くなった分、故郷のお宮さんは小さくなっていったようにも思う。

当時のお宮さんは集団遊びの場所でもあったが、毎日の御参りはさておき〝おついたち〟や〝常夜灯の灯明当番〟など、少し改まって神社に行くことも多かった。鎮守の杜が村の真ん中にある、昭和半ばのまだまだゆったりとした時代だった。

御参りの仕上げは必ず、地上に盛り上がって蛇のように長く伸びた一本の根っこの、ケヤキ特有のモザイク模様のような樹皮が剥がれた窪みに、米袋から神饌のお米を一つまみ御供えし、大ケヤキに手触れ、その手を自分の躰に当てて、大いなる樹勢と樹の命を貰うことだった。

春先、一枝一枝の梢の空気がモヤモヤとし、巨樹が薄桃色の塊になると、芽吹きが始まる。日毎に新芽は大きくなりオレンジ色を帯びた新緑の葉っぱが密になると見慣れたケヤキが立ち現れる。厚く濃い緑の繁みは、夏の間中蝉しぐれを降らせながら威風堂々とお宮さんを守っていた。辺り一面に落ち葉が舞い敷く秋は、神社の隣の我が家の畑はケヤキの葉に埋もれていたし樋掃除も頻繁にしなければならなかった。すっかり葉の落ちた闇の中のケヤキは、そそり立つ大きな竹箒のようであり、解剖図で目にする神経叢のようでもあった。底冷えのする丹波の冬の夜の樹影は、百手千手を掲げた妖怪が覆い被さって来るようで、外のお便所に行くのは、それはそれは怖かったものである。五年前に大きな病が見つかった折り、次の歌を詠んだ。

○青空へ飛びゆくけやき葉　影とんぼ、竹とんぼ飛ばしても一度あそぼ

そんな巨きなケヤキの二股辺りにフクロウが棲んでいた時期がある。「きっと大きな洞があり、そこを巣としているのだろうな。いつか覗いてみたいな」と見上げたり、「番いのフクロウが棲んでいて、卵を孵すかな」と想像しては楽しんでいた。けれども必ず、夜になると、「ホッホッー」と太い声で鳴く。「ホッホッー」と太い声だけが夜に響く。元気な時は、丹波の夜の静寂は気にならないが、落ち込んでいる時は、フクロウの鳴く夜は無性に淋しかった。フクロウに励まされているような、鳴き声に小馬鹿にされているような、と出口の無い夜がいつまでも続く怖さがあった。「ホッホッー」を温かいと感じた折りと、寂しいと思った比率は、さてどちらが多かっただろうか。

○赤青の天神祭りの提灯に灯をともすころ騒立つ梟
○ふくろふも代替はりせしと兄の言ふ今夜の宴父母(ちちはは)居らぬ

昨年の初冬、ある出版社から『吟詠辞典・現代短歌』なる本に次の歌を掲載したいとの依頼があった。

○ゲルマンに隣人帰りて銀の森ふくろふ啼く夜は月が出でたり

「隣家の住人であったドイツの女性は野鳥を呼ぶのが巧みで、広い庭にはたくさんの鳥が集まって来た。彼女が帰国した後もまだ十指に余る種類の野鳥がやって来る。夜の野鳥の一声は、幼い日の丹波の夜を思い出すに充分の静かさと畏れである。」と綴って編集部に送り返すと、今年の初夏に出版された本には「作者の隣家にはかつてドイツ人の夫人が住んでおり、彼女が与えた餌に幾種類もの野鳥が飛来し、今もやってくるそうだ。作者はそこに、故郷で耳にしたフクロウの鳴き声を重ねたのだという。月夜を詠んだ幻想的な作品である。」との遠藤千舟氏の講評と共に記載されていた。

欅もふくろうも、今もなお、かけがえのない風景であり、心の景色でもある。

学徒動員の思い出

藤井宏次（黒田庄町）

昭和二十年四月、太平洋戦争も末期、米軍の大部隊が沖縄に上陸して日本軍守備隊との間に激烈な地上戦が展開された頃、柏原中学校の三年男子生徒は学徒動員令により学業を中止して軍需工場勤務を命じられた。

勤務先は空襲を避けて地方の柏原中学校に疎開していた東洋ベアリング社の飛行機部品の工場で、当時は若い女子挺身隊のお姉さん達が生産の第一線で働いていたが、沖縄を取り囲む数百隻の米軍艦の攻撃に使用される特攻機（体当たり戦法で一機一艦撃沈を目標に陸軍戦闘機「隼」や海軍艦上戦闘機「ゼロ戦」等に二五〇キロ爆弾一発と沖縄までの片道燃料のみを積んで、主として南九州の知覧基地から特攻隊員が搭乗して沖縄に向かった）の激しい消耗に伴い軍用機の生産増強が軍部より強く要請され、ベアリングの生産も学徒を投入して昼夜兼行の突貫作業となった。

学徒の一日は先ず午後七時校庭に整列して、台上の校長先生ならぬ工場長に向かって一斉に「おはようございます」の挨拶で始まった。

工場長も厳しい顔付きで「おはよう」と答え、種々訓示を与えたりした。工場長不在の時は配属将校が軍服・軍帽・長靴・帯刀姿で代理を勤めた。

工程は材料の鋼棒を旋盤で輪切りにして大小二種の輪を作りそれを研磨機にてピカピカに磨き上げ、他工場で作られた小さな鋼球（十個位）を大小二枚の輪の間にはめ込み保持器を使って固定して組立完了となる。

学徒の大半は旋盤と研磨部門に配属されたが、私はやや弱体のため同郷の宮崎隆道君達と共に組立部門に配置された。

私達組立部の仕事は単純手作業の反復で自分達の作っているベアリングが飛行機の重要部品の一つであるとの実感はなかった。旋盤や研磨部門はすべて立ち

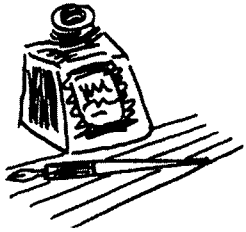
仕事であるのに比べて組立部門は着席仕事で、この点幸運であった。

夕方七時から翌朝七時まで十二時間の作業に対して休憩は十二時に僅か十分のみで、その間に夜食弁当を食べるのであるが、困ったことは弁当がすぐに腐ることであった。勿論、当時は冷蔵庫やエアコン等はなく工場のすべての窓は爆撃の目標にされないよう厳重な燈火管制下にあり、内側から暗幕がピッタリ張りつけてあって内外の空気の流通は皆無の状態であった。結局アルミ弁当箱は使用を止めて柳行李式の弁当箱（風通しが良い）に変えておかずも梅干しのみとなった（腐敗防止のため）。強烈な機械油の匂いと凄まじい高温のため、工場内での夜食は全然味気ないものであった。

それでも働くためには無理して口に入れた。朝七時に仕事終了、すぐに柏原駅に急ぐ。当時は石炭不足のため列車の便数が大変少なくて長時間駅で待たされたので駅長さんにお願いして貨物列車の積み荷の上に乗せて頂いたこともあった。ある時は積み荷が丸太のため途中の奥野々のトンネル通過の時には全員丸太の上で腹這いになった。トンネルを出たら皆の顔は煤煙で真っ黒で、お互いに笑い合ったこともあった。当時は福知山線が未電化でＳＬのみの時代であった。

午前八時半頃帰宅。仮眠のあと、午後五時半頃家を出て柏原に向かうのが毎日の日課であった。過酷な条件下での過密労働、最悪の食糧事情などを振り返れば病気にならなかったのが不思議なくらいである。

動員生活五ヶ月目に戦争が終結した。敗戦の口惜しさや悲しさと共に「あゝ、助かった」とホッとしたのも事実である。



同郷人との感動の出会い

原　川　美恵子（春日町）

本誌『山ざる』36号（平成十七年）の「私の職場」欄に紹介させて頂きましたが、その職場でのある出来事を記して見たいと思います。

私は、今年（平成二十年）三月、ＪＡ神奈川県厚生農業協同組合連合会を定年退職しました。職場は「デイサービスセンター」で、介護保険によるデイサービス事業を実施していました。

このデイサービスは、神奈川県でも大規模に属し、一日五〇人の受け入れが可能でした。ここへお見えになる高齢者の方は、介護保険による認定を受けた方であり、何らかの介護が必要になった方々です。そのため、地方から子供の住む町へ引っ越してきて、子供のそばで暮らし始める方も多くいらっしゃいます。

ある日、私が新規利用希望者宅へ契約、説明に伺ったときのことです。ケアマネージャー同席のもと、若いころの話や病気になった経緯などのお話をお聞きしていました。この方もやはり地方から一人娘さんの住む、秦野市へ越してこられたということでありました。

田舎の家はそのまま残して、こちらで新しくマンションを購入し、ご夫婦で快適に過ごしておられました。

私「田舎はどちらですか？」

「兵庫県です」

私「私も兵庫県です。兵庫県のどこですか？」

「丹波市です」

私「えっ、私も丹波です。丹波のどこですか？」

「石生です」

私「私は春日町です。すぐ近くですね」

更に話が弾みました。話をしていくうちにこの方も、柏原高校の出身でした。その後、国際基督教大学に進まれていました。栢陵同窓会名簿を持ってこられて、この方と私の名前を確認しあいました。

また、国際基督教大学は私の娘も卒業していたので、二人の名前も確認しました。同郷人というだけで、とても懐かしく、昔の田舎の話をし、初めて知ったそ

の時から先輩、後輩の親しみを感じました。
丹波から東京の大学へ進み、某会社の会長までお勤めになり、立派な人生を送られた方です。先輩の社会でのご活躍に尊敬の念を持ちました。
今年定年退職した私が、これからの人生を謳歌したいと思うようなことを沢山経験してこられていました。おうちには、ゴルフのホールインワン賞のトロフィも、ご自慢の一つでした。
私は、この神奈川県秦野市に三四年住んでいます。この市は丹沢山脈があり、水、空気がおいしく、新宿からも一時間あまりで、人口約一六万人の市です。
第二の故郷としてこの秦野市を選択され、この秦野市の良さを理解してもらい、楽しく暮らして頂きたいと願うばかりです。
こんな不思議な縁もあり、知らないで近くに暮らしている場合もあるでしょう。故郷との縁は強いつながりと親しみを感じるものであることを、身をもって強く感じました。

氷上町南由良の旧家

石橋治郎八氏を回想して

石　橋　正　康（春日町）

私は現在の神戸（鳴尾村）で昭和十二年三月生まれ、四歳で曾叔父が改築してくれた丹波・氷上郡春日町黒井の母の里に転居しました。

同じ三月早生まれで、身長も一番低く、小中学時代苦労したのは治郎八曾叔父（と呼んでいたが祖母の弟）も同じだったようであります。私は腕白もので、近所の子どもに怪我をさせたり、授業時間抜け出し先生に往復びんたを食らったりして、かなり母を泣かせました。戦後の食糧難の記憶は同世代共通の話題です。

柏原高校卒業までの十四年間しか丹波には居住していなかったが、盆と正月には必ず帰っていたので、幼少期を過ごしたところが故郷と思っています。三十年ほど前、黒井小中学校の同窓会があり、懐かしいガキ大将の頃の仲間が「お前は都会へ出ていい思いをしたろうが、黒井に帰って来てもお前の居場所はないで」と言われ傷つきました。

平成九年四月、私が定年になると同時に、母が骨粗粗相症で倒れ、看病に毎月二週間、千葉県我孫子市より黒井に通い二年半看病しました。その間、介護施設のお世話になったり、ヘルパーさんのお世話になったり、デイサービスに通ったりで、最後は脳梗塞で倒れ救急車で入院、平成十一年十月、八十九歳で母萩子が他界。その間、母のご機嫌のいいときに「私も死んだら丹波の墓に入れてくれるか」と聞いたところ、「お前は次男だから駄目だ」と言われ、またまた傷つきました。望郷の念も次第に薄れいく故郷をしのび、パソコンで気楽に思い出を書いてみようかなと思い、古いアルバムを開いてみました。昭和四十年頃はミニスカートがはやり、私も見違えるほどスマートにやせていました。その頃の飲み会では必ず「デカンショ節」を歌わされ、「山がのさる」が芝居をしたものです。

『山ざる』誌の読者の共通の話題として、会報『山ざる』初回号からの表紙「山ざる」の題字揮毫は四代目、氷上郷友会関東支部長の石橋治郎八氏で、その人の思い出を書いて見ましょう。

氷上郷友会の歴史は古く、歴代会長には織田子爵、田男爵、安藤農学博士と郷土の名士が名を連ねている。同氏のことを知る人は殆ど他界されております。

石橋治郎八氏は、私の祖母の弟で石橋家の長男です。治郎八の父は、江戸時代から代々黒井の大庄屋を務めた家柄だった片山本家の次男で、名代の偏屈者、裸一貫で片山家を飛び出し、明治初年、戸籍制度が出来たことで石橋姓を名乗ります。この私の祖爺さんも裸一貫の古着呉服商から儲けたお金で田地を買いあさり大地主となりました。

石橋治郎八氏が昭和三十七年に七十四歳で著わした自叙伝『シルク紳士まかり通る』によると、

私の祖母が、治郎八（長男）が十年間生まれないので養子を取り石橋家を継がせ、その養子が北海道開拓に行き失敗、破産状態になり苦労し、関東大震災でまた破産したが、石橋家の長男として家を再興したシルク王、波乱万丈の人生が記されています。その後の努力も実り、丹波を愛し黒井にいろんなものを寄付され、黒井小学校の北に偉業を称えた碑が今も残っています。

『山ざる』誌創刊の頃の昭和三十七年から四十七年は平塚工場や横浜の市ヶ尾の社宅にいたので、よく横浜市磯子区屏風ヶ浦のお宅や沼津の別荘にお邪魔して、当初の頃はお見合いの世話をしてもらったり、結婚後は夫婦で伺い、石橋生糸の今後の展開構想など聞かされました。「無」の一文字を愛され、無の字の額が玄関にかかっていました。

昭和四十六年八月二十五日、八十一歳六ヶ月で他界された（三七回忌も昨年過ぎた）。横浜の久保山光明寺での盛大な葬儀の模様の写真が出てきた。大変お元気で年寄り若かっただけに、余りの早さを信じられない感がありました。

私は何の因果か治郎八曾祖父が石橋生糸工場のあった千葉県我孫子市で墓も買い、ボランティア活動に励んでいます。氷上郡も丹波市となり、今後益々関西圏の観光都市として発展することを願っています。

母と暮らす丹波にて詠めり

井出恭子（市島町）

十代に出たる丹波に半世紀ぶり
　母と暮らさんと戻り来たれり

父亡き後七年間、一人暮らしを頑張ってきた母も昨年夏、熱中症で入院してそれ以降は、不可能となり、他に選択の余地なく、仕事を辞め家族（夫）を離れ、単身で故郷に戻ってきた私が、日々の思いを稚拙ながら、短歌というより短歌らしき三十一文字に込めて綴ってきた。多分、数多い会員の皆様の中には、その道の専門家や先輩の方々がいらっしゃることと思いながら……恥をしのんで。

目を見張るほどに変われる故郷の
　道走りつつ亡き父偲ぶ
風が鳴き雨音強さ増す夜は
　母ひとり住む故郷思う

父逝きてはや七年経つ故郷に
　ひとり住みいる母を訪う
母老いてひとり暮らせる故郷の
　行きも帰りも霧の深さよ
数々の病いとたたかい父は逝き
　その分までも母は生き居り
残されし母との時間かぞえいる
　丹波の里の霧の深さよ
点滴を受けて眠れる母の頬
　若かりし頃の笑顔偲ばす
生きて居るただそれだけで意義ありと
　思える母の暮らし守りたし
夫より子より孫よりわれにとり
　最優先は老いたる母なり
米寿まで生きたいと言いし父は亡く
　母はひとりとなりて迎える
金木犀はほのかに香りて在りし日の
　父の背中のなつかしき部屋
夫ひとり残したるまま故郷の
　母との暮らしわれは選びぬ

故郷に母と暮らせるわがもとへ
子らより届いたファックス付き電話
老い母との暮らし選べる故郷に
孫より「帰って」とメール届く
子や孫と離れ住みいる淋しさは
友ととりいるランチに癒す
息子には無理も甘えもはばかれる
母の思いをわかりすぎいる
年毎に老いゆく母の細き身を
われに重ねて淋しく見やる
笑うことも会話もとぎれ終日を
赤子のごとく母は眠れる
躁とうつ繰り返し眠る母の老い
見つむるわれは戸惑うばかり
真夜中に足音しのばせ静かなる
母の寝息を確かめ眠る
笑顔失せ老いの色濃き母とふたり
迎えし元旦穏やかに過ぐ
音もなく降り積もりたる初雪を
母に見せんと窓開け放つ

食細き母の残飯待ちわぶる
小鳥さえずる朝の庭かな
父の居ぬ庭に鶯帰り来て
今年も春を告げてくれたり
桃の蕾ややにふくらむ気配あり
母の気力も快復なるや
誰からのメールも届かず日は暮れて
空見上ぐれば淋しさつのる
冬眠より目覚めたる母か輝きの
戻れる目にておしゃべり続く
新緑の息吹きとともに快復の
兆せし母の生命力は
快復のかすかな兆し沐浴の
母の背中に戻れる肉付き
きゅるきゅると蛙鳴く夜は眠れずに
夫や子想い祈りおりたり

ひとつの奇遇

―鴨庄村の戦中戦後―

丸川　健三郎（市島町）

戦中戦後と呼ばれた時代も遙かな昔になってしまったが、その記憶は簡単に消え去るものではない。全く思いがけずよみがえる記憶もあるし、思いがけない出会いがあって、記憶が呼び覚まされるということも無いわけではない。私の場合も以下に書くような奇遇に触発されて、たくさんの過去がよみがえってきた。個人的な思い出に過ぎないとも言えるのだが、それはまた、私の故郷、鴨庄村（現在、丹波市市島町鴨庄（カモノショウ）地区）の歴史の一駒と無関係ではないのである。

＊鴨庄村への疎開＊

実は鴨庄村は私の生まれ故郷ではない。太平洋戦争末期、昭和二〇年五月に生まれ故郷である徳島市から戦争疎開で移り住んだところが鴨庄村である。私の小学三年生の時である。既に東京、大阪などは空襲をうけて壊滅的打撃を被っていた後のことだが、次は中小都市が危ないと囁かれていた。その頃はまだ徳島市は無傷だったが、次の標的にならないものでもあるまい、と私の両親は考えたらしい。そこで少しの縁を頼りに安全な所への疎開を考えた。徳島市は我が家の疎開のすぐ後、七月初旬に空襲を受けているので、これは的確な判断だった。徳島の空襲では市内に数軒あった親戚のすべてが被災し、命は無事だったものの家と多くの家財を失っている。それに比べて我が家は人的にも物的にもほとんど無傷で移住ができた。荷物が一個届かないことがあって、母はその荷物に入っていた道具の数々を数え上げては嘆いていたが、「被害はたった荷物一個だけ」という言い方もできたはずだ。

徳島にくらべて鴨庄村は別天地で、日本中でもっとも安全な場所と言えたかも知れない。何しろここは、「丹波の山奥」の表現がぴったりあてはまるような村である。当時村へ来た疎開者の数は多く、小学校の児

童数で言えば一学年六〇名のうち疎開者が一〇名ほどになる場合もあった。

さて、疎開は親にとっても大変だっただろうけれども、子供だった私にとってもかなりきつい体験であった。大きなカルチャーショックと言えたかも知れない。転校早々にいくつもの試練が待っていた。農作業もそのひとつで、村では小学三年生と言ってもちょっとした草刈りくらいは出来なくてはいけなかったのである。我が家が転居したのは丁度、麦の取り入れから田植えに至る農繁期が始まる時期となっていた。農繁期には学校が「田植え休み」と言う名の休校になる。たとえ小学生といえども働き手として期待されていたからである。農家でない家庭の子供にとって田植え休みは自由に遊べる日々となるはずだったが、そのような子供達のためには勤労奉仕が用意されていた。何しろ戦争中のことである。暇な子供達は手分けして、忙しそうな農家へ手伝いに行くことになった。私もある農家に手伝いに行ったものの、小学三年生のひ弱な都会ッ子が役に立つはずはない。手伝いに行ったのはちょうど麦刈の真っ最中のことだったが、私は麦畑の横のあぜ道にすわりこんで、その家のおばあさんからもらったおやつを食べたものだった。しかし、何も手伝えない自分が実に情けなかった。

我が家は疎開の当座は休業中の造り酒屋の事務室を借りて生活していた。家の前に花壇にするべき庭と裏庭に物干し場の空き地があったが、それらをにわか仕立ての畠としてサツマイモなどを作り始めていた。やがて終戦の年の夏から始まる大変な食糧難が来ようとしていた。豊かな農村に暮らしていたとしても、食べ物が自然に手に入る訳ではない。その頃主食は政府の統制を受けていたので、疎開者にとっては村の役場で受け取る食料配給がすべてであった。配給以外で手に入れたものはいわゆる「闇米」で、法律に触れることになる。その食料配給が終戦のあたりから急にひどい、乏しいものになってきた。米の割合がどんどん減ってきて、粉や芋、豆などに変わってきた。結局、配給に頼っている家庭では、餓えを凌ぐために自分で何とかしなくてはならなくなり、我が家でも子供の仕事として野草摘みが日課のようになっていた。今でも食べられる野草ならよもぎのほか何種類も知っている。農村

ではあぜ道の草といっても所有者のあるものだが、子供のよもぎ摘みくらいなら叱られることはなかった。よもぎはご飯の増量材として使っていたのだが、その「ご飯」が少なくなり、芋類が増え、「すいとん」までもがごちそうなってきた。当時の食べ物についての「うらみ」や苦労話なら子供だった私としても山ほどあるが、これは別の機会にゆずる。

＊村へやって来た研究室＊

我が家が疎開して間もなくの頃だが、鴨庄村へ大学の研究室が疎開してきた。これは村人にとってはかなり唐突な話だったはずだ。大学の人たちは村役場の空き部屋を借りて教室としたが、道路から中が丸見えのガラス障子の部屋だったので、私も学校の行き帰りに大学の人たちの勉強ぶりを見ることになった。教室の中には粗末な机と椅子と黒板があり、数人の学生が先生の講義を受けているのが見られた。先生も学生も白衣を着ているのが異様に映った。その白衣と言うのは、病院のお医者さんや看護婦さんが制服のように着ているものと同じであるが、当時の私には見慣れないものであった。

村へやって来たのは大阪大学の仁田勇教授の研究室だった。仁田先生は結晶化学の分野で高名な科学者で後年（昭和四一年）文化勲章を受章される方である。（注、仁田先生は昭和一八年、四四歳で帝国学士院賞を受賞なさっている。当時すでに新進の学者として注目される存在だったのであろう）。当時の研究室の標準構成は教授一名、助教授一名、助手二名、大学院学生数名、卒業研究の学生数名だったはずだから、そのとき鴨庄村へ来たのもこれくらいの人数だったことだろう。その頃、既に大阪は大きな空襲被害を受けていたので、大学の研究室はすべて研究続行不可能だったはずで、どうしても研究を続行したければ、どこかへ疎開するよりほかなかったであろう。仁田研究室も受入れ先をあちこちと探し、いくつか断られた後に鴨庄村にたどり着いたことが考えられる。何かの縁があったのか、あるいは村長さんの評判を聞きつけて、疎開を頼み込んできたのかも知れない。

当時の村長さんは名村長の誉れ高い吉見傳左衛門さんであった。この方は村に巨大な貯水池（神池、ミケ

と呼び慣わしている）を作ったことなどに、目立った功績を残された方である。（注、この貯水池工事は村を挙げての大工事であったが、昭和九年から始まり、昭和一三年に一応の完成を見ている。鴨庄村では農業用水を小さな谷川だけに頼っていたため、それまでしばしば旱害に見舞われていた。この貯水池完成によりこの災害を克服することができた）。

吉見村長は我が家の疎開の頃すでに高齢であったけれど、見るからに穏やかな方で、村人からは文字通り敬愛されていた。記録によると昭和初期から終戦後まで二〇年近くに亘って村長として在職なさっている。ワンマン村長の一面もあったかも知れない。この研究室疎開の受け入れも、「お国のためだ」との村長の一声で決まったようである。役場の一室を教室に提供したほか、役場の横の倉庫のかなりのスペースも実験室として提供されていた。研究室の方々の寄宿先も村のあちこちの公会堂などを利用して用意されていたようである。仁田先生ご夫妻は農家の離れを借りて住まわれた。何しろ狭い村のことである。奥さんの服装だとか、七輪を使っての炊事の様子までもが、村人の口の端に上ったようである。ただし、これはずっと後年、母から昔話として聞いた話で、当時まだ子供だった私の知るところではない。当時は大学の先生とまでは知っていたが、大阪大学であることも、まして教授の名前などは知る由もなかった。

大学などとは普段無縁の村人にとって、大学人は物珍しい好奇心の対象でもあった。眼鏡をかけて、多少蒼白な顔立ちの方々が、何か訳の分からない、それでいて何か「お国の役に立つ」かも知れないことをやっているらしい、と村人や私の両親は思ったことであったろう。私はずっと後年になって、その中の一人に会うことになるのだが、勿論当時はそんなことは知るはずもなかった。私の親、特に母は都会育ちだったから都会的なものに強い関心、ないしはあこがれを持っていたようである。都会に戻りたいが戻れない、と言う状況のためでもあったろう。私が中学卒業の頃だったと思うが、将来の進路をいろいろ考えていたときに、母が唐突に、「健ちゃんは不器用だし、気が利く質（たち）でもないから、しっかり勉強して大学の先生にでもなるといいわ」と言ったことがある。我が子にたい

して心配と期待が入り混じった大胆な言い方だが、その内容はともかく、「大学の先生」と言った母の頭にあったものは、あの終戦の頃の大阪大学の先生方であったに違いない。

＊疎開者の戦後＊

疎開ブームは長くは続かなかった。大部分の人は昭和二〇年になってから村へ来たのだが、その八月にはもう終戦を迎えたからである。大阪大学の研究室もやがて村を去り、クラスの疎開児童達も一ヶ年も経たないうちに半減した。しかし、私が中学卒業の年、つまり昭和二七年三月まで残ったものも六〇名ほどのクラスの中で五名ほどいた。残ったのは勿論、都会へ戻っても生活の見込みが立たないからである。といって村にそれほどの生活のあてが有るわけでもない。残った疎開者は村の親戚を頼りに疎開された方々が多かったが、だいたいの方が三反ほどの田畑を手に入れ、俄百姓となって食料の自給を始めていた。（注、一反は約一〇アール）。三反ほどの田畑を手に入れると言う点では我が家も同じだった。しかし、三反という規模は小さなもので、一家八人が一年間食べていけるかどうか、きわどいところである。我が家の場合も、山際の痩せ田ばかりであったこともあって、毎年九月初旬には米櫃は空になっていた。それから次の新米が収穫できるまでにはどうしても一ヶ月程度の空白ができてしまうのであった。さらに問題なのは疎開者に収入の手段がないことだった。村には農業と林業以外に産業と言えるようなものはない。私の父も終戦までは軍需産業（東洋ベアリングＫＫ柏原分工場）勤務で羽振りが良かったが、終戦と共に失職し、村で戦後に立ち上げた瓦工場になんとか勤めを見付けてはいたが、慣れない仕事で苦労をしていた。その後、紆余曲折、結局は村を去ることになる。当時、疎開者の多くがいわゆる担ぎ屋（当時は闇屋、ないし闇米屋と呼んでいた）の真似事を始めたのもやむを得ないことではあった。

＊村を離れて＊

さて年月は流れ、私の「奇遇」を語る段となる。しかし、素直な奇遇ではなくて、多少の屈折があったのだが、その経緯をかいつまんで述べることにする。

私は鴨庄中学校と、続いて柏原高校を卒業した後、京都の大学と大学院、大阪の民間会社を経て、昭和三七年（一九六二年）春から東京大学物性研究所に勤めることになり、さる研究室の助手になった。当時の物性研究所は東京都港区六本木にあり、約二〇の研究室から構成されていた。因みに各研究室の編成は教授一名、助教授一名、助手二名、その他として技官、大学院学生若干名である。その研究所にホシノ（星埜禎男）先生とおっしゃる教授がおられた（正確にはまだ助教授だったがやがて昇進された）。私の研究室の教授とは研究上の交流もあり、懇意の間柄であった。しかし、私とは年齢差が大きかったこともあり、「顔見知り」と言う以上の関係にはならなかった。実はこのホシノ先生が鴨庄村に来ておられたのである。しかし、当時はそんなこととはつゆ知らず、この奇遇もいわゆるニアミスで終わるところであった。

＊奇遇＊

再び月日は流れ、私は五年半の物性研究所勤務の後、北海道大学に転勤になり、それからまた幾十年が過ぎて、私の還暦も過ぎて、ぼつぼつ停年退職も考えねばならない年頃となった。平成一〇年（一九九八年）のことである。その頃全く偶然に、ホシノ先生がある雑誌にご自分の研究の回顧を書いていらっしゃるのを読む機会があった。そしてその中の一節に次に記すような箇所があった。因みにホシノ先生はX線や中性子線を使っていろんな物質の結晶構造（原子配列）を調べるという研究分野で優れた業績を上げられた方であり、日本結晶学会の会長なども勤められた方である。なお、この文を執筆された時は先生の停年退職の後、十年ほど経っていたはずある。

「X線を始めて扱ってから五〇年になる。阪大の仁田研究室で卒論（卒業論文のための研究）をやったのが昭和二二年（一九四七年）であるから、丁度半世紀を経たわけである。大阪時代は敗戦後の混乱期であったが、幸いにも戦争中に疎開してそのまま分室になっていた丹波の山村で卒論をすることになり、シーレックス管球を使ってX線を出した。……」

私はこの文中の「丹波の山村」を見逃さなかった。これは鴨庄村かも知れないとぴんとくるものがあったので、早速ホシノ先生に手紙を書くことにした。「丹波の山村」とは鴨庄村のことではないか、との問い合わせである。はたしてその通りであった。先生からは便箋四枚にびっしりと書かれたご返事を頂いたが、その一部を引用する。

「お手紙拝見しました。そうです正に氷上郡鴨庄村です。貴兄が同村のご出身とは知りませんでした。すぐ筆を執りました。……」

「鴨庄村では役場のとなりの倉庫を借りて三室を作り、奥の部屋にはX線装置を入れ、道路に面した前の部屋には薬品をおいたりガラス細工の設備をしたりしたと記憶しております。……」

「その頃、北奥（鴨庄村北奥）の高見さん（女性）が研究室に手伝いに来てくれました。……」

「美しい村でした。人情ゆたかな所でした。吉見（傳左衛門）村長さんはとても立派な方でした。思い出はつきず、一生忘れられぬことどもです。……」

（注、括弧書きはホシノ先生ではなく筆者の補注）。

私の勘のとおりホシノ先生は鴨庄村に来ておられたのだった。しかし、先生のお手紙は私の想像をはるかに越えていた。鴨庄村の研究室は単なる間借り以上のもので、そこには当時の最先端とも言える高級な実験装置も運び込まれており、実質的な研究が行われていたのである。それに終戦後もしばらくそのままになっており、大阪での研究室の再開までの間、十分に役立っていたのである。お手紙には当時は電力事情がひどく、電圧変動が大きかったので、実験はすべて深夜に行っていたことなども書かれていた。なお、先生は卒論研究を行ったのは昭和二二年だったが、昭和二〇年の疎開の最初から研究室の一員として、参加されていたようである。お手紙には村での苦労のほか、ときには神池まで水泳に行ったことなども書かれていた。

仁田研究室にとって鴨庄村疎開はかなり有益だったことだろう。この研究室が戦後いち早く日本の結晶学をリードする存在になり得たことにも、この疎開が大きく貢献したのではないだろうか。それにしても村からは研究室への部屋の提供のほか、お手伝いまで提供

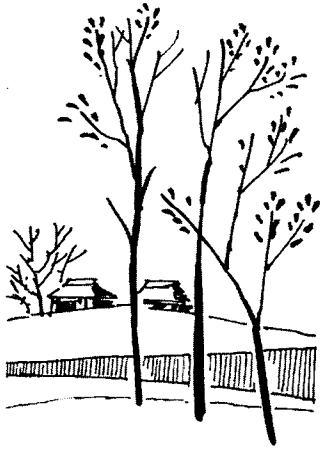
していたとは驚きであった。お手紙の中の高見さんにも出来れば連絡を取りたいと思ったが、私が村を出てから数十年もたつことと、村には高見姓も多く、級友だけでも四人もいたくらいだからと今日まで探さずにいる。村に大阪大学からの研究室疎開があったことも、記憶に留めている方は最早少ないだろう。

ホシノ先生には是非お目に掛かって、さらに詳しく昔のことをお伺いしたいと思っていたが、お手紙を頂いた後しばらくして、それもかなわぬこととなった。誠に残念でならない。

＊あとがき＊

思えば戦中戦後と言うのはひとびとがいろいろ希有な経験をした時代であった。ここに書いた戦争疎開もその一つである。これは、大げさに言えば都市文化と農村文化との強制的な交流である。我が家のような疎開も大学の研究室の疎開も平時にはありえないことである。この文化衝突が社会全体にどの様な影響を及ぼしたか、などという設問はちょっと大げさにすぎるが、私の家族にとっては疎開はどうしようもないほど大きな出来事であったし、今もその影響を引きずっている。ホシノ先生の研究者としての履歴にも、鴨庄村への疎開は何がしかの大きさで刻まれていたようである。

（ついでながら、鴨庄村については以前にも本誌に書いたことがある〈「山ざる」26号〉。あわせて参考にして頂けると幸いである）。



「氷上回廊」と「水分かれ分水界」

―「近い、速い、安全、便利」な運輸路―

八木　甫瑳子
（氷上町郷土史研究会会長）

日本海から瀬戸内海へ、こんな便利な運輸路（水路）おまへんで。北前船で玄界灘を通って下関回ったら大阪まで六ヶ月かかりまっせ。「氷上回廊」通ったら、たった六日で行けまっせ。

（西暦一七一四　大阪天満　岡村善八）

1　「氷上回廊」とは

本州横断の大水路「由良川・加古川の道」＝「氷上回廊」は、古来より日本海と瀬戸内海を繋ぐ水路として、流域に暮らす住民の生活を支え、夢を育み、人の暮らし向きから動植物の分布伝播にまで関わる様々な歴史を刻んできました。

この「日本海側（由良川）―中央分水界（石生水分かれ）―瀬戸内海側（加古川）」のルートは、両河川の結節点の中央分水界が、標高一〇〇m前後で（日本で一番低い）、幅は一二五〇mに及ぶ、谷中分水界を形成しております。

その「水分かれ分水界」より約五〇km北上し由良川を下ると、栗田湊に出、逆に約五〇km南下し加古川を下ると高砂湊に出ます。険しい峠を越す苦労もなく、人・物・文化・情報や動植物を交流させてきました。

近年、舞鶴自動車道や北近畿豊岡自動車道の建設事

「第30回“丹波ふるさと塾”フォーラム」より

業等に伴う発掘調査が兵庫県教育委員会埋蔵文化財課によってが行われました（西暦一九八〇～二〇〇〇）。

その発掘で調査研究された代表的な三つの遺跡〝七日市遺跡〟〝山垣遺跡〟〝市辺遺跡〟は、何れも「氷上回廊」の存在によって発展した歴史を物語っています。

このように、「氷上回廊」が大陸文化の導入路、国内文化の交流路として歴史面、自然科学面、経済文化面で当地方に与えた影響は相当に大きかったと容易に想像出来ます。

2 「氷上回廊」が運んだもの

人間―人・大陸からの渡来人（帰化人）・出雲族、大和族の交流点

文化―大陸文化の導入・大陸物資の伝達・大和文化の北上

稲作「磨製石剣の道」（細身末雄氏）、サヌカイトや黒曜石の移動、その他産物等

技術師（部の民）、綾部、土師部、物部、六人部、岳（いそ）部、（条理の民）、木地師（永源寺文書）

動植物―太平洋側、日本海側両方の動植物が混在し通過している（服部　保氏）

ミナミトヨ　カイバラエ―北方魚（絶滅）、ヤマメ、アマゴの混在

キベリムシ―帰化昆虫、南方より北方へ、ホトケドジョウ―北へ

カタクリの花（丹波市花）―群生南限地、ヤマモモ、モチツツジ―北へ、タニウツギ―南へ

物資―水運は、人馬より大量輸送が可能。特産物の交流、年貢米納入路

3-1 「氷上回廊」の歴史（古代～奈良時代）

(1) 七日市遺跡

旧石器時代の後期（約三万年前）から奈良、平安時代（約一一〇〇年前）まで続いた西日本最大規模の複合遺跡で、由良川上流竹田川流域に位置する（船着き場等関連遺跡発見）

七日市から船城方面の沼地にかけては、旧石器人のナウマン象などの猟場であった。狩猟に使われた石斧（サヌカイト）は四国讃岐金山産、黒曜石は隠岐島産

等、何れも、「氷上回廊」を経由してもたらされたものと考えられる（石器製作場も出土）

ナウマン象狩猟の様子はジオラマとなり、県立考古博物館（加古郡播磨町）に展示してあり老幼ともに人気があります。

(2) 山垣遺跡（棚原）

八世紀前半代、氷上郡衙東支所が置かれていたと考えられる。出土品多数。由良川上流竹田川流域に位置し、竹田川―黒井川―石生水分かれ分水界を陸送―氷上郡衙本所―加古川水運へ、竹田川―土師川―由良川水運、両水運の拠点

(3) 市辺遺跡

氷上郡衙本所があったと想定される氷上と、本郷船着き場とのほぼ中間に位置する。加古川水運の拠点として、氷上郡衙支所から送られてくる物資、氷上郡西部地域の物資を瀬戸内海―大阪―大和へ送受している。水運の拠点として役所機能を果たしていた。

3-2 古文書に見る「氷上回廊」の歴史

江戸時代　水運（船運）にかける政治的、経済的願望

岡村善八（大阪天満老松町回船問屋）の通船計画

・西暦一七一〇（宝永七）由良川加古川通運往来の願を出す（南部家文書）。

由良川―福知山―榎原―穴の裏峠―東芦田―佐治川ルートの改修

・西暦一七一四（正徳四）丹後・丹波・播磨三ヵ国高瀬舟通用計画書を出す（南部家文書）。

奉書十三枚にわたり、上記願いを綿密に書かれたもの。

・西暦一七一五（正徳五）由良川筋諸庄屋、岡村善八の通船計画反対意見書提出（南部家文書）（南部家は大庄屋筋　岡田由里　南部亘国氏宅土蔵にあったもの）

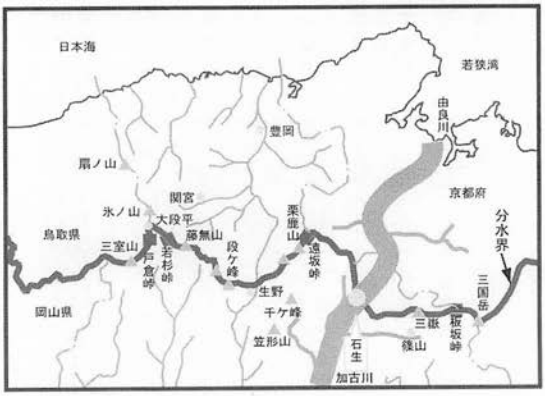
松宮構想　水分かれ分水界を掘り下げ、運河を造る計画　黒井川―高谷川へ　水分かれ資料館の展示物に文言あり。

・西暦一七三二（享保十七）久美浜代官海上八兵衛北国の船（北前船）―由良で小舟に移し―福知山―黒井―成松―津の国（大阪）、関東（幕府）の命を

奉じて、この辺の巡検有り（「若狭考」記述有り）

4　おわりに

こうして、大量輸送の役割を果たしてきた水路も、西暦一八九九年（明治三十二）、阪鶴鉄道の開通によって、大方の役割を終えることとなりました。しかし、この特異な地形が生んだ「氷上回廊」によって、当地方が受けた恩恵は大きく、この地形を利して更なる発展は古来よりの願いでありました。



「第30回“丹波ふるさと塾”フォーラム」より

この有意な水路を改良しようとする様々な努力の跡は前述しましたが、江戸時代中央集権体制が整い、経済が発展するに従い急速に大型プロジェクト（穴の裏峠切り下げ工事・水分かれ運河建設）の要望が高まってきました。

これらの計画が実現していたら、現在の丹波市はどうなっていたでしょうか。古代からの熱い願いと故郷の良さを見つめ直したいものです。

現在もまさに、主要自動車道や鉄道が走り、本州横断流通の大動脈を形成しております。

〈蛇足〉「氷上回廊」に運河が実現していたら東洋のミニパナマ運河となっていたでしょう。

今日、ＥＣＯが盛んに叫ばれている、この時期だからこそ、この運河計画を推進する意義が大きいのではないかと愚考いたします。やさしい山容を見せる丹波の山あいを数万トンの大船がゆったりと通っていく、想像するだに胸躍る光景ではありませんか。

丹波研究

鎌倉時代の丹波国氷上

日置孝彦（氷上町）

時代が変わっても、ずっと変わらないものがある。人と人とが深いご縁で結ばれているということである。縁（エン）は、えにし・よすが・よるべ・ゆかり等とも訓読する。ご縁には、さまざまな出逢いがある。お互いに気持が通じ合い、そして分かち合う喜びや楽しさ嬉しさは何物にも堪え難いものである。このような人々の温かな毎日は沢山のご縁で創られ彩られている。だからこそ色々な繋がりで出逢えたことの幸せを大切にしたものだと願う気持は、私一人だけのものではないと思われる。

その願を適えて下さる人がいる。元ＮＨＫアナウンサー鈴木健二氏である。キャッチ・フレーズは聴衆を引き付ける個性豊かな魅力溢れるもので強く印象に焼き付いている。「人は知るを楽しむと申します。人は多くのことを知って喜び、そしてまた喜びを他人に伝えて楽しむものだと申します。……」と人に親しみを込めて語りかける流暢な話術には気さくな人柄が滲み出ていました。

何でも知りたいことが大事であるし大切なことだと思われる。豊かな知識を身に付けた人の心から心へ楽しさ喜びが伝わって行けば人の心の輪が大きく広がって行くのである。年と共に忘れ去られて行くのが現実である。人間社会が歩んできた姿は歴史なのである。人に歴史あり、歌に歴史ありといわれる所以である。日本の社会は、大化の改新にはじまった律令政治が武家政治の成立によって終わった。そこで源頼朝が関東の鎌倉の地に武家政権を樹立して鎌倉幕府を開き武家政治が確立された鎌倉時代を紐解いてみたいと思う。

まず、鎌倉時代にはじまった武家政治を的確に把握することが先決ではないだろうか。武士が日本の歴史の舞台に登場し主役としての地位を固めたものの、京の都の朝廷や旧寺社の勢力は依然強く多元的な権力によって複雑に入り組んだ支配が行われたのも事実である。政治的には承久の乱、皇統の分裂などによって幕

府の政治的な力は大きく伸びた。社会や経済構造の変化には、幕府は必ずしも有効な手を打てなかった。政治・社会変動を背景に展開した古代仏教に対する一大宗教革新運動が起きた。仏教の庶民への解放、来世における救済の保証（現実否定）などが唱えられた。浄土系統では、法然は浄土宗、その弟子親鸞は浄土真宗（一向宗）、一遍智真は時宗の開祖になる。禅宗系統については、栄西が臨済宗、道元は曹洞宗をそれぞれが中国から将来する。日蓮による日蓮宗（法華宗）の開宗である。この六宗が開宗された背景には、既成の仏教教団や為政者からの厳しい弾圧があった。法然は四国の土佐、親鸞は越後、日蓮は佐渡島へ配流になったことが伝えられている。

これらの六宗は、後世、鎌倉仏教と言われるようになった。日本宗教史上において豊かな思想を結実させた空前の宗教革新運動であったことは申すまでもない。鎌倉時代に起こった宗教改革というよりも仏教改革である。外交的には、蒙古襲来といわれる未曽有の日本侵攻事件に遭遇したのである。そこで、そのころの丹波国氷上郡の当時に思いを馳せてみたいと思うのである。

地頭に任ぜられた足立遠政

源氏の棟梁、源頼朝の御家人だった足立遠政は、承元三年（一二〇九）に丹波国佐治荘の地頭に任ぜられている。丹波国を構成していた氷上郡は西北端に位置しており、佐治荘は、氷上郡の北西部にあって瀬戸内海に注ぐ、加古川の上流域周辺地域で平安時代後期に設置されたことが明らかである。佐治荘の地頭になった足立氏の祖先は藤原氏である。藤原鎌足十四代の孫に当たる足立遠兼が武蔵国足立郡（東京都足立区と周辺地域）を所領していたことから足立氏と呼ばれるようになる。足立遠兼の子は、遠元、孫の遠光と受け継がれて来たことが知られている。源頼朝の御家人だった足立遠政は遠光の二男である。

この遠政が拝領した丹波国の佐治荘に移り住んでから遠坂村山垣の万歳山に山城を築くなど佐治荘を掌握して行ったのである。地頭を拝命した遠政を初代とする足立氏系譜によれば第三代の時若き求道者が現われ

るという珍事が起きている。遠政の子、光基には六人の男子が生まれている。この光基の三男で弘安九年（一二八六）生まれ、名前は「祖雄」と名付けられた人物が主人公である。祖雄は生粋の丹波人である。武士の息子に生まれながら武将にならなかった祖雄、求道者としてどんな人生を歩まれたのでありましょうか。

幼少のころの祖雄は、六人兄弟の誰よりも思慮深く、繊細で温厚な人柄で内向的な性格が芽生えていたのではなかったのかと思われる。そのことは、思春期の時に出家することを決心されたことによっても明らかである。出家とは、家を出て仏道の生活に入る人のことをいうのである。つね日頃、知られざる未到の中国で禅宗が盛行していることを聞いていた祖雄は渡航を決意されたのであった。禅宗の僧になるため、二十歳になった徳治元年（一三〇六）三月五日、中国王朝の元朝を目指して九州から出航されたことが明らかである。確かに、知識や見聞を広めるためのものではなく、禅僧を志す行動を示されたことから入元僧ともいわれる。

僧とは、古代インドのサンスクリットの音訳で、教団に所属して修行する仲間のことをいう。僧以外には、沙門（シャモン）、法師などとも呼称する。祖雄が入元する一一九年前の文治三年（一一八七）に栄西が入宋し、その後三十六年を経た貞応二年（一二二三）に道元が入宋していることがわかる。祖雄は、道元が入宋した八十三年後に入元したことになる。栄西や道元は中国王朝が宋朝の時代に渡航されたので入宋僧といわれている。入宋した栄西と道元の二人によって禅宗が伝えられたことは周知の事実である。

禅の深遠なる意味・歴史

つぎに禅の語源・禅の真理、禅宗の秘訣・坐禅（極意）、禅宗の歴史などを掻い摘んで解き明かすことにより、祖雄の人生を理解して頂く一助にしたいと思うのである。まず、禅とは禅那（ゼンナ）の略、古代インドの文語でサンスクリットの音訳されたものである。禅は精神を統一して真理を徹見することだと説き示されている。分かり易くいうならば、自分の悩み苦しみであるところの煩悩（病気や災難など）を自己開発すること

によって断ち切る強靭な精神力・洞察力・実践力等を身に付ける修行なのである。それ故、一般に禅宗は、他宗の加持祈祷・念仏本願・唱題目等の他力に比べられて自力が強調される所以である。自らが仏と同じように坐って行う修行が禅宗の坐禅といわれるものである。言い換えれば人間誰しも坐禅を実践し、体験することによって人それぞれの心に仏を敬い、祈り捧げ崇め奉る気持が沸いてくる。これこそが日本人の心に宿る信仰心なのである。だからこそ禅宗は言葉、文字、学問などではないことがおわかり頂けると思われる。

本来、禅宗は人間としての真実の生き方を会得するために坐禅を宗の要（カナメ）とする仏教の一派として熟知されている。そこで禅宗の歴史について一瞥することによって少しでも禅宗を理解して頂くことが出来れば幸いである。禅宗の歴史は、中国の北魏末に中国に来たインド僧達摩（ダルマ）を開祖としている。唐代から宋代にかけて臨済（リンザイ）・曹洞（ソウトウ）・偽仰（イギョウ）・雲門（ウンモン）・法眼（ホウゲン）の五家に分かれている。

更に臨済から黄竜（オウリョウ）・揚岐（ヨウギ）の二派が出たので五家七宗（ゴケシチシュウ）に展開することになる。五家七宗といわれるまでに展開した理由は、中国人が中国人の手によって昇華した証が禅宗であったというほかない。これら禅宗の五人の指導者達は、禅の極意を目指すことは同じであってもその過程に七宗といわれるそれぞれの違いが生じ、禅宗の発展に個性溢れる大きな要因が生まれたのである。仏教は申すまでもなく、インドに生誕された釈迦が御仏の教を信ずる者は、精神的な悩み苦しみから解き放され、すべての人々が救われることを解き明かした教えである。中国で誕生した禅宗は、中国社会において、上（カミ）は皇帝から下（シモ）は一般庶民に至るまで各階層の人々に篤く信仰されると共に中国文化を形成して行ったことが伝えられている。

日本では、鎌倉時代のはじめに栄西が五家七宗のなかで臨済宗を伝来した禅僧として理解されている。栄西にはもう一つの顔があることをご存じでありましょうか。栄西は中国から日本にお茶を持ち帰り、広めたことでも知られている。『喫茶養生記』は、栄西がお茶の効果、効能を著した書物である。ところで道元は日本に曹洞宗を開宗するため、今から七六四年前の寛元二年（一二四四）越前国志比庄（福井県永平寺町）に大仏寺を建立されている。これを永平寺と改め

られた。ここに一人でも多く真実の仏弟子を育てるための出家参禅道場を開かれたのである。ここでひとまず、禅の概念、禅宗の歴史、禅宗が日本にどのようにして伝えられてきたのか。その経緯については、概略理解して頂けたものと思われる。

祖雄が未到の大地へ

それではいよいよ祖雄が元朝に入国された当時の状況や修行僧としてどんな日々を過ごされたのだろうか。興味が尽きないのである。祖雄は鎌倉時代後期に日本を旅立ち、中国浙江省明州の寧波の港に到着されている。到着後、臨済宗の聖地の一つ、杭州郊外にある天目山の参禅道場を修行地と決められたのである。天目山では、その当時、中国の禅宗のなかで仏教学をはじめ禅の双方に精通していた名声の高い指導者の中峰明本という高僧にめぐり逢うことができたのも不思議な出逢いということになる。そのため祖雄は、天目山の指導者、中峰明本に師事することができた。

参禅実修を積み重ねて行った祖雄は、修行僧として日々研鑽の功によって禅を取得されるまでになられた。指導者である師の中峰明本が、仏祖（釈迦）より直伝されて来たとされる師資相承の「血脈」を祖雄に授けられたと伝えられている。それは中国元代の皇慶三年（一三一三）八月三日に行われたことが記されている。これより祖雄和尚と認められることになる。祖雄が禅を体得するまでには苦節七年の長い歳月を費やされていることがわかる。過去には、遣唐使の一員だった空海が全員帰国する際にただ一人だけ長安（現在は西安市）の都に残り二年の間、密教修行に専念されている。その甲斐あって青龍寺の惠果（ケイカ）和尚より密教を伝授されて帰国されたことが説き明かされている。

ここで修行期間を問題にするわけではない。なぜならば、祖雄という人は人並みの人ではなかったことが伺い知れるのである。日本から中国の禅宗の天目山参禅道場に来た七年前は修行僧であった。その七年後には、天目山の参禅道場指導者の中峰明本の弟子となっていたのである。これから祖雄は、和尚となったので自立することが許されるまでになっていた。この時、祖雄は二十七歳になっていたのである。修行時代の祖

雄については偶然にも指導者と同じ夢を見ていたとされている不思議な師弟愛とか、日本から遠く離れたわが子に送り届けられた母親の手紙などのエピソードが伝えられているので祖雄和尚になるまでの一端を垣間見ることができる。

ある日、指導者の中峰明本は、弟子となった祖雄に夢を見た時のお話をされている。その夢とは、「昨夜、日本国の丹波に一つの山があり、形は天目山に似ており、その石磐上のうえに観音菩薩像がある場景だった」と告げられた。そのことについて祖雄は「私も毎夜見る夢は、指導者と同じ夢を見ているのだと思われる」と即答されていたと伝えられている。さらに中峰明本は「日本国において、天目の宗風を高揚する時機が到来したのであろう。弟子となった貴方は、既に故国に帰ってわが天目の宗風を伝え、永く法燈の相続を図ることが大事である」と説き示されたと伝えられている。しかし指導者の垂示は、祖雄には通じなかったといわれている。指導者であると共に師の進言を断わった祖雄は、その後どうされたのでありましょうか。それから三年、天目山に逗留されたことが伝えられている。また、ある時商船に託して届けられたといわれている母親からの手紙によれば「私はこの頃屢々瑞夢を見る。これは法を宣揚する時機が到来したのであろう。御身は速やかに故国に帰り、人天の師となり、普く衆生を救い給え」と書かれていたことが伝えられている。長期に亘り、修行しているわが子を気遣う母親の思いが伺い知れる。このような母親の便りが祖雄和尚の心を動かしたのである。

師弟の絆を結ぶ

いよいよ師弟との間においてお別れしなければならないその時が訪れることになる。師弟の別れの際、弟子の祖雄に対して、師である中峰明本は、師の同志で画家の道子昂に自画像を描かせ、その絵に自ら賛を書き入れた一幅と袈裟一領とを贈られている。ここに国境を越えて名実ともに師弟の堅い絆が結ばれたのである。日本に帰国することとなり、中国浙江省の明州寧波の港を出航した祖雄和尚は、玄海灘で暴風雨に遭遇するも無事九州博多の港に到着されている。日本

人として最初に禅宗を京の都や武士の都鎌倉へ将来した栄西と同じ臨済宗の禅僧となって帰国した祖雄であった。日本に帰国したのは、今から六九二年前の正和五年（一三一六）のことである。

祖雄和尚の帰国を待ち侘びていたのは、最愛の母親が亡くなったという悲しい知らせであったのである。祖雄和尚は悲嘆の余り「我、今、郷に帰って何の益があるというべきか」といって暫くの間、九州に留まられたことが伝えられており、住処については不明である。祖雄和尚が帰国したことは、口こみで知れ渡り、いつまでも九州にいる訳にも行かず、生まれ故郷の丹波へ帰られたといわれている。十年ばかり離れていた佐治盆地を取り巻く風光明媚な美しい山容は、彼の天目山を思わせる姿が見出されたことだろう。偶然にも彼の天目山に似た山容を小倉西方に見出されたことは、何といっても不思議な「えにし」だと思われるのである。

かつて彼の天目山で指導者の中峰明本と共に祖雄和尚も同じ夢を見たと伝えられている観音菩薩像を祀るに相応しい処としてこの場所が選ばれたといわれている。祖雄和尚は、そこに庵を構えられたといわれている。祖雄和尚が修行時代に母親からの便りに「法を宣揚する時機が到来するであろう」と記されていたことが実現することになる。

神楽村檜倉に高源寺という禅寺を創建されたのは、祖雄和尚が三十九歳の時の正中二年（一三二五）のことである。鎌倉幕府が滅亡する八年前であった。高源寺は祖雄が開山した禅寺である。しかも祖雄の父親光基をはじめ兄弟はもとより足立氏一族、地元の協力支援を得て臨済宗中峰派を掲げその基（モトイ）となった。祖雄和尚の宗風を慕って高源寺に集まって来る道俗が多くなり盛況を呈したといわれている。

武士から臨済宗の禅僧となり、康永三年（一三四四）六月二十七日、五十八歳の天寿を全うされている。祖雄和尚は、当時の時代風潮の最先端を突き進まれていたことが実感出来る。丹波氷上に新風を吹き込んだ賢人であったということができる。鎌倉時代の丹波氷上のよすがを少しでも理解して頂く機会になればと思う次第である。

◎寄附者芳名

木村　壽彦殿　一〇、〇〇〇円
（丹波市教育長）
岡田徹・長澤均殿　一〇、〇〇〇円
（兵庫県東京事務所）
氷上ゴルフ会殿　九、一五〇円
足立　正喜殿　一〇、〇〇〇円
千種　倫幸殿　一〇、〇〇〇円
中居　篤子殿　一〇、〇〇〇円
村上　末吉殿　一〇、〇〇〇円
岡林　逸男殿　五、〇〇〇円
荻野　武殿　五、〇〇〇円
谷口　捷殿　五、〇〇〇円
堀井　隆川殿　五、〇〇〇円
三浦　セツ殿　五、〇〇〇円
足立　吉雄殿　三、〇〇〇円
荒木　司郎殿　三、〇〇〇円
生田　清弘殿　三、〇〇〇円
上野　重喜殿　三、〇〇〇円
大野　義昭殿　三、〇〇〇円
岸本　勲殿　三、〇〇〇円

小森　康宏殿　三、〇〇〇円
高見　秀史殿　三、〇〇〇円
谷垣尚・富子殿　三、〇〇〇円
藤田　純殿　三、〇〇〇円
藤田　徹殿　三、〇〇〇円
村上　久夫殿　三、〇〇〇円
山口　和久殿　三、〇〇〇円
渡辺　昌彦殿　三、〇〇〇円
澤田みさを殿　二、〇〇〇円
安達健一郎殿　一、〇〇〇円
井徳　正吾殿　一、〇〇〇円
稲岡　俊一殿　一、〇〇〇円

大木　健次殿　一、〇〇〇円
岡田　充利殿　一、〇〇〇円
鈴木　和栄殿　一、〇〇〇円
野村　節三殿　一、〇〇〇円
本城　英明殿　一、〇〇〇円
山名　靖博殿　一、〇〇〇円
井田　悦子殿　五〇〇円
大石佐代子殿　五〇〇円
小糸　イキ殿　五〇〇円
塩見みつゑ殿　五〇〇円
千葉　淳子殿　五〇〇円

原稿大募集

本誌は会員皆様の寄稿によって作られております。どんな内容でも結構です。ふるってご寄稿ください。

テーマ：①ふるさと随想
②近況エッセイ
③会員だより（短信）
④催し（個展・同窓会など）
⑤丹波を撮る（写真）など

締切日：原稿はいつでも受け付けております。次号の最終締切りは**平成21年8月20日**です。

原稿枚数：400字詰4～5枚程度

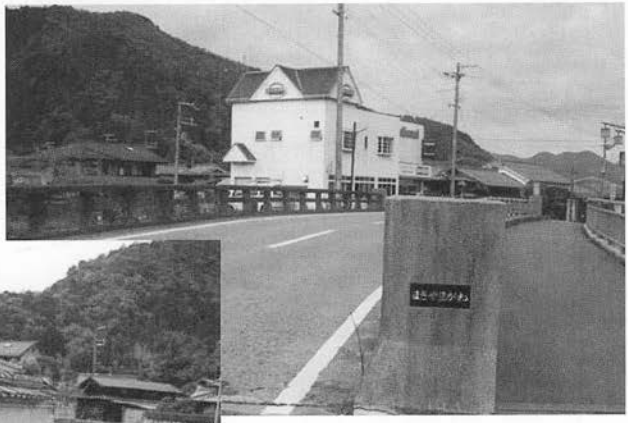
送付先：〒247-0005 横浜市栄区
桂町1－1－1－101
㈱ホンゴー出版内
『山ざる』編集部
TEL 045－895－2712
FAX 045－895－4338
Eメール hongo@mocha.ocn.ne.jp

■ワープロで打たれた方は複写のフロッピーをお送りください。

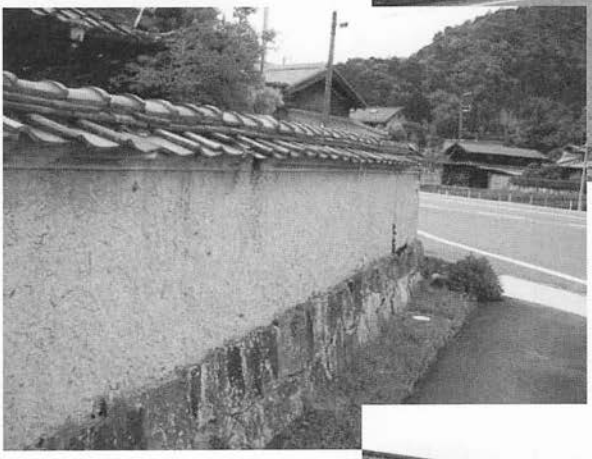
旧和田村和田を行く（1）

↑牧山川側の富田橋
バス停（1日6往復）

山南町和田は、かつての和田村和田であり、２００戸近くの民家を擁した。大半は商家で薬問屋も多かった。劇場では映画だけでなく専従役者が構成する劇団「ニコニコ」の上演も行われた。今も谷川駅と坂尻を結ぶバスが和田を走り抜けていく。



↑富田から牧山川を越えれば和田である。左に岩屋城跡が見えてくる。



←白壁はもちろん、茶色の土壁もあちこちに健在

薬問屋の倉庫も現役で稼働→

丹波を撮る

旧和田村和田を行く（2）

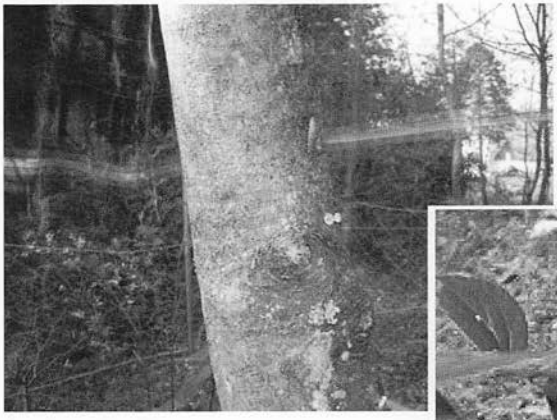
←ワシらも頑張っとりまっせ

←もちろん白壁の「高塀」も健在

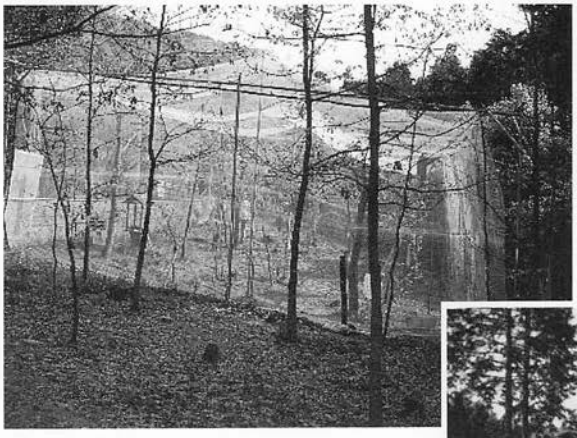
←↑私財を投じて公会堂を建設した高橋省三翁を称える碑と公民館「三省館」

丹波を撮る

変わる丹波、変わらぬ丹波



丹波の森公苑は、国蝶オオムラサキの孵化に全力を挙げています。正に「蝶よ花よ」？

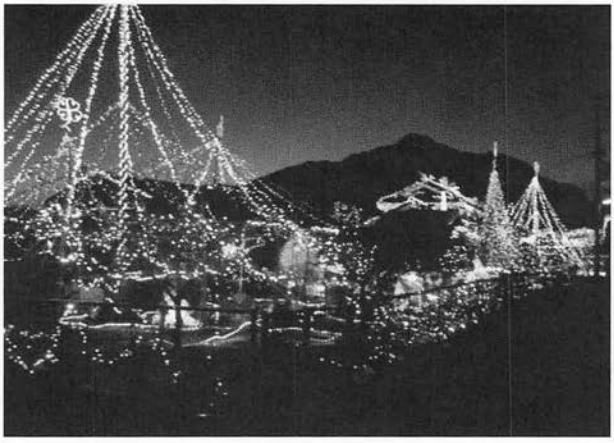


←この大きなケージの中で大切に育てています。

はん屋とは、灰屋のことです。→

丹波を撮る

丹波大森ユメナリエ



←冬の陽が権現山に沈むころ、氷上町谷村の大森ユメナリエが点灯される。

↑今年のテーマは丹波竜。

↑個人作業とあってはルミナリエも顔負けです。

これは大森家の新年のお飾りです。→

丹波を撮る

氷上町石生の水分橋周辺

←本誌 33 号で紹介した改修水分橋。広報ボードも新調されました。

↓分水現象を強調しています。

←ようやく海抜 95m 地点にも広報ボードが登場（本誌 32 号参照）。

福知山線の「峠」である高谷→川踏切にも広報ボードが欲しいですね。

丹波を撮る

治山治水の碑

丹波市では棚田地域においては水不足で用水池を必要とし、河川の合流地域では排水に悩んできた。先人の苦労を顕彰するのは数々の石碑であるが読む人は少ない。すべてを網羅するのは難しいが、治山治水の碑から先人の水との闘いの記録を伝えたい。

柏原町母坪と氷上町稲継の境界に佇む「母坪・田路・稲継・横田四ケ村排水溝沿革碑」。柏原川と高谷川が合流し、さらに佐治川と合流するが、広大な流域の佐治川の水流に押されて排水が難しく、すぐに氾濫する。住民の願いは少しでも佐治川の下流で合流させることであった。

← 柏原川と高谷川の合流点。渇水期の写真であるが、集中豪雨となれば直ちに溢水。

アゲハチョウの不思議

村上信夫（春日町）

世の中には、人知を超えた不思議なことがあるものだ。そんなことはあるはずもないと思ってしまえばそれまでだが、私は不思議なことを信じたい。

番組宛てに届いたお便りを読み進めるうちに、こういうことってあるんだと、感動を禁じえなかった。その場の状況が手にとるように見えてくる。

交通事故に遭い、十六歳で亡くなった娘の母親からのものだった。「娘を失い、希望も失い、人との関わりも絶っていたが、ラジオを聴いていると、心が穏やかになる」と書かれていた。「悲しく苦しい思いが、この番組で醸し出される優しい雰囲気で、柔らかい気持ちになれる」と。

嬉しいことだが、藁にもすがる思いでラジオを聴いている人がいることを、ゆめゆめ忘れてはならないと、気持ちを引き締めた。

この方の娘さんは、絵を描くのが好きで、美大を目指していた。死後、アゲハチョウを描いた油絵が見つかった。新盆には、黒いアゲハチョウが庭に現れ、両親の周りを何度も何度も飛び舞ったそうだ。それから、娘の供養の為に始めた巡礼旅の行く先々では、決まって大きなアゲハチョウが現れ、まるで先導するかのように舞った。高野山、比叡山、中尊寺……全国どこに行っても現れたという。

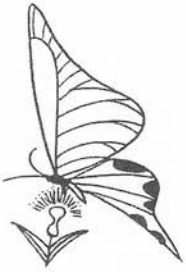
自宅の庭に植えてあるミカンの木に、アゲハチョウが卵を産んでいくようになった。放っておけなくなり育て始めたら、三年で一〇〇匹近くが羽化した。「チョウの幼虫の世話をしていると心が優しくなれる」と、お便りは結んであった。

アゲハチョウに、娘に魂の存在を感じ、生きる気力を与えてもらっている母親の気持ちを察して、多くの共感を呼んだ。不思議なことに共感出来る感性の人たちが、ラジオを聴いている。

そういえば、今年のお盆、築九十年を超える春日町の家の庭石に黒アゲハを見つけた。

「あぁ、やっぱり、ご先祖さんが、みんなに会いに来てくれたんだ」と思った。

＊村上信夫氏（ＮＨＫアナウンサー）はラジオ第一で「ラジオビタミン」（8：30～11：50）を担当されています。



隠居の条件

三浦　宏（山南町）

電気関係の会社に六十歳まで勤めた後、さる大学の工学部に五年在籍し、これも定年退官した時点でもう宮仕えは沢山、と隠居を決め込んだ。しかし、毎日勤めに出ない生活は運動不足になるうえに、仕事関係で人と接しないのは人間に本来備わっている社会性の本能に反するようで、精神衛生上好ましくないと感じ始めた。さらに、経済上の問題では年金収入だけでは私の懐にまわってくるお金は月々の書籍代位でしかない。私はかなりの相撲ファンで、天明二年（一七八二年）の使用許可以来、我が家の菩提寺が上野不忍池の池之端にあることから、五月と九月にはお墓参りのついでに両国まで足をのばして本場所を観戦するのを常としていた。しかし、このままでは一家で桝席を予約する料金もままならない。そこで、知り合いの社長に頼んで週のうちの数日働かせてもらうことにして、以来四年ほど経った。ここで、私が目指す理想の隠居の条件を整理すると次のようになろうか。

①年金以外に安定な定期的収入がある（株の配当など）
②持病がある
③世間とはほとんど没交渉で、その及ぼす影響力は家庭内の孫・子の範囲だが、週に二、三日、午後に出かけるところがある
④寡黙である
⑤ある種の品格があり、女性の場合でいうところの引退した芸者が持つような「色香」が残っている
⑥体力と気力に限界があって長続きしないが、その気になれば現役の人たちに比べて数段上の仕事や、場合によっては色事さえこなせる
⑦趣味が豊富で、そのいずれもがかなりのレベルにあり、五か国語以上を自由に操れる

これだけでは要領をえないので、以下に若干の説明を加える。

②について。隠居は弱みの年齢である。身体的、精

神的な弱みを抱えながら日常生活の行住坐臥をやりくりしているところに隠居に特有のスローな時間が流れる。心身共に健康で弱いところのない人は隠居などしないでタフでストレスフルな現役生活を続けてもらいたい。このように、持病は隠居に欠かすことができない条件であるが、病気の種類としては願わくば致命的でないものが望ましい。しかし、致命的でないからといって、痔疾、水虫などは好ましくなく、歯槽膿漏、蓄膿症などで近寄ると悪臭を放っている場合も品格ある隠居のイメージから除きたい。若いときの色恋沙汰の痴話喧嘩の果てに出刃包丁で刺された左肘の古傷が入梅時にしくしく痛む、なんぞというのが色っぽくて私の理想とする隠居の持病である。

⑤については、老齢者の品格を歌ったものと思われる「枯れゆけばおのれ光りぬ冬木みな」（加藤楸邨）なる句があるが、これはあまりにも立派すぎて私の好みではない。人生幾十年の清濁の河を渡りおおせたのだから、立派だけでなく少しばかりの猥雑さも欲しい。

⑦の語学について。以下は私の経験である。約二十年前に私の姪がフランス人と結婚した。これはフランス語を修得する良い機会、とＮＨＫのラジオ講座を始めたが丁度仕事が忙しくなって三日と続かなかった。次は十五年ぐらい前から塩野七生の『ローマ人の物語』を毎年出版と同時進行で読み始めて、これは十五巻まで読み果せたが、この時はちょっとしたローマ・フリークになり、イタリア語の学習を思い立って、三、四か月続いた。しかし、やはり仕事のせいでとん挫した。

そして、これは昨年九月のことである。かねてからカラオケでトリオ・ロス・パンチョスの持ち歌である「ベッサメ・ムーチョ」や「キサス・キサス・キサス」などを片言のスペイン語で歌っていたのだが、これを詩の意味もわかったうえで流暢なるスペイン語で歌うべく決意したのだ。今回は晴れて隠居の身であるから仕事の邪魔も入らず無事半年のラジオ講座を聞き終えて、現在二回目のクールに入っている。

以上の三か国語はもともとラテン語の方言のようなもので、現在これらを一挙にマスターする野望を持っているが、この年でこれはあまりな野望と言えるかもしれない。ドイツ語は二十年前の学位取得の時に試験があり、この時にかなりやったが使わないのですっか

り忘れた。これらに英語を入れて目標五か国語とする。

以上でも、私の理想とする隠居のイメージが伝わらないかもしれないので、具体的な例を示そう。それは、かの山田洋次監督の「寅さん」に出てくる。私はこの寅さんシリーズ全四十八作は日本の誇る名画であると信じていて、帝釈天をお参りするのは勿論、参道で売っているダンゴを食べ、荒川の土手を歩き、矢切の渡しにも乗ったくらいのものである。

私の理想とする隠居はシリーズ第四十六作目の「男はつらいよ　寅次郎の縁談」（一九九三年）に出てくる島田正吾扮する引退した外国航路の船長である。この時のマドンナ・松坂慶子はこの船長と愛人との間に生まれた子供であって、神戸で料理屋をやっているのだが、借金を作ったあげくに体を悪くして、今は父親が住む瀬戸内海の小島で静養している。ここへ寅がやってきて、例の如くのマドンナとの大恋愛が始まる。この父親はなけなしのお金をはたいて借金を肩代わりしてやり、娘の快気祝にアルゼンチン仕込みのタンゴを娘と踊るのである。普段は手回しの蓄音機で音楽を聴きながら、日がな一日、窓越しに瀬戸の海を見て過ごす。流れる曲は「ラ・パロマ」である。

我が船ハバナを発つとき
寂しき涙あふれぬ
……

この隠居を見ていると、若い頃にしでかした浮気の結果である娘との生活が極めて貴重かつ快適なようで、女の子供を持ったことがない私は羨ましくてしかたがない。あと何年生きるか知らないが、五か国語のマスターぐらい、これからの人生でもなんとかなる（かもしれない）。しかし、愛人との間に娘をもうけて一緒にタンゴを踊るには、私の場合、まず愛人を作ることから始めなければならない。

時すでに遅し！　それなら、この人生をやり直したらどうだろう。しかし、これもトーマス・マンが言うように「もう一度やり直す。しかし無駄だろう。やはり今と同じことになってしまうだろう。」（「トニオ・クレーゲル」高橋義孝訳（新潮文庫）から）

これは私の人生における大いなる悔恨だ。

創業の理念引き継いで

土井崇司（山南町）

村のはずれのバス停で、ハンカチで顔をおおいながら、ちぎれるように手を振っていたおふくろの姿は今も忘れない。大阪駅まで送ってくれた父と姉も、汽車が走り出したとき頑張れよ、元気でね、とホームを駆けながら別れを惜しんでくれた。当時の東京は、丹波から見るとはるか遠い大都会、希望に燃えていたとはいえ、心細くてつらい故郷との別れだった。レールのきしむ音と車内のざわめきに何度も眼を覚ましながら、夜行列車に十二時間揺られて東京に着いたのは昭和三十二年三月の初旬であった。東京支店のある浅草橋付近は都電が走り、相撲、プロレスの蔵前国技館があり、特にプロレスは熱狂的な人気があり、力道山の全盛時代であった。隅田川も今のような高い護岸はなく、柳橋や浜町の料亭からは三味線の音が響き、水面を滑る流し舟も見られる情緒豊かな町であった。

東京工場のある足立区千住界隈は映画「煙突の見える場所」にも登場した東京電力の「お化け煙突」があり、下町らしい素朴な風景の残る処でした。当時は東京タワーも建設中で、日本は敗戦の衝撃から立ち直り、復興の道を歩み始めていた。しかし、人々の暮らしはいまだ貧しく、必死に働き、汗を流す日々だったが、貧しさの向こうに豊かさへの夢があり、心は今よりずっと充実していたように思う。

私が就職した渡辺紙工業株式会社は明治四十五年（一九一二）兵庫県氷上の地で、創業者渡辺泰造氏が、農業だけでは食べていけない苦しい村人たちをたすけるため農村の副業として、自宅納屋で砂糖、菓子袋を生産、販売したのが始まりです。戦前、戦中は上海、南京や台湾に出張所を設立しましたが、敗戦と同時に撤退しました。しかし国内各地の工場は幸いにも戦火を免れ、戦後復興と歩調を合わせるように、会社も発展することができました。

平成二年（一九九〇）渡辺紙工業、渡辺製袋が合併しネクスタグループが誕生しました。グループの社員が価値観を共有し、業績、商品、社員等企業活動のあ

らゆる面でAクラスを目指し、外部からも高く評価、信頼される会社になりたいという思いをこめた社名です。

昨年の七月一日、二日にかけて商船三井客船「にっぽん丸」に於いて創業九十五周年記念行事を行いました。総勢三〇〇名以上が参加し「V一〇〇の聖火を燃やす」をテーマに揚げ、文明開化の洗礼を受けた神戸から横浜までのクルーズは、記憶に残る記念行事となりました。

さて、西暦六〇四年に聖徳太子が制定した憲法十七条は、みんなが仲良く暮らすため、相互信頼社会を築くため「和をもって尊しとする」の精神が基本となっており、二宮尊徳の「働くのは端が楽」の教えにも継承され、自分のためだけでなく、周囲の人や社会のために働くという日本古来の思想や道徳は、今日まで脈々と受け継がれているはずでした。

ところが、最近は賞味期限や産地偽装など企業の不祥事が続発しています。また自分の利益のみを追い続けるという風潮が蔓延し、政界、経済界、官界にスキャンダルが次々と起こっています。日本は戦後、奇跡といわれた経済成長によって、物質的には確かに豊かになりました。しかし、多くの人々が将来への漠然とした不安感を払拭できず、それに代わる希望を見出せないでいます。

私達は弊社の岡崎社長が、京セラ・名誉会長である稲盛和夫氏が塾長の盛和塾（大阪）の世話人である関係から、「会社は何のために存在するのか。また、どのような目的で、企業活動を行い、社会に貢献していくのか」についていろいろと勉強しています。利益を上げることは事業や人間活動の原動力であり、だれしも儲けたいという「欲」はあってもいい。ただ会社だけ儲かればいいと考えるのではなく、取引先、消費者、株主、社会の利益にも貢献すべく経営を行う。いわゆる『利他の心』にビジネスの原点があることを学んでいます。そして、企業の商品やサービスを通して社会とつながり、世の中の多くの人とつながっているという確信が、働きがい、生きがいになり、社員が希望を持って働くことになるんだと言うことを知りました。

ネクスタは、苦しい村人たちを貧乏から解放するというのが創業のルーツでした。九十五年後の今日、創

業の精神を引き継いで、「労働で得た利益は社会の発展のために活かす」ことについて、学ぶだけでなく会社経営にいかし、次の世代に伝えることが私達の責任ではないかと思っています。

会社は誰のものか？

谷口浩章（氷上町）

ちょうど一〇年前の一九九八年六月、グループ企業の一社であった「ビル・マンション管理会社」の社長に任命されました。当時、売上八〇数億円、社員はパートを含め一一〇〇人超、銀行系の管理会社の中では最も大きく、総資産九〇億円・借入金が七〇億円と財務内容はよくないものの、営業利益二～三億円、五％ながらも毎年安定配当を続けるまずまずの会社でした。

ところが同年一〇月、思いもかけず親会社が突然破綻・公的管理になったのです。当社は親会社とは全く違う業種で、本来なら直にその影響が出ることはないのですが、親会社が銀行で、当社の借入金の殆どは親銀行からのものであったことから、当社の存続そのものが即問われることになりました。

当初、政府の意向を踏まえた親銀行の出した結論は「本業のビル・マンション管理部門だけ取り出して別会社をつくり、残りの資産・負債は当社に残し当社は清算する」でした。理由は、「当社の膨れ上がった資産の内訳は親会社の依頼で持たされた大量の株式と不動産でした。それらを時価（その時点での処分価格）評価すると、大幅な評価損が発生、自己資本で埋めきれず、その債務超過額は二五億円と当社一〇年分の利益相当額となり、当社を破綻懸念先と認定する。当社に資本注入するのは金額が大き過ぎて難しく、清算せざるを得ない。」

小生もこの結論に納得して、新会社設立のためのスポンサー探しを始めました。ところが、本業だけ取り出して別会社をつくるというのはそう簡単ではないということがだんだん分かってきて、これしか社員を救う道が無いと思っていたのに、どうしたらいいのか、八方塞がりで悶々としているところに神風が吹い

たのです。株価が上がりだしたのです。故小渕内閣の一九九九年三月に入ってからのことでした。この効果により、一九九九年三月末時点では債務超過額が一〇分の一以下の二億円にまで劇的に減ったのです。これなら「当社を潰さなくてもすむ、増資をして存続させることが出来る」。当初とは一八〇度逆の結論であり、親銀行との交渉は難航を極めたが、まだ若かったこともあり頑張りぬいて、その年の六月新たなスポンサーを見つけ増資と私募転換社債で一〇億円のお金を出してもらい、当社を存続させることが出来ました。

その後、不良資産の処分は予想外に順調に進み、総資産は三分の一、借入金は債権放棄・金利減免等一切お願いせず、取引銀行も大幅に入れ替え、七分の一程度にまで減少しました。

一方でビル・マンション管理の本業のほうは苦労の連続でした。親銀行及びグループの不動産会社の倒産に伴い、これらからの仕事が減ることは想定していましたが、親銀行の取引先の仕事が予想以上の解約・値下げをくらってしまったのです。

ビル・マンション管理の仕事は一度契約すると、業者変更は殆ど無く大変安定した仕事だと言われていたのが、この頃から変わってきて、業者変更が珍しくなくなってきました。というのも受託料金が大幅に下がりだして、同じ仕様で従来の半額という時代になってきたのです。ビル・マンション管理業はコストの大半が人件費です。典型的な3Kの業種で人集めに苦労して正社員にして定着を図っていたのが、不況による人余りでパート採用がいくらでも出来るため、正社員でなくパート前提の料金体系に変わってきたのです。料金の低下と反比例してお客様の要求は高くなってきました。

「言われたことを黙ってやって、文句を言われなければいい」時代から「やったことをきちんと報告してほしい、更に専門家としていろいろ積極的に提案してほしい」という時代へ。「待ちから攻めへ」従来と一八〇度逆の対応が必要になってきました。社員の意識を変え、更に実際の行動まで変えることは容易ではありません。

売上げはどんどん減り、四年後のボトムには、この間の新規開拓をプラスしても四〇億円台半ばとピーク

の六割以下になりました。これに伴い、現場の人達に次々と辞めてもらわざるを得なくなり、それまで外注していたのを内製化したものの追いつかず、ボトム八〇〇人を大きく割り込むまでになりました。

この間、「会社は誰のためのものか」を常に自問していました。「人」は生まれながらにして「人」であるが、「会社＝法人」は法（律）により「人」と認められる。「会社」は株主のものという議論が近年強くなってきましたが、会社が人として活動するためには株主だけではどうにもなりません。ユーザー、従業員、仕入先、株主等多くの利害関係人を持っており、これらのバランスを考えながら経営するのは当然であり、長期保有ならまだしも短期的収益を中心に考えている株主のみの意向に従うのは違和感を覚える。昔、従業員組合の委員長を経験したことが影響しているのかも知れないが、利害関係人の中でも、従業員を一番大事にしたいとの思いが強い。ところが自分の思いとは逆に、現実は人減らしばかりやってきて、自分がやっていることは何なのか？　本当に意味のあることをやっているのか？　を自問せざるを得ない毎日が続きました。これに対して、「会社を潰すよりは残したほうが多くの社員が救える筈」と言い聞かせながらやってきました。

幸い、その後解約・値下げが一段落の一方、新規開拓努力が効を奏して売上げが増加に転じ、七年後売上げ五〇億円台半ば、従業員も九〇〇人弱になり、「もう大丈夫、再生なった」と言えるところまで来ました。昨年、会長から顧問に退きホッとしております。

かくも愛しき存在——PARTⅢ

岡田昌子（柏原町）

愛犬（ミニチュアダックスフンド）との暮らしも今年の夏で七年目を迎えた。言葉のないコミュニケーションであってもあうんの呼吸で季節はめぐり、家族としての絆は深まる。

よくよく考えてみるに、愛犬とのコミュニケーションは不思議である。お互いの意思の疎通は人間側の一

方通行による言語（何故か赤ちゃん言葉になるのが可笑しい）及び身振り手振りと、愛犬側のリアクション及び自発的な行動から成立する。我が家は過保護なので指示に対するリアクションは今一。要するに少々なめられていてなかなか言うことを聞いてくれない。が、自発性は活発である。嬉しい時は飛びつきじゃれて口をナメナメしてくれる。私はこのナメナメが苦手なので、顔のどこかに触れるだけでＯＫ。気も遣ってくれる。洗濯が出来上がると必ず知らせてくれるし、落し物を探していたら教えてもくれる。「あっ！いけない！」と、いつもの天然ボケによる声のトーンが一音階アップするだけで「すわ！　一大事？」と構えてくれる。こちらの動きへの反応は即スタンバイ可能で、その俊敏な動きには感心させられる。

更に、驚かされるのが聴覚と嗅覚の鋭さで、コミュニケーションと関係性を深めてくれる。例えば、帰宅中の家人を半径四〇ｍ四方から察知できるらしく玄関先で待ち焦がれている。音もしなければ臭いを感じる距離にはないと思われるのに玄関に直行し居住まいを正して待っている。また、ベランダ側の道路を散歩仲間の犬や怪しげな人が通過するとき、必ず外へ出たがり攻撃的に吠える。この「怪しげな」というのが笑っちゃうのであるが、余りに吠えるのでベランダから見下ろせば、失礼ではあるが必ず私が「怪しい！」と思う人が歩いている。或いは、騒々しい集団だったりする。どうやら私の気持ちを先取りして吠えている。私の気持ちがしっかりと以心伝心しているのだ。近所迷惑なので「よう知っとるねえ！」と柏原弁で囁きながら抱き上げる。犬の聴覚と嗅覚は麻薬探知や災害救助等でも役立っているように相当優れているらしいが、わが愛犬にもテレパシーがあり読心術を駆使できる能力を持っている。その優れた能力を飼い主との関係に惜しげもなく注いでくれる。その一途さは気の毒なくらいで恐縮の至りである。人間に飼われなければ生きていけない犬のＤＮＡなのか、その健気さに一層可愛さが募る。

その健気さは犬の感情にも現われる。犬にも感情はある。愛犬の場合「喜怒哀楽」の「喜・楽」は分かり易い。ハイテンションそのもので体をつかって目一杯表現する。笑顔はないのであるが、あたかも笑ってい

るように思え、こちらにとっても至福の一時である。「怒」についてはわが愛犬は殆ど見られない。前述の「怪しい!?」ときと、玄関先の呼び出し音「ピンポーン」には我慢できないらしく吠え立てる。怒りではなく縄張り意識による先制攻撃だろうか。ビックリしてどう対処していいのか戸惑っているのが雷鳴で、稲妻直後の耳をつんざく音には外に向って吠え続ける。ちょっと恐いらしい。「哀」の感情は表情に出る。犬にも表情があるのだ。大体が留守番させたり、誰かが遠くへ出かけたり、別の生活に帰るときなので、こちらの感情移入もあろうが、確かにどこかとても寂しそうな情けなさそうな困った表情をする。眉らしき辺がピクピクと上下に動くとき、こちらも切なくなり心が痛む。

唯一、声による自己主張の吠える行為は前述のように日常生活の中から勝手に意味づけし解釈しているのであるが、本当の愛犬の気持ちは分からない。分からないからこそ一層関係性が深まるのかも知れない。愛犬の存在は家庭に笑いと安らぎをもたらせてくれる。

#

フェルメールの絵に、女神の側に座っている犬がいた。一六五五年に描かれた古の時代にも犬は人間を癒し続けてきたのだろう。癒し続けているばかりでなく、古代ギリシャの哲学の一派には犬儒学派（キュニコス学派）なるものがあったという。「社会規範にとらわれず、犬のように無欲な自然生活を営むことを理想とした」らしい。到底実現不可能であるにしても、せめて、犬のように相手の存在を思いやりながらもっともっと無欲に生きてもいいのではないだろうか。留まることを知らないかのように続く家族間や無差別殺人・民族紛争や戦争のニュースを見るにつけ聞くにつけ、つくづくそう思う今日この頃である。

芦田均の記念講演と自衛隊

臼井　小五郎（氷上町）

私が柏原高校三年生であった昭和三十一年は柏原中学・高校創立六十周年の年であった。秋には式典をはじめいくつかのイベントが行われたが、運動会では三年男子による組体操を行い、入場行進の際には旧制柏原中学の校歌を歌いながら行進し、六十年の歴史の重みを感じた。

記念式典に続いて行われた第四十七代内閣総理大臣芦田均の記念講演は、私の人生に大きな影響を与え、今なおこの課題に取り組んでいる。講演の内容を正確に記憶しているわけではないが大要次のようであったと思う。

「第二次世界大戦の開戦原因はナチス・ドイツ側だけにあったわけではない。平和を守ろうとする決意と力が英・仏に欠けていたこともその原因の一つである。これからわが国が平和を享受するためには、この歴史の教訓を踏まえて日本国にふさわしい軍隊を創設するとともに、国民が挙って国を守る気概を持つことが必要である。」

当時、自衛隊を巡る憲法問題が熱を帯びて議論されていた。二ヵ月後に防衛大学校の入学試験を控えていた私にとっては輝くような言葉であった。元内閣総理大臣であり憲法制定時の中心的存在であった芦田均先生がおっしゃることだから、間もなく憲法が改正され陸海空軍が創設されるのだろうと思った。

しかし、防衛大学校に入校してから平成五年に定年退職するまでの三十七年間を自衛官として勤務したが憲法は改正されることもなく、陸軍も海軍も空軍も創設されなかった。

日本国憲法第九条第二項冒頭に「前項の目的を達成するため」という文言がある。いわゆる「芦田修正」と言われるわずか十二文字の短い言葉であるが、これが憲法解釈に大きな影響を及ぼし、米ソ冷戦構造の中にあって我が国の安全保障に極めて大きな役割を果た

した。即ち、自衛のための軍隊を保持することは憲法に抵触しない、又我が国の安全保障のための日米安保条約も憲法が禁じているわけではないという「公権解釈」のよりどころとなり、世論は自衛隊の存在と日米安保条約を肯定し今日に至っている。ポツダム宣言を受け入れることによって軍事力が零になったにもかかわらず平和を享受できたのは芦田修正のお陰であり、芦田修正は日本の救世主であったと言っても過言ではない。

しかし、芦田均は独立を回復した昭和二十七年になると憲法改正に情熱を燃やし始める。彼は新憲法がGHQによって草案が作成されたもので日本国民によって制定されたものでないことを一番良く知っていたこと、軍隊を保持することは独立国家にとって必須の条件であると認識していたためであろう。更に、彼は自衛隊を正体が分からない鵺のような物であると言い、これをなし崩し的に軍隊にしてはいけないと力説するとともに、早く憲法を改正しないと軍隊をつくれる青年（国民）がいなくなることを心配した。（毎日新聞・昭和二十七年一月一日朝刊）

米ソ二極構造は崩壊し、米国の庇護の下にいれば安全であるという保証はなくなった。これからは、自分の力で国を守らなければならないが、憲法を改正し法律を制定すれば軍隊をもてるであろうか。軍隊を持ち軍事力を行使することは、国家が主権を守るためには国民が自己の生命を犠牲にする覚悟があることの証左である。逆な言い方をすれば国家のために命を捨てる覚悟が国民になければ軍隊を作ることは出来ないのである。しかし、戦後教育は自国の歴史を誇りに思う教育をせず、道徳教育を教科にせず、教科書さえ作らずに六十年を過ごしてきた。芦田均の心配事は現在も変わっていないのである。

安倍前首相は「戦後レジュームからの脱却」をスローガンにして真に独立した国家への衣替えをしようとしたが、その核心は憲法の改正と軍隊の創設であろう。

芦田均は明治三十七年柏原中学を卒業、一高・東大を経て大正元年外務省に入省し、外交官として活躍したが、昭和七年には衆議院選挙に出馬して政治家の道を歩んだ。昭和二十一年六月憲法改正案が議会に提出

され、芦田均は帝国憲法改正案委員長になり憲法改正に尽力、昭和二十二年には民主党を結成。世論に迎合せず権力におもねることなく、孤高の政治家で最後のリベラリストといわれている。

「これからの社会の在り方を考える会」の活動

尾崎　美代子（市島町）

私たちが十数年のアメリカ生活を終えて帰国したときの日本は余りにも変わってしまっていました。その当時の日本は、日本古来の良さを捨ててしまい、外国のものは何でもすばらしいというような風潮でした。日本は模倣の文化とよく言われますが、昔は外国のものを日本に合うように上手に消化して取り入れていたように思います。

子供たちには日本の良さを言い続けていました。その当時、小五の長女は、アメリカでは毎朝星条旗の前に立って胸に手を当てて誓いの言葉を唱和してから授業を受けていたのに、日本の学校では国歌も教えられず、帰国子女というのでいじめにもあい、アメリカで話していたこととのあまりのギャップに日本に対してすっかり失望していました。

娘と同じクラスに強烈ないじめっ子がいて、その子から沢山の子供たちがいじめられていました。担任の先生を含めそのことで何度も父母会がありましたが、解決のないままに子供達は卒業してしまいました。中学でも相変わらずいじめは続き不登校にもなりました。幸い学校の対応が早く長引かないで再び学校に行きましたが……。（そんな娘も今は社会人、海外で仕事をしています。）

このようなことがきっかけで二〇〇三年五月から主人と「これからの社会の在り方を考える会」を始めました。

その当時、子供たちの犯罪の低年齢化、凶悪化は目に余るものでした。

欧米のように個人主義の蔓延する中、家族の絆が希薄になり、子供たちの満たされない心がこのような犯罪を引き起こすのではないでしょうか？

社会がめまぐるしく変化している中、家族崩壊が益々進行し、そのしわ寄せが子供たちに重くのしかかっているように思われます。そのような現状に対し家庭の重要性を中心に、これからの社会がどうあるべきかを講演会、施設訪問、意見交換会、勉強会などを通し考えていこうと活動しています。

大体二か月に一回、第三土曜日午後一時から三時（講演一時間　質疑応答一時間）逗子市民交流センターの会議室で行います。例外として講師の都合で曜日や時間が変わることがあります。会場は二か月前の一日の日に抽選で決まります。参加者は大体二〇名前後です。

二〇〇八年七月までに合計三四回講演会、施設訪問（久里浜少年院　横須賀米軍基地内高校）、意見交換会、勉強会などをしてきました。

以下はその一部です

・久里浜少年院施設見学と講演会
・正しい子供の育て方
・薬物から子供を守りましょう
・家族を基盤とした社会？個人を中心にした社会？
・アメリカにおける教育改革
・学校における性教育の現状
・開発途上国の子供たちに教育の環境と機会を
・家庭の危機、日本の未来の危機
・日本文化を通しての国際交流
・現代人の心の病を考える
・これからの社会の在り方について
・宗教教育の課題と可能性
・日韓学生国際交流会を通して見えてきたもの
・教育改革その課題と問題点
・才能を理解した子育て
・親学の理念と親子の絆―親ごころ―
・道徳教育の方向性

この国や世界の未来を担う子供達のために、今私たちに何ができるのか？　まだまだ試行錯誤の連続です。当会に興味をお持ちの方、ともに学び、考え、アドバイスしていただける方是非ご連絡ください。

（連絡先）「これからの社会の在り方を考える会」尾崎

ＴＥＬ＆ＦＡＸ　０４６-８７３-４１４４

人のために役立つ喜び

高松　常太郎（春日町）

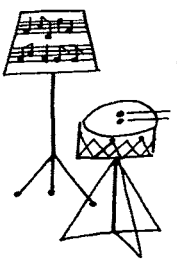
私、現さいたま市（旧大宮市）に居を構え約四十年、会社の定年を迎え、さいたま市のシニア・ユニヴァシティに応募、二・五倍の難関を突破したのか、今年四月入学出来ました。一一〇〇人の学生の中（六〇歳以上）第八回生です。女性が七割、あたかも日本の現在の社会、女性大国、日本の縮図の市です。

大宮校校友生徒会会長におだてられ推薦され、唯今少しずつ活躍しています。私も世の中に還元、恩返し出来ればとの考えもあり、人のため役立てることが微力ながら喜ばれるだろう。豊かな心を持ちたい、感謝、慈愛、敬い、詫び、赦しの心を胸に刻み、これからの残された人生を効率良く生きて行こうと入学してみました。

大宮校は一年ですが、楽しみです。次から次とあるそうです（二年、三年、四年）。私は今幸せですし、特別な技量もありませんが、残りの自分の時間を思い切りまっとうしたく、地域そこら中に顔を出し遊んでいます（ゴルフ、カラオケ、ダンス、水泳）。

先輩はじめ色々な人々と出逢います。素晴らしい人々もおられます。花が咲き、実がなって、人類が万物の霊長という通り、生きてる全てが、皆幸せになるように、この年齢になるまで深く考えることが出来ませんでした。

次の世代に引き継いでこそ、この世の美しさを遅まきながら納得です。つまらない近況、文章ですが、応募させて頂きました。



折々の記(5)

井本義一（柏原町）

○―執筆を担当した一月十三日活動日記（能ケ谷西緑地だより二月一日号）より―

作業人員一三名姓名省略。寒風無く絶好の作業日和。女性グループは予定通り中央広場の雨水を逃がす側溝に、堆積した落ち葉と泥土を小型スコップで排除する作業。男性グループは小田急住宅下のお花見広場で、枯れてはいるが、植樹したサツキなどを覆い隠さんばかりに生い茂った萱類（特にチガヤ）の除去作業。先ず長く枯れ伸びた萱、雑草類のたぐいを両手で引きちぎり、笹は鎌で刈り取った。萱雑草類を排除した後は、足にまつわることなく、すいすい歩けて気持ちよくなった。

作業後、緑地産のシイタケの醤油焼き（焼き食い）と、里芋、野菜、豚肉一杯の粕汁に舌鼓を打ちながら、二月の予定を話し合い、先ずは講習を兼ねて梅ノ木の剪定をすることに決定した。

（19・2・1日）

○昨日スポーツクラブで、苦しそうな花粉症の知人から「ここまで出てくるのが精一杯」の声を聞いた。またクラブ内浴場、更衣室―裸の世界で、アトピー症の人も老若を問わず少なからず散見する。わたしはいまのところいずれにも発症経験はなく、勤務時代を振り返ると三十年前（昭和五十二年ごろ―たしかカラオケブームのスタート年か？）は、両症状とも見なかったと記憶する。因みに四年前から妻が花粉症で可哀想だがどうしようもない。飛来が収まるのを待つばかり。

上記と同時点で、現在「携帯を持った猿」と揶揄されて久しい携帯電話も、交通機関で利用万能各種パスカードもなかったと思う。革新時間はますます急ピッチだ。流れ過ぎ去る時間のなかで、各種環境汚染とゴミの増加も見放せないし、前述の新器具類の出現により、われわれは得たもの（利便性）も多かった反面、失った時間と対価―間接、直接の病気（予防も含む）など対応時間などのために、緊急を要する地球環境改善などの大切な時間が食われて―はとてつもなく大きいし、それはイノベーションが叫ばれる今日、情報技

術世上においては、ますます増大するのではなかろうか？　それは思いやりや助け合いをはじめとする精神面でも。

今日地中の虫が出てくる啓蟄日、先月来の異常な暖気でまだだったの？　の感じで、悠久の流れ自然界時間よお前も変ってゆくのか、変らされているのかを思った。

（19・3・6日）

○先日、同期入社同窓会の席上、以前わたしの後ろ歩き運動について質問した真向いの席のN君からボランティア活動はどうして？　と咄嗟に聞かれて、「男のロマンだ」と答えたまま話が他に移りそのまま別れたが「わたしのロマン」について整理した。

二つある。青春時代からの悔恨と郷愁＝ノスタルジアから。自分のやろうと思うことを今「せめて昔の代わりに何か……」素直に続けられる限りやってみたいのだ。

悔やみ残念なことは、若いころバスケットボールに自分なりに打ち込んだつもりだった（職業人になってからも）が、生来の不器用に加えて、気の弱い性格からか闘争心に欠け競り合いに負けることが多く、チームメートに迷惑をかけたことが心中の引け目の始まりで、その後職務面、その他私生活面でも、努力不足と能力不足から、満足すべき事が出来ず、いつも中途半端で職業生活を卒業した自分に対する物足りなさ、劣等感、悔しさがいつもわたしのなかにずーっと沈潜していて、これを振り払うように勤務生活の幕引き月の翌月からボランティア活動に飛び込んだ。

望郷心、郷愁面では、山持ちでない実家であったので、中高生時代から弟とともに亡父母に連れられて、個人所有でない山場（尾根近くの深山幽谷のような―旧国領の境近く？）まで踏み入り燃料用の雑木芝刈り作業に従事した。休日の早朝五時半前後であったか、車で濃霧立ち込める東奥の池の上まで行き、山谷沿いに歩き上りつめ、尾根筋に群生する雑木芝類を刈り取り束にし、車まで坂道を背中や肩で運び下げた。あの昼食時、卵焼きや漬物、焼塩鮭と紫蘇まぜご飯の味を忘れない。

早朝の山風とひんやりした山の精気が、深山を渡る鶯声が今も消えることなく入り込み、わたしの心身に染み込んでいる。山郷の精気を受けた感動は一生忘れ

ない。

今月から「ＮＨＫラジオ深夜便のうた」で「ふるさとの山に向ひて」―石川啄木の詩―（一握の砂）から、新井満氏が作曲し唄っている―が始まった。……／言うことなし／ふるさとの山は／あー／ありがたきかな／ありがたきかな

「さまざまのこと思い出す桜かな」―芭蕉。あちこち満開の今日。

（19・4・2日）

○―執筆を担当した五月十二日活動日記（能ケ谷西緑地だより六月一日号より）―

今日は緑地南側斜面（マンション側）に四年前であろうか梅などを植樹したスロープ地面の下刈り作業。すっかり初夏の陽射しで汗だくの全身にやや強めの薫風が心地よかった、作業従事人員女性五名、男子八名。

絶好の日当たり傾斜面であっても植物（雑草）分布があるようで、上部には雑竹がはびこり、下部の急斜面には、太いつる草や、問題のセイタカアワダチ草が群生していた。

作業順序として再生力旺盛な右記アワダチ草の根を残さないように、出来る限り下のほうの茎を一本一本指でつまんで、根ごと引き抜き排除した。あとは雑竹、蔦や雑草類を刈り取った。

小休止時、雑草の上に寝転んで痛い腰を伸ばし青空を見ながら、ヒトをはじめ動物の生育環境バランスが崩壊しつつある今日、作業完了後の若い梅ノ木たちが、良好になった成長環境を喜んでくれているように思った。

（19・6・1日）

○今日二十時からＮＨＫテレビ「ためしてガッテン」。寝たきり予防の切り札、口腔ケア術のテーマで、飲み込み障害＝廃用症候群で咀嚼した食物を嚥下する場合、加齢とともに食道でなく気道の方に誤って飲み込むことがある。それは舌の動きの鈍化（使わないので衰えて）で食道へ食物が運ばれないため、低栄養→免疫低下→発症（肺炎など）→寝たきりになるので、舌の口のなかでの上下左右の運動は勿論、普段からよく噛んで食べる、喋る、歌う（カラオケも）ことも肝要だとの前半の要旨で、後半は口内に菌が億数も発生する歯の磨き方と洗浄薬のことだった。

わたしの口腔養生だが、約八年ぶりで左下奥の奥歯（最奥の親知らずは抜けて無い）が部分虫歯で痛み

あり、四月二十三日から毎週一回、スポーツクラブの帰途今も通院治療している。その一本のみで終わりと思っていたらあと上下三ケ所に部分虫歯有りとのことで、あとは先生にお任せしている。因みに金属をかぶせている自分の生来歯の数は、とのわたしの質問に上十四本、下十二本有るとの回答だった。

先にラジオの耳学問で、ヒトの重い頭部を支えるのは、頚椎と上下の歯の噛み合わせによると知り、頚椎を傷めているわたしには、片方の歯茎をこの際徹底して治療したいと決めていたが、六月三日付け丹波新聞「歯のお話」に和久雅彦先生が植田耕一郎先生のお言葉として「体は健康　口は寝たきり」を教えていただき、全く合点と思っていたところ、冒頭の「ためしてガッテン」である。

植田先生の「寝たきり」は身体の健康気配りに比べて、口腔内への無関心過ぎることを言っておられるのだが、テレビは寝たきりになる症状結果を訴えていた。この歳になっても若い歯科医師に磨き方良好と褒めてもらうのが嬉しくて、勤務から解き放たれて時間は作ればいくらでもあるので、毎食後鏡、洗面タイル前で四脚の木製椅子に座り、両腕をタイルの上に被さるように置いて、虫歯と歯周病予防のため歯と歯茎周辺を固めのブラシと、ブラシの穂先が長く柔らかめの三本で最低十五分間マッサージをしている。そのあとは七年前から続けている洗浄薬による口内清浄である。含んでクチュクチュしながらケイスケの排便砂の取り替えや、食卓の椅子に座りテレビを見ながら五分前後時間を稼ぐと、面白いように歯間のはさまりものや付着物が剥がれ排出できるのが面白い。座ってするので腰に負担はかからないし、箇所により激しすぎず緩すぎず磨き楽しく継続出来るのが嬉しい。また洗浄薬を使用しだしてから歯磨きクリームは歯が磨耗しそうなので使用していない。一回二十分、一日延べ一時間食後念を入れての作業で間食はしなくなったし、口腔内清浄完了で即三度の食事完了と考えている。

（19・7・11日）

○嬉しい目覚めであった。深夜便「心の時代」前の四時のトップニュースが飛び込んで来た。イチローが七年連続となる年間二〇〇本安打記録を、ヤンキースの豪腕クレメンス投手からホームランを打って達成した

のだ。

いつもの朝と違うこのときめく出会いを押えながら、四時四五分ウォーキングに出発。途中、風の極寒時早朝、能ヶ谷神社の高台地から見える丹沢山塊、主峰の奥に富士山、さらに右方に遠く屏風を立てたような南アルプスを、日の出前、晩夏の朝もやで、今日の喜びの日にシルエットも望見出来なかったのは残念であった。

神社横の石階段八六段を下りて、N不動産開発中の「千都の杜」住宅地の内周道路を自宅近く別の高台地への（一二〇段前後の高低差になろうか？）約四〇〇mを、後ろ向き歩きでゆっくりと登りながら、彼の心中を忖度（そんたく）した。毎日納得のいく練習の繰り返しからの成果、さらに次の目標への一里塚と考え、一般人には大変なことなのに彼には「普通」のこととして、粘り強く静かにスタートを切っているのではないのかと。この七月、メジャーリーグのオールスター戦で最高殊勲選手に輝いたことと併せて今回の金字塔は、本当に「すごいこと」の一語に尽きる。

因みに前月後半の某日であったか、冒頭「心の時代」で某体育大学の教授がイチローについて一般人と相違点を語っていたのを思い出した。聞き間違いはないと思うが、違うポイントは、①継続力②集中、こだわり力③執着、工夫力を毎日の練習鍛錬、プレー上で最大限に発揮しているとのことであった。加えて松坂大輔選手の例をあげての説明であったが、十分な練習、実績に裏打ちされた自分自身への④衿持を持ち続けていることも大切との話で、さすが天才、超一流と称されている彼だからと得心した。（19・9・4日）

○今日、帰宅した妻のまさに「針の一刺し」の話であった。「わたしの腰が曲がってきた」と親しい七人の友人と久し振りの会食の席で話をしたと。いつもわたしの健康を気遣ってくれているから喋ったと理解したが、「直ぐに医者に見せないと」などなど友人から助言をもらったと言うのだ。言われなくても足の短い（わたし）裕次郎世代は、プライド面からも気になって仕方なくて、酷暑と言われた今夏も毎朝、児童公園の水栓コンクリート角に尾骨あたりをもたせかけて、上半身を反らせながら、両手を合わせ、左右に捻って腰周辺筋肉を鍛える運動（一〇〇回）を続けるなどし

て、徐々に矯正効果が上がってきているのに。とは言うものの、ついつい曲がりかける腰に、駄目かなの弱気を追っ払うのに留めの一刺しではあった。「背筋をピンと伸ばして、正しく颯爽と歩きたい」の目標を新たにした。

われわれは加齢とともに我が強くなり、短気になって些細なことで口喧嘩をして、あとでしまったと反省することしきりで、すこしも進化してないと思う日もある。また、終日顔を突き合わせているより日曜日を除き、午前中スポーツジムへ行き（とは言うものの現在はサウナ、入浴専門）、片や妻は午後テニスへ（天候にもよるが週二〜三日。毎週月、木曜日は水泳教室へ午前中）行っており、それぞれマイワールドを持続しており、わたしにとっては勤務時に無かった新鮮さを味わっている。七・八年前になろうか、世上「亭主元気で留守がいい」と言われ、重ねて「粗大ゴミ」「濡れ落ち葉」、果ては「産業廃棄物」と言われるより、市民図書館行きも含めて外出、すれ違いも二人と一足の生活にアクセントがあっていいと思う。

このお互いの運動生活が続くか一寸先は判らないが、出来る限り元気で続いて欲しいと思うし、釈迦と孫悟空の教訓ではないが、お互いがお互いの手の平の上で元気に、屈託なく動きまわれればそれでいいと思う。夫婦と言えどもお互いの心中を一〇〇％ＫＹ（空気を読めない・読む）出来るものでもないし、時おりの衝突は刺激でありストレス解消となって、それも又よしと考えている。

（19・10・1日）

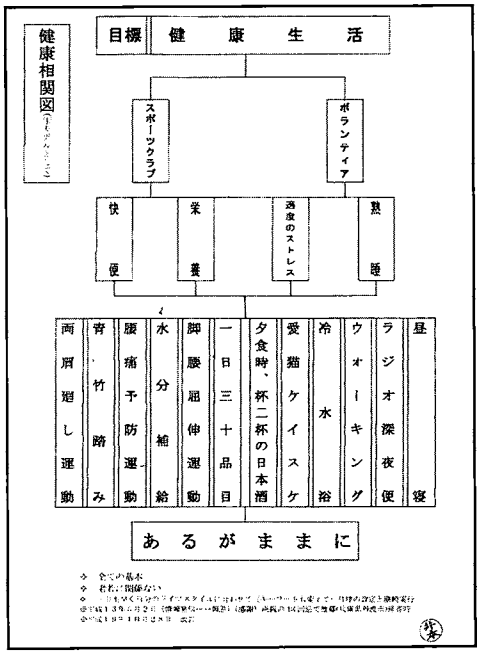
○妻はオープン当初に友人と観に行ったようだが、同じ町内にある旧白洲邸「武相荘―ぶあいそう」を単身初めて歩いて観に行った。白洲次郎、正子夫妻が昭和十八年（一九四三）能ケ谷町に引越しされ、武蔵と相模の境にある当地に、氏独特の一捻りしたいと言う気持ちから無愛想をかけて名づけられたと開館の挨拶文にあった。

丹波市内でも減少している茅葺き屋根の家屋内に第一ギャラリー、囲炉裏端風景、書斎風景など六十数年前の生活に触れることができた。能、骨董、染色工芸などにとんと無学、無縁のわたしには展示されている関係物品の真価は判らなかったが、引き出しに金具が一杯ついた重そうな箪笥は、遠い昔の実家が蘇った。

第二ギャラリーは次郎氏関係が展示されており、直筆「葬式無用、戒名不用」の遺言書をはじめ「自分の信じた原則＝プリンシプルには忠実」の生き様、今日出海氏が観た評伝記述ほかの数々はさこそと興味深かった。

（19・11・3日）

○拙記―Ⅰ（本誌第35号・16年11月号）に（健康相関図Ⅰモデルとしてと）掲載したわたしのシンプルな「健康生活目標図」も、時移り離職などによる出会いのヒト、モノ、コトも変ってきた（キーワードも変えた）ので、この10月に改訂（別図）した。思えば三度目の職場（パート勤務）で、両親の十三回忌のため十三年＝〇一年五月、休暇をとった帰省時に、実家の食卓で初めてまとめあげたものだ。



あの苦しかった時代に健康体質に育て上げてくれた両親への感謝、報恩の思いをこめて、昭和五十五年＝八〇年頃から自分なりに実践し出した健康生活情報の集大成―健康生活目標図をコピーし、先ず弟妹、子供、親しい友人達に発信したものだ。

本図欄外下のメモ書きは今回も「①（健康は）全ての基本②老若に関係ない③一日も早く自分のライフスタイルに合わせて（キーワードも変えて）目標の設定と継続実行」と変らない、別図キーワード12のほかに①口腔内の清掃マッサージと清浄②腰骨曲がり矯正運動③背中と腹部の乾布摩擦④浴槽内での両足首回しなど、将来この実践項目は必ず減少すると思うが、現時点では増加傾向にあるのが嬉しい。

前月受診した誕生月定期健診の結果は、白血球―WBC―数値（3・8―若干低いが問題なしと）を除きオール基準ライン（ほかは低と高）であった。今年も

お陰でありがとうと妻とケイスケに言った。―別図―

（19・12・2日）

○暮から年始にかけての出会い（再会）と別れであった。家族においても。息子一家四人は元日の一三時に来てゆっくり話す間もなく、一七時過ぎに帰って行った。娘は三十一日夜、紅白に合わせるように帰って来て、三日の九時三〇分ごろ同性の友人と新横浜で合流し、二泊三日で奈良・京都へ旅立ってしまった。久し振りで二つの絆の風がわれわれと交じり合って、今の我が家に皆無の孫達のワーワーキャーキャーの騒音とともに、さーと吹き過ぎて行ってしまった感。正月には帰ってくるのだとの期待感と、嬉しさのあとには一抹の脱落感と淋しさが残った。

別れと言えば、昨年十二月早々にいただいた喪中ハガキは一二通。これを全てここ三～四年来、普通ハガキに毛筆で寒中見舞いを認めて、三十一日に投函し、元旦に到着するようにしている。うち旧職場にかかわる四人の先輩自身の訃報が悲しかった。出会いの楽しみは十二月二十九日に、われら柏陵にっぱち会（柏高5回―53年卒）の卒後五十五年記念大会を三月二十九日柏原でとの開催通知を受け、出席ハガキを三十一日幹事の徳義氏宛投函。厚生労働省は人生八十五年時代を言い出したようだが、わたしに与えられた残り時間は判らないのだ。一期一会ならぬ残期一会と言うべきか、節目の貴重なチャンスは逃したくない。あの遠く懐かしい青春時代の友垣の誰と再会できるのだろうか？　わたしには五十年記念大会から五年ぶり母校地元での出席は、皆と話は出来なくても一堂に会するだけで、文字どおり故郷を実感するのだ。今からワクワクと気持ちが高揚、若やいでいる幸せな年始の毎日だ。初詣のおみくじは「大吉」であった。今年は自分自身の選択によるが、この国の将来をはじめとして、どんな出会いと別れがやってくるのだろうか？

（20・1・6日）

妻剪定の椿紅白咲く　20年1月13日・記

山行記

白馬岳登頂記

川端教子（青垣町）

七月二十六日、八名が新宿のバスターミナルに集合。日頃は月に一度近郊の山にハイキングに出かけているグループの夏合宿である。健脚者であれば前夜発の一泊二日のコースであるが、このグループの健脚度に合わせ、二泊三日で計画された。私は、この日程で歩いたならばこの時期に咲いている高山植物を愛でながら、また、その姿をデジカメに収めることも出来るであろうと参加させてもらった。

バスは定刻の八時に出発したものの、案の定中央高速の渋滞に巻き込まれ、白馬駅には予定より一時間半も遅れて到着した。駅前から二台のタクシーに分乗、途中のAコープに立ち寄り、地場産の新鮮なキュウリとトマトを買い込み、登山口の猿倉に向かう。猿倉荘前で記念撮影後、それぞれのザックを担ぎ、二時半に出発した。樹林帯を登り、林道へ出る。タマガワホトトギス、オニシモツケやオオバウバユリが咲いているのを見ながらゆっくり歩き、四時に白馬尻小屋に着いた。小屋の周りにはキヌガサソウの大群落があり、思わず大歓声があがった。宿泊手続きを済ませ、部屋にザックを置き、小屋の前の広場へ出る。目の前には明後日に歩く予定の小蓮華山の稜線が望まれ、左手奥には大雪渓に続く沢が見える。雪渓から吹き降りてくる風に最初は心地よさを感じていたが、次第に肌を刺す冷たさに変わっていく。稜線がガスで覆われたり現れたりする様をデジカメに収めながら、その雄大な景色を眺めていた。

二十七日、朝食を済ませ、お弁当をザックに詰め六時前に歩き始める。樹林帯を抜け、大雪渓の取り付き点でアイゼンを付ける。今日はトップを歩く。後ろに続くメンバーの歩みを見ながら一歩一歩慎重に雪渓を登って行く。途中少し平坦になった場所で立ち休みをし、八時には大雪渓を抜けることが出来た。

ここで一端アイゼンをはずし、岩稜帯をジグザグに登る。登山道の脇にはミヤマキンポウゲ、クルマユリ、

テガタチドリなどの高山植物が咲いており、思わずデジカメのレンズを向けるが、うっかりすると後から来る登山者にぶつかり渋滞となってしまうのでタイミングが難しい。九時小雪渓手前に着く。岩肌に山頂まで一・四ｋｍの表示がある。杓子岳の岩峰と目の前に広がるハクサンイチゲなどが咲くお花畑を見ながら小休止。小雪渓はアイゼン無しでも通れると思ったが、念のためアイゼンを付け、小雪渓をほぼ水平にトラバースし、渡りきった所でアイゼンをはずした。ここからは登山道の左右に拡がるお花畑を見ながら山頂に出られるはずだ。

十時過ぎ、早めの昼食をとり山頂を目指すことにする。三年前、大雪渓から朝日岳・蓮華温泉を縦走した時に見た光景を目に浮かべながらお弁当を広げた。しかし、今年は積雪が多かったためなのか、前回歩いた時より一ケ月程早かったためなのか登山道の両側には残雪が多く、前回のような山肌全体がお花畑という状態にはなっていなかった。それでも雪が解けた処には、ミヤマキンポウゲ、ミヤマオダマキ、イワオウギ、ハクサンフウロウ、キバナシャクナゲ、チシマギキョウ、ウサギギクなどが咲き、今回私の最大の楽しみであったウルップソウもあちこちに見られたのは感激であった。十一時過ぎ頂上宿舎を経て十二時過ぎに白馬山荘に到着した。

明日は白馬頂上経由で下山予定だが、割合と早い時間に着けたので、部屋にザックを置き、白馬山頂へ向かった。山頂までの登山道周辺もお花畑が拡がり、ウルップソウやミヤマクワガタ、オヤマノエンドウなどが咲いていた。頂上では写真を撮り、周囲の山々の遠望を楽しんでいたが、ガスが掛かってきて遠くで雷鳴がなり始めたので、慌てて山荘に戻ることにした。

山荘近くまで戻ってくると、早くもポツポツと雨が落ちてきた。そして、二時頃には風も強まり、雨脚も強くなった。山荘横のレストランで生ビールのジョッキを傾けながら、大降りにならない内に戻ってこられ良かったねと喜び合ったが、「こんな雨の中を歩いてくる登山者は大変よね。たとえ雨具を着ていても何の役にも立たないよね」などと、それぞれの体験談を交えながら一時を過ごした。

それでも五時頃には雨も止み、外に出てみたが、立っ

上：白馬大池をバックに（2008.7.29）
右：白馬大雪渓取付き（2008.7.27）

ていると吹き飛ばされそうになるくらい強い風が吹いている。雲が吹き飛ばされ、杓子岳、白馬鑓ケ岳の向こうには剱岳、立山、彼方遠くには北アルプスの峰々や槍ケ岳までも見えた。また、旭岳の向こうには富山湾、能登半島の一部や姫川の先に続く日本海までが見えたのは、本当にラッキーだった。しかし、夜になると再び風雨が強くなり、山荘を叩きつけ、その音が気になって眠れない一夜を過ごした。

二十八日、五時起床。相変わらず風雨が強く大雪渓は通行禁止。今日は小蓮華岳から白馬大池を通って下山予定だったが、このコースからの下山は時間的に難しくなった。風雨が収まれば大雪渓を下るコースで検討することにして様子を見ていたが、無理な下山で危険を冒すより、一日予定を延ばし、二十八日は山荘で停滞ということになり、部屋でウトウトして過ごす。お昼前には、大雪渓通行の安全性が確保され、雨具に身を固めて下山する登山者を見送る。一方、新たに到着する登山者も徐々に増えるが、いずれも雨に濡れての到着で本当に気の毒であった。

山荘での夕食は早い。五時頃に食堂前に並ぶ。私達

のような連泊者は左側に二列に並んで待ち、先に今日到着した登山者から食堂に入って行く。ふと隣の列に並んで人を見て声を掛けた。「もしかしたらYさん？」「何処かでお会いしました？」「ニュージーランドのミルフォードでご一緒した……。」と名乗った途端、Yさんもはっきりと思い出したらしく、全く予期せぬ再会に満面の笑みを浮かべ、二人して思わず抱き合ってしまった。

ちょうど五年前の年末に三泊四日でミルフォードトラックを歩いた時、個人で参加されていた豊田市在住の母娘である。私も同じように個人参加であったので、日が経つにつれて仲良くなったYさんであった。今回の白馬岳へは妹さんと二人で来たとかで娘さんの姿がなかったのは残念であったが……。

二人はお昼過ぎに下山し掛けたが、風雨が強く、引き返して来たとのこと。それにしても白馬の山頂で再会するというような偶然が起こるなんて思いもよらなかったことであった。

二十九日、三時半に起床。防寒を兼ねて雨具を着込み、四時半に出発し、山頂近くまで行ったが、風が強く山荘に引き返してきた。部屋に戻り朝食をとり、五時四十五分に再出発。心もち風が弱まった感じはするが相変わらず強く吹いている。皆慎重な歩みを続け、馬の背も無事に通過出来、六時五十分に三国境に着く。この辺りに多く見られるコマクサも雨に濡れている。一昨日、登山者が「三国境辺りにツクモグサが咲いていたよ」と話していたので、楽しみにしていたが、風雨に痛めつけられて哀れな姿に変わっていたツクモグサらしきものと、咲き終わったツクモグサが確認できただけで、次回のお楽しみとなった。

小蓮華岳を過ぎたところではライチョウ二羽を確認。八時半、船越の頭に着き、雷鳥坂を越え、白馬大池に向かって下って行く。途中で雪倉岳の方にくっきりと虹が掛かっているのが見えた。登山道の脇のガレ場にはコマクサ、ハイマツの根元近くにはリンネソウの群落、大池の周りお花畑にはチングルマ、ハクサンコザクラ、イワイチョウなどが咲き誇っていた。九時十五分白馬大池に着く。ここで二十分程休憩をとり出発。池の左側の大岩では足の速い後続者に譲りながらを辿っていたら、Yさん姉妹が追いついてきた。急い

で下山することもないのでということで、栂池まで私達と一緒に行くことになった。

山に掛かっていたガスもこの頃から取れ始め、乗鞍岳の頂上では日差しが戻ってきたので、雨具を脱ぎ少し身軽な服装となる。鮮やかなタカネバラを見ながら下って行くと、またまた大岩群が現われ、登山道は急降下し、眼下には天狗原が見え隠れし始めた。栂池方面から登ってくる登山者の数も次第に多くなる。大雪渓を登るのもきついけれど栂池コースの登りもきついだろうなと考えながら降りて行った。それでも登山道の脇には、アオノツガザクラ、クロツリバナ、オオヒョウタンボクなどの花が見られ、私達の目を楽しませてくれた。天狗原の木道を歩き、湿原で一休みした後、更にジグザグを繰り返して下降し、十三時二十五分に栂池自然園に到着した。

私達はここでYさん姉妹とお別れをし、ロープウエイ・ゴンドラを乗り継いで栂池高原に下山した。そして、栂の湯で三日間の汗を流した後、タクシーに分乗して白馬駅に戻り、駅前のレストランで今回の山行の反省会を兼ねて遅めの昼食を取った。

四時三十五分発の高速バスに乗り一路新宿へ向かう。往路のような渋滞に巻き込まれることなく、快適に高速道路をバスは走って行く。けれども新宿に近づくにつれて大粒の雨がバスの車体を濡らし始め、バスターミナルに着く頃には、雷鳴が鳴り響き、バケツをひっくり返したような雨になっていた。またまた雨具を着込み、走って地下道の入り口に飛び込んだ。JRの新宿駅で改札を通ろうと思ったら、「山手線内で落雷があり、山手線は止まり、振替輸送中」のアナウンス。幸いに湘南新宿ラインは動いていたので、ラッシュアワー並みの混雑した電車に乗り、渋谷経由で二十三時過ぎに我が家に着いたときはさすがの私も正直ホッとした。

最近の中高年登山者の増加に伴い、滑落事故も多くなってきている。山歩きを始めて丸八年。これまでは比較的順調にきているが、悪天候のために山で停滞したのは初めてのことである。今回のことを教訓にし、これからも慎重な行動をとり、「無事に山歩きが出来て良かったね」と喜べるような山歩きをしたいと思っている。

（平成20年8月・記）

山行記

山と温泉に魅せられて・Ⅱ

山本喜則（市島町）

前回寄稿（第36号、平成十七年十一月）から約三年が経過したが、小生の日本百名山登山熱と温泉めぐりはその後も止まることなく順調に進んでいる。これまでの登頂数は丁度七十座、訪れた温泉は九九六箇所。沖縄県の温泉のみが未経験である。今年の百名山登山歴は天城山（二回目）、岩木山、八幡平、岩手山、八甲田山、宮之浦岳、五竜岳、雨飾山、塩見岳、間ノ岳、北岳、奥穂高岳、空木岳で、既に当初の目標であった自分の年齢数をはるかに超えており我ながらよく頑張ったと思う。

#

初夏に屋久島の宮之浦岳に登り、これで木曽の御嶽山以西の山は完登し、今後は日本アルプス、北海道等の未踏の山が目標となるが、一昨年に槍ヶ岳、昨年は剱岳と最も難関な山を制覇し、残りは時間さえ掛ければ大丈夫と思うので、何とか三年後には目標達成と夢見ているのだが……。屋久島は一ヶ月のうち三十五日雨が降ると言われており、その覚悟で訪れたが三泊四日の日程中快晴に恵まれ、おまけに四箇所の温泉に入れたことは望外の喜びであった。

#

頂上に着いた時の達成感、三六〇度のパノラマビュー（毎回とは行かないが……）の素晴らしさは苦しさに耐えた者だけに与えられる特権であろう。山小屋に泊まり雲海の上で味わう酒は格別であり、見ず知らずの人との会話が弾むのも下界では味わえない楽しみである。当然のことながら、話題は山の話が中心であるが、お互いに何となく自分の山行の自慢めいた話をさらりと披露する傾向があるのは山男の習性なのだろうか。

#

天城山の頂上で出会った若い女性の二人組はなんと丹波の春日町から来たと言うではないか。しかも小生の姪っ子の知り合いであることが判り、その偶然さに

北岳頂上にて

ただ驚くのみ。東北のサービスエリアに立寄った際も親戚の者にバッタリ遭遇したり、雨上がりのガスの多い大雪山では頂上で写真を撮ろうとしたその瞬間のみ靄が晴れて薄日が差し、その後は視界の悪い状態に逆戻り。残雪の多い八甲田山の雪渓では頂上間際と下山の二箇所で方向感覚を見失なったが、その都度偶然男女の二人組に出会って事無きを得た（登山中に出合ったのはこの二組だけ）。どうも小生には偶然と幸運が住み着いているようだ。

#

最近は数日間の縦走後でも筋肉痛になることは無く、これも日頃のトレーニングのお陰と自負している。普段から出勤前の一時間のウォーキングの際に両足に二キロずつのウェイトを付け、登山靴を履き、本番前には更にザックに水を入れたペットボトルと石ころを入れて背負って（約一〇キロ）歩いている。ハードなコースでは天候の激変に備えて、装備の軽量化と早朝出発を心がけ、五〇分歩いて一〇分以内の休憩の配分で、頂上に着いても以前のようにゆっくりと食事をするなどということはなくなりました。

#

温泉については、全国に三千数箇所はあると言われており、まもなくその内の千箇所を訪れたことになるが、この辺でそろそろ数を追うのは止めようと思っている。だがその前に何がなんでも沖縄県に出向かなければ……。また北海道の東部には興味深い温泉がたくさんあるので、いつか集中的に廻りたいとの思いもある。

ちなみに、これまでに訪れた温泉の都道府県別順位は長野（一一一）、福島と群馬（七〇）、北海道（六四）、栃木（六一）、静岡（五九）、山梨（四五）、青森（四四）、新潟（四〇）で、兵庫県は二〇箇所です。

#

浅間山の麓にある高峰温泉ではクロスカントリー用の道具を無料で貸してくれるので、昨年初めてトライしてみたが、これがなかなか面白く、いい運動にもなる。これをきっかけに、若い時からやりたくてもやれなかったスキーに挑戦したくなり、この歳になって初めて、猪苗代で二泊三日のマンツーマンの特訓を受け、どうにか滑れるようになり、これも日頃から足腰を鍛えていたお陰と自画自讃している。この時のコーチが埼玉県在住の根っからの山男で、その後彼の紹介で、某山岳クラブを紹介され、そこのメンバー達と毎月飲み会を楽しんでいる今日この頃です。

#

日頃ストレスを感じておられる諸兄よ、たまには仕事を忘れて先ずはハイキングにでも出掛けられては如何。小生は山と温泉と地元の手打ちそばの三点セットと呼んでいますが、これらを楽しめばストレスなどはどっかへ飛んで行ってくれますよ。

（平成20年9月1日・記）

篠山層群は化石の宝庫

―続々と貴重な発見　環境教育の好機に―

小田晋作
（丹波新聞社社長）

一昨年、山南町上滝の「篠山層群」から一億数千万年前の草食恐竜の化石が見つかり、十数メートルの体長や骨のそろい具合など世界的な規模のものであることがわかりました。「丹波竜」と名付けられて発掘調査が進んでいることは周知の通りですが、今年に入って、同じ篠山層群の別の場所から新たにまた二例の発見がありました。一つは国内最古級の小型哺乳類の化石、もう一つは肉食恐竜の歯。今度は場所はいずれも篠山市内です。恐竜の歯の方は、体験授業中に小学生が見つけたということで、大きな話題を呼びました。しかも、丹波竜の発見者の足立洌（きよし）さんが、今回も二例とも関係されており、改めて足立さんのすごさを痛感させられます。〝丹波竜その後談〟を書きます

肉食恐竜（獣脚類）の歯は、丹波竜の現場から三キロほど離れた所。七月初め、篠山市立大山小学校の六年生が講師の足立洌さんに連れられ、ハンマーやルーペを持っての体験授業中に、見つけました。

二枚貝や巻貝の化石が続々と見つかったものの、「僕は植物以外には何も出ず、一時間が過ぎて今日はあきらめようとしていた時、足もとに落ちていた石を拾った。『これが最後の石か』と思って、ハンマーをふりおろした。石が割れた瞬間、黒く光る一センチもない小さな固まりが見えた。歯のような形をしていて、『まさか』と思ったが、足立先生に見せたら『これは大変なことになるぞ』と大きな声で言われた」と、発見者の足立希羅君は丹波新聞に作文を寄せています。

この歯は体長一～二メートルの獣客類のものと見られ、全国で二十例目くらいになるといいますが、小学生が発見したというのは驚きです。大山小では六年生担当の酒井達哉教諭が今年度から「大山化石発掘隊がゆく」という授業を始めていましたが、一

回目のフィールドワークでこの快挙を遂げました。

一方、哺乳類化石の発見はアマチュア研究家が作った「篠山層群をしらべる会」によるものです。会員の足立洌さんが昨秋、市内の露出した地層からこれまで未発見の脊椎動物のものらしい化石を見つけ、県立人と自然の博物館（三田市）が今年五月に本発掘をして調べたところ、化石を含んだ地層から哺乳類化石が確認されました。

やはり恐竜と同じ一億数千万年前に生きた、〝黎明期〟の哺乳類のもので、体長十数センチのネズミに似た生物の下あご。他にもトカゲの仲間の骨や小型恐竜の歯なども出ています。小型哺乳類の化石は国内三例目、世界でも五十五例目という稀少さです。

恐竜が最盛期だった当時、哺乳類はその足もとの茂みや木の上などでひっそりと暮らし、夜間に動いていたといいます。まだまだ多くの謎に包まれていますが、ヒトの祖先にもつながる可能性があるだけに、この発見は恐竜にまさるとも劣らない貴重なものです。

篠山市の大森作之さんが会長を務める市民グループの「しらべる会」は、丹波竜に刺激を受け、丹波市からも参加して昨年五月に結成。毎月例会を開いて発掘調査を行っています。

「大山発掘隊」にせよ、「しらべる会」にせよ、すごく幸運な発見だったことに違いありませんが、言い換えれば、「篠山層群には一億数千万年前の生物たちの化石がごろごろ埋もれている。根気よく探査すれば、誰でもチャンスに巡り合える」ということになるのでしょう。

さて私は、丹波竜を初め三つの発見にすべて関わった足立洌さんが、柏原の子育て学習センターでの講演で若いお母さんたちに、「土いじりをする子供に『汚いよ』と言う前に、『今私たちが生きているのは、すべて地中から出てきたもののお陰なのだ』という思いで接してほしい」と話されるのを聴いて感動を覚えたことがあります。

今から二千万年前までは日本列島はなく、今の日本はアジア大陸の東端にありました。丹波竜も大陸の上で生きていたわけです。酸素やオゾンは、太古の植物が二十億年かけて作ってくれたものであり、

現在の肥沃な大地は、四億年前に水中から陸に上がって生きてきた、数知れない動植物の遺骸によってできたのです。

足立さんは丹波竜を発見するずっと前から「生痕化石」、つまり古代の虫の這い跡や、「サンドパイプ」と呼ばれる、棲みかにされていたものなどに興味を持ち、「悠久の時を越えて連なる生命を感じることが今でも無上の楽しみ」といいます。先ほどの言葉はまさにこうした想いを持ち続ける人ならではのものでしょう。

地球上に生命が誕生しておよそ四十億年。生物は幾度となく大絶滅の目に遭いながら種類を増やし、やがて恐竜が地上を支配するようになりました。そして、先ほど述べた小型哺乳類が恐竜に代わって台頭し、現在の人類の繁栄へと時代は進むわけですが、ヒトの歴史はアフリカ原人に遡っても、せいぜい七百万年。恐竜に比べたった二十五分の一です。

そんな存在に過ぎない人類が、今や何者をも恐れぬごとく地球を汚し続け、温暖化の危機に自らをさらしています。そして、競争することにのみ価値が置かれた結果、子供たちは社会性を身につけることがおろそかになっています。この状況が変わらないならば、その行く末に、あの繁栄を続けた恐竜と同じ運命が待ち受けているのは自明と言って過言ではありません。

今こそ改めて子供たちに環境の大切さを教え、また他人を思いやり、感謝する気持を育てる。大人たちも共に学ぶ。丹波竜の発見は、そのための絶好の機会を与えてくれました。足立さんを初め「大山化石発掘隊」や「篠山層群をしらべる会」の活躍は、そうした可能性を示しています。

大山小学校６年生「化石発掘隊」と足立洌さん（後列中央右）、三枝春生・人と自然の博物館主任研究員（同左）
＝丹波新聞８月３日号より

私の職場

伝統芸能の生命力で人間再生

たざわこ芸術村・わらび座

清家　久美子（青垣町）

奥羽山脈のふところに抱かれたたざわこ芸術村・わらび座が私の職場です。

冬の間は寒さにじっと耐えていた木々たちがいっせいに芽を吹き、土の下からは生き物たちがひょこひょこと顔をのぞかせてくる春、村内に五つある稽古場からは、にぎやかな音楽と人の声が聞こえてきます。まもなく初日を迎えるミュージカルの稽古が佳境に入っているのです。そっと覗くと、俳優たちが汗びっしょりになって、真剣なまなざしで演出家の厳しいダメ出しを受けています。

隣にある大道具製作場では、上下とも黒のTシャツと作業ズボンに身を包んだ若い女性たちが（もちろん男性もいますが）チーフの指示の元に、回り盆（舞台に乗せて回す回り舞台―シーンによっては全力疾走も）を製作していました。

今年の春は、劇団部門に若い力を多く得て、緊張の中にも華やいだ雰囲気が漂っています。

一九五一年にわずか三人で産声をあげたわらび座は、日本の民族伝統に根ざした歌舞作品やミュージカルを東北の地から発信し続けてきましたが、その根幹にいつもあるのが生命への讃歌です。歌舞では地域に伝わる伝統芸能（民謡、踊りなど）の持つ生命力に焦点を当て、人々の心のひだひだに触れる作品を創り、近年のミュージカル作品では東北の風土で暮らす人々の中にはるか昔から培われてきた自然や人間、生命を持つものすべてへの愛情を横糸に、さまざまなオリジナル作品を生み出してきました。

そして今年は手塚治虫氏原作の「火の鳥（鳳凰編）」のミュージカル化が実現することになりました。いのちの連鎖を壮大なスケールで描いた「火の鳥」は、いのちの火を灯しつづけること、人間の再生をキーワードに作品を創ってきたわらび座にとって長年の夢でした。

四月に東京新宿で初日を迎えた

「火の鳥」は、「わらび座がこの作品を取り上げてくれたことを感謝します」と大変よろこばれ、その誇りを胸に全国公演に旅立って行きました。

ベテランに混じって必死に歌い踊っている若い俳優たちは養成所で二年間教えたわたしの教え子たちです。彼らが真摯に舞台に向かっている姿を見るたびに、三十数年前兵庫の田舎から「日本海」に飛び乗り、初めて北国の地を踏んだころを思い出し、この仕事を選んだのは間違っていなかった、これまでの人生の評価はこの子たちが下してくれるのだろう、そしてこれからも……と思うのです。

約二十年の舞台生活を経て、劇団養成所の講師へ、そしてここ数年はいままでの経験を生かしながら一般の方を対象とした健康教室やこどもたちへのワークショップなども合わせて行っています。舞台をとおして、若い人たちへの指導のなかで、地域の中高年の方々とのふれあいのなかで、いちばん学んだのは「人と共感しあえること」の喜びです。

川崎市での健康教室風景

たざわこ芸術村は、複合リゾート施設としてわらび劇場を始め、ホテル、温泉、地ビールレストラン（地ビールを製造）、お食事処、森林工芸館などがあり、一つの会社でホテルと劇団両部門の経営を行っていますが、舞台の仕事もホテルの仕事も根っこは同じ、人間再生の場をどのような形でご提供できるのかがますます問われています。わらび座がやるべきことはまだまだあります。わたしもともに挑戦していきたいと思っています。

その一つとして、高齢化社会やストレス社会での必要性が話題になりつつある、ヘルスツーリズムやアートセラピーの分野にも、芸術村の施設や劇団のソフトをおおいに活用したプログラムを提供できるよう、秋田県をはじめ、行政や民間の方々と懇談を重ねているところです。

秋田に根をおろして三十数年、定年後はどうしようかと考える年になってきましたが、ますますこの地が好きになり、離れられないなと思っているこのごろです。

◆足立かをるさん
健やかに明るく楽しく充実した日々をすごしております。
（平19・10・30）

◆足立　稔さん
当日（十一月十八日）義母の四十九日法要を予定していますので勝手ながら欠席します。
（平19・10・27）

◆安達健一郎さん
当日は鎌倉に宿を取っていますので欠席です。ご盛会をいのります。
（平19・11・3）

◆井徳正吾さん
少年野球の監督をしており、当日は秋季大会の閉会式があるため、参加できません。
（平19・11・5）

◆井本義一さん
①直近の創立ラウンドナンバー年「記念ふるさと会」の計画が決定されていましたら、出来る限り早めに公表してください。（年だけでも）
②「山ざる誌こそ会のかなめ」―村上前会長。誌の充実企画について、一例として「いま行って見たいふるさと市内のところ・場所」などテーマをしぼって、本誌中に常時（毎年）広く投稿を募ったらいかがでしょう。
（平19・10・22）

◆岩槻邦男さん
フィリピンへ出かける予定になっていて失礼いたします。盛会を祈念いたします。

◆上村愛子さん
丹波竜について認識不足なので、お話をうかがいに参加出席させていただきます。

◆上村邦子さん
おかげで元気です。この前東海地方在住の方からの入会のお誘いもありましたが、ちょっと遠いのでおことわりしました。ご盛会祈りあげます。
（平19・10・26）

◆植田憲雄さん
毎回のご案内深く感謝しております。今年は友好都市ケント・オーバン市から中・高生の野球チームが来丹します。丹波市国際交流協会として歓迎してあげたく、行事を計画していおり、出席できないこと申し訳ありません。来年は、渡邊会長とともに「傘寿」を迎えますので、是非参加したく存じます。
（平19・10・23）

◆臼井小五郎さん
大阪での会議のため、役員であるにもかかわらず欠席で申し訳ありません。盛会を祈ります。
（平19・10・26）

◆大石佐代子さん
今年も皆様にお会いできるのを楽しみにしていたのですが、音楽会と重なり残念です。
（平19・10・31）

◆岡田昌子さん
楽しみにしていた（ふるさとの会景品の）山芋が届きました。近くならお届けしたいくらい沢山いただきました。ラッキーでした。
（平19・11・20）

◆小川　勝さん
先日腰をいためまして、現在通通院中でして、医者より遠出の外出は禁じられております。楽しみにしていましたが大変残念です。（平19・11・7）

◆荻野　武さん
病後療養中です。永い間皆様にはご親交を賜り、厚く御礼申し上げます。お目にかかれる日をたのしみにしております。
（平19・11・1）

◆小田明子さん
ふるさとの会で黒豆を頂戴することになり、とても嬉しゅうございました。数日前に届きました。その仲に「お断り」の形で、今年は不作なので昨年度の分を遅らせていただきますと書いてありました。新豆でないのが残念ですが、お正月にたのしんで、元気でマメマメしく生きて行けることを祈って……。
（平19・12・12）

◆小田晋作さん
丹波新聞最近号と単行本「田舎は最高」を少々プレゼントで、事前に会場へ送ります。
（平19・11・2）

◆桂　照子さん
やっと秋らしくなってまいりました。本年もどうぞ良い会になりますように……。
（平19・11・3）

◆可部美智子さん
十一月二十六日より赤坂「乾」ギャラリーに於いて四十八回目の個展を致します。またご案内状をお送りしますので、宜しくお願い致します。
（平19・10・27）

◆金出一郎さん
母親が去る十月六日に死去。四十九日法要が行われるため残念ながら欠席。
（平19・10・25）

◆岸上行雄さん
郷友会があることを知りませんでした。次回には参加させていただきたいと思います。
（平19・10・29）

◆北村貞子さん
過日「ふるさとの会」ではお世話様になり、久しぶりの皆様と楽しいひとときを過ごすことが出来ました。ありがとうございました。昨日、丹波から（景品の）黒豆が届きました。お正月のお料理に心はずむ思いがいたします。
（平19・12・10）

◆木呂場明子さん
時には出席させていただきたいと思いますが、本年は病院と縁が切れず、今号山ざるに寄せられて井本様のよう

にロシアンブルーの猫になぐさめられたり励まされたりの日々です。走り過ぎました?!　（平19・10・31）

◆久須美　透さん

山ざる第三十八号のふるさと随想に寄稿されていた谷敬三様の「帰郷のたびの柏原散歩道」を読んでいて、小中学校の頃が一気に思い出され、久しぶりに帰って友に会いたくなりました。（平19・10・29）

◆国村きぬゑさん

氷上郡と書いていた故郷は丹波市となり、新しい時代の到来です。柏原高女卒業の皆様！いつも届けていただく「山ざる」誌の誌上をお借りして、高女の卒業生の交わりを深めさせて頂きましょう。　（平19・11・8）

◆久保良雄さん

二年間なにかと重なって出席できなかったように思います。」三年振りの郷友会です。楽しみにしています。（平19・10・29）

◆古倉規子さん

先日はお電話で大変失礼致しました。主人とそうだんしまして、参加させていただこうかということになりました。宜しくお願い致します。（平19・11・1）

◆小谷　崇さん

今年（〇七年）八月に久しぶりに丹波「市」に帰り、生まれ故郷の柏原町の店々の多くが、今なおシャッターを閉めずにがんばっておられる様子に深く脱帽しました。妹夫婦に案内してもらった「夢タウン」（氷上町）は、ディズニーランド的雰囲気で、大繁昌していました。山と川おたたずまいは、だいたい昔と大差ありませんでした。以上、関東にいて私と同じくあまりあちらに帰らない方々へのご報告。（平19・10・25）

◆児玉安正さん

「丹波を撮る」が楽しみです。特に「丹波竜」の発掘現場や、旧上久下村を行く1・2は懐かしいおもいで拝見しました。（平19・10・31）

◆小林　宏さん

青森県三戸郡南部町（夏の寓居です）で乗馬を楽しんでいます。ところで、「兵庫県農地改革史」を探しております。当県は地主・小作の協調関係（村単位の土地利用、集落単位の耕地管理組合が小作争議以後組織されて）が成立して土地改革が成功した典型とされていますので。（平19・11・1）

◆小山とし子さん

健康維持につとめています。一年がすぎるのは早いですね。気候の変化激しさに耐え、すばらしい秋空の下、時々中川の上の方を、サイクリングで駆け巡っています。　（平19・10・23）

◆酒井重男さん
来年後半になると丹波に帰郷する予定です。（平19・10・23）

◆笹倉　強・郁子さん
地域の文化活動に努力いたしております。（平19・11・6）

◆澤田みさをさん
柏原の散歩のエッセイなつかしく拝読いたしました。西山、高谷公園の傍らに疎開していましたので、よく遊びましたから。（平19・11・12）

◆鈴木和栄さん
表紙の「けんかのあと」とても愛らしく心なごむ思いです。編集者の方々の辛苦を思い感謝いたします。当日は、大阪にて高女時代の平窓会があり、出席できません。（平19・10・25）

◆高田美佐子さん
丹波竜の講演や山の芋・黒豆などに魅力を覚えますが、他用と重なり残念です。（平19・10・24）

◆高見秀史さん
郷友会員の中にも大多数を占める「柏陵平窓会東京支部」に、ホームページが会員相互の情報交流の手段としてスタート。丹波人情報が一杯です。是非ご覧ください。（平19・10・24）

◆田中憲雄さん
六年半前の右足首骨折（入院治療）のため長時間の歩行が苦痛になりました。ご出席の皆様によろしくお伝えください。（平19・10・24）

◆谷口　捷さん
当日は関東の山仲間五名と丹波へ〝山と歴史〟の散策に行きます。残念ながら欠席します。（平19・10・25）

◆常岡幹彦さん
明年五月、東京での個展出品作の制作をしていますが、太陽や雪また月の作品が多く、これも宇宙空間にあこがれているせいでしょうか。（平19・10・24）

◆出町京子さん
当日は神奈川県の邦舞祭と重なり、出席できません。皆様にお目にかかりたかったのに……。（平19・10・30）

◆富田貞子さん
本日山の芋が届きました。年を重ねるごとに故郷を想い、望郷の念にかられますのと、逆に日々遠くなる丹波の地に淋しい思いの私でございますが、郷友の皆様にお会いできる機会を大切にして参ります。（平19・11・26）

◆中里安子さん
主人が近々定年退職を迎え、丹波へのユーターンを予定しております。（平19・11・11）

◆西川宣孝さん
山ざる三十八号を楽しくなつかしく拝読いたしました。丹波の人たちとの交流は、高校の平級会や氷上ゴルフ平好会で行っています。（平19・11・6）

◆野村節三さん
「丹波竜」の化石発見に寄せて拙文を「山ざる」誌に寄稿いたしました。ご一読くだされば幸いです。
（平19・11・2）

◆原谷洋美さん
先日〝山の芋〟確かに頂戴いたしました。〝霧芋〟の懐かしい呼び名と丹波の霧の朝、想い起こしました。
（平19・12・3）

◆広瀬安伸・庸世さん
村上さんの講演も拝聴したいのですが、当日は自治会の会合と重なり残念ながら家内ともども出席できません。
（平19・10・25）

◆藤田千治・玲子さん
前日から福知山「三和荘」で吉見会（小中卒クラス会）があり、そちらに参加しますので、こちらは欠席です。
（平19・10・28）

◆堀井隆川さん
本年は一世一代の大事業、本堂・客殿・庫裏落成（寺院移転地への再建築）の大法要も、お蔭様でさる平成十九年五月十六日高野山より管長猊下をお招きし、僧侶六十名、檀信徒二百七十余名のご臨席をいただき、無事成満いたしました。その後も研修室・茶室等での行事が続いております。これからいかに大勢の皆さんに心豊かな思い出となるよう有効に活用していただけるかと企画実施に明け暮れている毎日です。郷里の皆さんのご協力とアイデアを募っています。（平19・10・25）

◆本城英明さん
関東に来てはじめて高校の学年平窓会がありました。これを機に「ふるさとの会」への参加者がふえればいいなあと思っています。（平19・10・27）

◆山岸幸子さん
「丹波竜化石の発見」のお話を楽しみにしていたのですが、残念ながら行けなくなりました。（平19・11・4）

◆山口和久さん
家族皆元気にやっています。もう孫が三人になりました。詳細はブログ「山ちゃん5969」http://plaza.rakuten.co.jp/yamanouchi03301 見てくださいね。
（平19・10・23）

◆山口敏之さん
田舎には母一人ですので、年に四～五回は帰るようにしています。気持ちをリセットする一番の方法になっています。
（平19・11・13）

◆山下正幸さん（県立氷上高校長）
平素は本校教育の推進に格別のご支

援をいただき心から感謝いたします。特に女子バレーボール部の全国大会出場につきましては、心温まる激励を賜りました。今後とも、ご支援と激励をお願い致します。（平19・10・24）

◆山中秀雄さん

先月二十日宝塚での柏高平窓会にて村上氏の丹波竜の講演興味深く拝聴して参りました。（平19・11・5）

◆山本明男さん

店を始めて八年目になります。やっと料理人らしく、自分の皿が形になりつつあります。丹波の食材とともに店が認知される誇りを感じています。もっともっと郷土に恩返しができたらと思っています。（平19・11・1）

◆吉田和志さん（県立柏原高校長）

皆様のご支援のおかげで、柏原高校の生徒たちもがんばっています。今年度も後半良い成果がもたらされるものと期待しているところです。生徒たちの活躍ぶりは、県下一更新回数の多い「県立柏原高校ホームページ」をご覧ください。（中略）なお、美術の荒木教諭が十一月に優秀教職員表彰（県立高校で十名）を受けました。嬉しいことです。十月には郷友会のご案内をいただきながら、うかつにも返信せず申し訳ありませんでした。「山ざる」のご恵贈ありがとうございました。来年はぜひ原稿を出したいと思います。（平19・11・24）

◆吉田勇司さん

十一月十二日～十六日はバンコック、二十六日～十二月一日はフランクフルトへ出張が入っており十二日に、今年最後の野球の試合で投げますが、会には出席したいと思っています。（平19・11・11）

◆依藤廣次さん

時がなぜこんなに速く経つのかなあと思うこの頃です。毎度山ざるありがとうございます。（平19・10・31）

◆若森敏郎さん

昨年傘寿のお祝いをして頂いてから早くも一年。お蔭様で毎日元気に暮らしております。最近般若心経の臨書をはじめ、毎日半紙二枚づつ既に三ヶ月続いています。有難いことです。（平19・10・23）

◆訃報

平成十九年八月から二十年十月までに事務局にとどいたものです。謹んでご冥福をお祈りいたします。

逸見あや子殿　平成十八年五月十四日
若栗すぎ子殿　平成十九年三月二十日
広瀬　幸代殿　平成十九年六月五日
植木　英吉殿　平成十九年七月四日
浅香　秀之殿　平成十九年十月十一日
村上　久夫殿　平成二十年十月二日

「医師守る」超党派議連のシンポジュームで丹波の代表が発表

「医療現場の危機打開と再建をめざす国会議員連盟」は、東京でシンポジュームを開き、丹波を代表して「県立柏原病院の小児科を守る会」の羽生裕子さんが、パネリストの一人として丹波の取り組みを発表した。「子供を守るためには、医師を守ること、医師を大切にすることが必要」と、日ごろの活動を話したところ、大喝采を浴び、同会の幹事長からは「これは静かな革命」と閉会の挨拶で取り上げられた。

丹波では、柏原病院の小児科が医師不足で危機的状況になっている現状を打開するため、一年前に母親たち有志が会を発足させ、「医師の過重労働を軽減するために患者側も協力する」運動を続けている。

（平20・4・17）

日本小児科学会で発表「小児科を守る会」羽生代表

通常の集会では、会員の小児科医が研究発表を行うが、一般の住民である羽生さんが招かれるのは歴史的にもめずらしい。羽生さんは「コンビニ受診を控える、かかりつけ医をもつ、医師に感謝の気持ちを伝える」の三つのスローガンを発表し、守る会の過去一年間の取り組みを話して、全国から集まった小児科医に深い感銘を与えた。

（平・20・5・1）

舛添厚生労働大臣が県立柏原病院を視察

7月3日、舛添大臣は柏原病院を視察し、その後「県立柏原病院の小児科医を守る会」のメンバーと懇談した。大臣はこの運動が、住民からの自発的なものであることに感銘を受け、国もできるだけのことはするが、国民も努力をしてもらいたい、と「守る会」をモデルに国民の意識改革が展開されることを期待した。丹波地域の医療崩壊について取材を続けている丹波新聞の足立智和記者は、大臣に医療再生のためには「守る会」で終わらず、「日本赤十字と柏原病院の経営統合」実現を訴えた。

（平20・7・6）

県立柏原病院と市立西脇病院が医師相互派遣

「県立柏原病院の小児科を守る会」に触発された西脇の母親たちが、「西脇病院の小児科を守る会」を設立し、この運動が西脇病院を動かして、相互派遣に結びついた。柏原は小児科医を派遣し、西脇は脳神経外科の医師を派遣し、相互に不足を補い合う。

（平20・7・13）

県立柏原病院と日赤の統合を神戸大が構想

神戸大学医学部は、県立柏原病院に医師を供給しているが、日赤との統合で最適化が図れなければ、医師を送ることは難しくなるとして、「新柏原病院」の構想を県に伝えた。経営主体については言及していないが、「やれる所がやる」として、入院病床100～150床、内科と産科を担う病院とする。県の病院事業管理者は、「日赤は統轄外で、現状統合について検討は困難」との見解を示している。

（平20・7・20）

篠山で希少植物発見

国レベルの絶滅危惧種である、2種類の「ベニバナヤマシャクヤク」が篠山市内の山中で見つかった。近い将来野生での絶滅が懸念されるとして、環境省が、「絶滅危惧種」に指定している種類である。また、「この2種類が同じ場所で自生しているのはきわめて希」と、県立・人と自然の博物館の藤井俊夫主任研究員。「2種類とも明るい場所を好むが、近年里山林が手入れされなくなり、森が暗くなってきたために激減した」実はすでに3年前、篠山自然の会会員で丹波新聞太治庄三記者が山中で発見していたが、乱獲を恐れ、これまで公表を控えていたもの。「乱獲防止の策が講じられたこともあって、今やっと公にできた」と太治記者。（平20・5・25）

国内最古級のほ乳類化石「丹波竜」と同じ地層で発見

丹波竜の発見者のひとり足立洌さん（柏原）は、昨年10月また新種の化石を発見した。丹波竜が発見されたのと同時代の、白亜紀前期の地層からで、小型ほ乳類の化石群集。国内では3例目、世界では55例目だ。報告を受けた県立・人と自然の博物館は、試掘と本採掘を実施、化石を含んだ地層を調査していたが、6月11日に公表となった。同博物館の三枝春生主任研究員は、この発見が進化の空白を埋める世界的なもので、「当時の生態系を知るうえで、宝箱のような状態」と述べている。

今回発見されたものは、ネズミに似ていて、ヒトの祖先などを含む「トリボテリウム類」かもしれないという。丹波竜のような大型の草食恐竜や肉食恐竜の足もとで、これら小型ほ乳類が茂みや木の上で生きていたらしい。丹波竜は丹波市、今回の化石は篠山市に属し、足立さんは、「篠山市でも発見できてよかった」と述べている。

篠山の小学生が恐竜の歯の化石発見

大山小学校の6年生13人が、7月、丹波竜の発見者足立洌さんを講師に招き、化石発掘体験の授業中に、足立希羅君が黒く輝く化石を見つけた。県立・人と自然の博物館の調査結果によると、獣脚類（肉食恐竜）の歯と判明。全国で20例ほど発見されているのみ。体長1～2メートルと推定されるこの肉食恐竜は「大山竜」と名づけられた。

発見場所は丹波竜の発掘現場から3キロ。この地層では、昨秋足立洌さんの小型ほ乳類の化石群集発見以来、さらなる化石の発見が期待されていた。（平20・8・3）

スウェーデンに視る「環境と林業」

丹波新聞社長の小田晋作さんは、8月下旬、県議会自民党林業振興議員連盟の使節団に加わって、スウェーデンの環境政策と林業関連産業の現場視察団に同行。詳しい報告を新聞紙上に展開している。現場では市島町出身で環境関連のNGO活動にかかわる高見幸子さんがコーディネーターとして活躍。小田社長は「丹波もスウェーデンに大いに学ぶべき」と痛感したそうだ。（平20・9・21）

Iターン夫婦、青垣に民宿オープン

定年退職を機に、半年前に奈良県から青垣に移り住んだ一組の夫婦。苗字をとって、「民宿モリシタ」という民宿をオープンした。「もうける気はない。静かないなかで心の疲れを休めてもらいたい」と都会の友人たちに遊びに来てもらうのを期待している。一泊二食付で7000円。ご主人が畑で作った野菜と地場の食材を使って家庭料理を提供する。

宿泊者には、収穫体験をしてお土産に持ち帰ってもらう予定。「集落のみんなが親切で、当初案じていた村づきあいの苦労はない」とのこと。

（平20・5・15）

Uターン就職を促進

柏原公共職業安定所が「ふるさと就労相談コーナー」を開設した。専門の人材アドバイザーを配置し、Uターン、Iターン希望者に就職支援を行う。一方、Uターン、Iターン人材を採用予定の登録企業には、ニーズに応じた人材の情報や紹介をしてマッチングを促進する。同時に、地元で就職を希望する学生の地元定着、都会へ進学した学生などのUターン就職も支援の範囲に入る。

（平20・6・22）

ごみ処理場「公募型」建設用地選定

丹波市が全国でもめずらしい公募方式で「春日町野上野区」に決定したごみ処理施設の建設は、近隣の国領区で起きた反対運動のため、1年あまりの間、保留になっていた。その後、国領区に配慮して当初予定していた場所から1キロほど離れた農地へ変更することにより、このたび解決の糸口ができ、「断固反対」の看板が下ろされることになった。

こうした公共施設の建設には、市民全体の意識を高める広報活動が必要であるが、一部関係者のみ、あるいは自治会任せにされたことが混乱を招いたと、一般市民からの批判が聞こえてくる。

（平20・7・10）

テニス、全日本小学生選手権大会で「銀」

青垣町西芦田の大西琢磨君（芦田小6年）は、古田尚也君（姫路市）とペアーを組んで、日本ソフトテニス連盟主催の全国大会に出場し、開き直りの積極プレーで準優勝を果たした。47都道府県の予選を勝ち抜いた192ペアーが出場。大西君は前衛。優勝候補に上っていたものの、決勝戦で敗れ、「悔しいけど、2位はうれしい」と喜びの声。父の由明さんは「よく頑張った」と息子の労をねぎらった。

村の遊休地をみんなで守る

氷上町稲畑の農業グループ「稲畑どろんこ会」は、「高齢化による担い手の不足で農地が荒れるのを食い止めたい」と、遊休地の耕作を請け負っている。活動5年目に入り、耕作地も3から9・5ヘクタールに拡大。9名の会員は全員稲畑出身だが、半農半業のサラリーマンが大半。週末を利用して小麦を中心に栽培している。（平20・6・19）

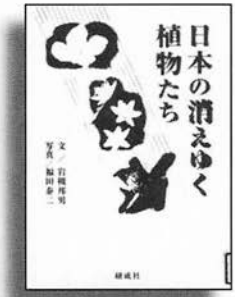
■会員が書いた本

文・岩槻邦男　写真・福田泰二
『日本の消えゆく植物たち』

研成社　発行／定価1890円

秋の七草のうちのフジバカマとキキョウが絶滅の危機に晒されている。私たちの営為がそれほどの圧迫を日本の自然に与えているのに植物からの呼びかけに答えられないようならば、人類の叡智など実にはかないものである。もちろん種にも死が訪れるのは自然のなりわいであって、私たちの周囲の植物や動物も数千万年経てば別の種におきかわるのであるが、進化の過程で現われる自然な現象ではなく、人類という、たった一つの種の生物による営為行為によって数十年の単位でいくつもの種が絶滅するというのが問題なのである。いみじくも人類は、反自然の行為に人為・人工をあげるようになったが、この反自然行為によって多くの種が絶滅するのだ……。

本書の冒頭で著者は、このように語りかける。その内容は、高校で生物を選択しなかった数物系の人にも理解できるものである。もちろん、こんな生徒は少数派であり、大半の高校生は生物を選択、あるいは必須科目として受講しているから容易に理解できよう。おまけに記述される内容は、核酸だのDNAだのという近年の生物学の核心ではなく、戦中・戦後の中等教育で教えられた古典的な生物学そのものだ。



秋の七草の事例は多くの人を驚かせるが、ほかにもフクジュソウ、サギソウ、サクラソウといった馴染み深い植物も絶滅の危機にある。セッコクやエビネは、すっかり山から姿を消した。欧米では一九六〇年代に警告が発され、日本では、ようやく一九八〇年代になってから植物のレッドリストが編纂された。レッドリストと呼ばれるようになった由来もキチンと記されている。

改めて紹介するまでもなく、市島町出身の岩槻会員は、植物分類学、特にシダ植物の系統分類に関する世界的権威者で、京大・東大教授を歴任し、現在は兵庫県立人と自然の博物館館長である。理工系の学者の多くは、論文は量産しても著書、特に啓蒙書や入門書は少ない。書いても読んでもらえない、というのが理由だが、岩槻会員の著書は多い。本誌第31号で紹介した『多様性の植物』（共著）はその一つである。昨秋は文化功労者に選ばれた。益々のご活躍を祈りたい。

（徳田八郎衛）

■会員の書いた本

鎌田實、山折哲雄、嵐山光三郎
加藤登紀子、村上信夫著（対話）
『いのちの対話「死に方上手」』
岩波書店　発行／定価480円

NHKのラジオ第一放送、年四回の特集番組「鎌田實いのちの対話」は、毎回、大きな反響を呼んでいる。

村上信夫アナウンサーがこの番組の司会者、二時間四十五分の大番組を絶妙のリズムと切れ味で進め、「いのち、生と死の問題」を見つめさせてくれる。この村上アナは、他ならぬ郷友会の大先輩村上久夫さんのご子息で、月～金、毎朝八時半～十二時の「ラジオ・ビタミン」の総合司会を務めるNHKの朝の顔（声）でもある。

鎌田實さんは、地域医療の現場で「がんばらない、あきらめない」と親身になって患者を慰め励ます「赤ひげ」現代版の名医、その鎌田さんをホスト役に当代一級のゲストを迎え、番組は展開する。天下の岩波書店が、この番組は聞き捨てならぬと岩波ブックレットにとりあげた。その中の一冊が本書「死に方上手」、平成十九年七月二十九日放送の内容を再構成したものである。

死生学の先駆、上智大学名誉教授A・デーケンさんの「ミナサーン、大変貴重ナデータデス。人間ノ死亡率ハ一〇〇パーセントデース…」。このデーケンさんの声色を枕に振り、村上アナ司会の「死に方上手」の対話は、明るく始まる。今回のゲストは、宗教学者の山折哲雄、作家の嵐山光三郎、歌手の加藤登紀子のみなさん。死に格別の想いを持つ人々。

山折さんは、入退院十回以上、二度の開腹手術、絶食療法の体験から、断食往生への憧れもある。

嵐山さんも、幼時の病、大量吐血、車の事故、水難事故、何度も生死の境をさまよった。

加藤登紀子さんは、父が突然死、ガンの夫は五十八歳で逝く。自ら作詞の歌に追慕の想いを込める。

葬式や墓は必要か。良い死とはどんな死か。考えは、三人三様。

誰しも「死ぬまでに一度は死を体験しておきたい」と願うのだが、それは叶わない。死は、もっとも身近で、もっとも遠い永遠の謎である。

死が体験できない、死ぬ練習はできないとあらば、生の最後の瞬間まで、いかに生きるかしかない。

村上さんは、本の最後を「死に方上手は生き方上手」と結んでいる。

五三頁、四八〇円の本の中に、生と死の機微がいっぱい詰まっていて深く考えさせられるが、暗い気持ちにならないのは不思議である。

同シリーズ、日野原重明、舘野泉両氏がゲストの「医者と患者の絆」もぜひ併読したい。

（上野重喜）

■会員の書いた本

安井孝之著
「これからの優良企業 ―エクセレント・カンパニーからグッド・カンパニーへ」

PHPビジネス新書　発行／定価　840円

本書は、著者の安井先輩が、記者として「カイシャ」というもののあるべき姿を追い続けた現時点での「回答」である。私のように「カイシャ」の経営に関与して日々、悪戦苦闘している人間にとっては、実際に直面している問題意識に噛み合う事例とヒントが満載されており、一息で読めてしまう。本書に示された「回答」は峻烈である。私は本書のメッセージを次の3点に要約する。

第1に、「カイシャ」経営には「逃げ出したくなるような緊張感」が不可避であるということである。ところが、現実にはその緊張感のない企業もたくさんある。「危機の存在を知ったものの、実際に処理をすると会社に損害が出るため決断もできず見て見ぬふりをした」という山一證券の例は決して他人事ではない。本書は、それを放置しておくと取り返しのつかない不祥事になっていくという警告をも発している。

第2に、「カイシャ」のトップは、一人で決断して責任を取らなければならないということである。東芝の西田社長は次世代DVD事業からの撤退会見を一人で行ったという。日本電産の永守社長の「上が悪さをしたら下も悪さをする」という方針や、オリックス宮内社長の「おかしいと思えば首にしてくれ」という危機感は、トップの座は私物ではなく公物であることを物語っている。

第3に、社会と社員に尊敬されなければ「カイシャ」は存続しないということ。三井物産は不祥事以降「数字を追うな、いい仕事を追え」という方針に転換した。外資による敵対的買収でも、経営陣や従業員が反発すれば企業価値が下がるので買収は失敗するというくだりは肯ける。

「エクセレント・カンパニー」は、トム・ピーターズ、ロバート・ウォータマンの著書（2003年）などで紹介され、経済界ではもはや常識的コンセプトである。しかし本書は、経営指標に重きを置いた「エクセレント・カンパニー」になることは、企業として存在するための必要条件に過ぎず、多くのステイクホルダーから信頼を受け、尊敬される「グッド・カンパニー」になることこそが21世紀の会社の存在意義であり目標であるとする。いわば常識的な「カイシャ」論に満足しない意欲作と言えよう。「エクセレント」と「グッド」は必ずしも対立軸ではないと考えられるが、どのようにすれば「カイシャ」は「グッド・カンパニー」に進化できるのか、更なる展開も楽しみである。

（谷垣邦夫）

■会員の書いた本

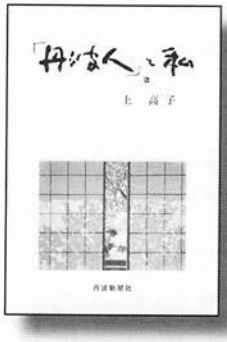
上　高子著
「『丹波人』と私」

丹波新聞社発行／定価1200円(税込)

今夏は格別に暑かったせいもあって、寝酒の習慣がついた。安いジンやウオッカを炭酸水で割って、家人が寝静まった深夜に一人飲む。レモンかライムのスライスを浮かべれば、柑橘の香りが、なお良い気分にさせてくれる。

それを飲りながら、過去を振り返る。酔いが回りクラリときた頭の中で、過ぎた出来事を蘇らせ、反すうするのが何とも心地良い。そんな〝陶酔〟を、人生という時間軸で楽しむのに適した一冊である。

丹波新聞に連載中の「丹波人NOW」(一部は別コラム)を、一部再取材で補強し、10年の節目に一冊にまとめた。約120人の丹波人の素顔がそこにある。



それぞれの第一線で働く、見知らぬ同郷人が多いことに励まされる。が、何よりの〝つまみ〟は、文章のあちらこちらに散らばる丹波の匂いである。例えば。

「子供ながらに僧侶の衣をまとい、葬式で死に顔や、土葬の墓場で掘り起こされた骸骨も見た。怖くて眠れなかった夜」(大久保宏昭さん)。

「思い出は、どこまでも続く菜の花、レンゲのじゅうたん、蛍狩り、深い霧、星の観察授業」(上田道代さん)。遠い日の記憶を呼び覚ませてくれる情景。

「田舎に育ったお陰で、四季の移り変わりを表現するのが得意なんです……故郷の『おおみ山』を思い浮かべながら、(刺繍を)刺してゆきますのよ」(篠原よね子さん)。

そんな故郷への思い。

「延命寺山を眺めながら、早く村から出ることを考えていた」(江上剛さん)。

丹波育ちの多くが幼少期に抱いたであろう、複雑な心境。

それぞれの描写が自身の体験と重なることを実感し、読み進めれば、あっという間に時間が巻き戻され、タイムマシンで「あの日」に運んでくれるような気がする。

筆者も丹波の出身。「幼少の頃同じ空間を共有した人」への思いが、素朴ながらインタビューの味付けとなっている。

季節はそろそろ冬に向かうが、「晩秋の夜長」。故郷の友や、残してきた父母のことを思うのも良い。好きな酒を片手に、一気に「フラッシュバック」できるのが楽しい。

(近藤和行)

■会員の書いた本

MINERVA人文科学叢書
村井友秀・阿部純一
浅野　亮・安田　淳編著
『中国をめぐる安全保障』
ミネルヴァ書房発行／定価7875円

本書は各分野ごとの中国に関する安全保障専門家十五名によって書かれた三部十八章四百九ページにおよぶ膨大な文献である。あえて文献としたのは、はしがき冒頭に「本書は、中国の安全保障を総合的に扱うテキストで、この分野を知ろうとする人にとっては入門書となるが、同時に専門書でもある。主な読者として、この分野に関心のある大学の中上級生、大学院生および社会人を想定している」とあり、中国をとりまく国々と、中国々内の軍事を中心とした安全保障の歴史的経緯と現状を、おびただしい参考文献から、つとめて両極を避けた表現で著わされていると感じたからである。

会員の徳田八郎衛氏（元防衛大学校教授）は、その第十一章を担当し、C41（指揮・統制・通信・コンピュータ・情報）について、論陣を張られている。徳田会員の述懐によると、この分野は、他のそれに比べて、情報公開があまりすすんでおらず、極めて困難な作業であったということである。

本書を構成する第一部は文字通り中国をめぐる国々の対中国安全保障政策を論ずる「中国をめぐる安全保障環境」。アメリカ、ロシア、朝鮮半島、台湾、インド、東南アジア等々の側からの対中国安全保障政策の歴史的経緯と現状分析がなされている。

第二部は、中国の軍事におけるお家の事情について述べた「軍事戦略と兵力の構成」。陸海空軍の戦略と兵力、第二砲兵部隊と核ミサイル、C41（前出）、軍事ドクトリンの変容と展開、武警、党軍関係と軍の閥など、わたくしのような門外漢にも、興味津々な論調が展開される。

第三部は「国防経済と戦略的資源」。当然おカネ、特に国防産業とエネルギー安全保障のはなしである。終章は「日中関係の基本」であり、「…良好な日中関係を構築するために現在の日本人がやらなければならないことは、真実を覆い隠すさまざまな誤解と偏見とプロパガンダを排除して、できるだけ正確に中国の実態を理解することである。本書は、日本人が正確な中国像を形成するうえで最も有効なツールの一つである」と結んでいる。なお編著者の村井氏、浅野氏、安田氏は各々防大、同志社、慶応で教鞭をとり、阿部氏は戦前の東亜同文会の流れを汲む中国研究機関（財）霞山会の事務局次長を務める。いずれも中国の安全保障についての国際的な権威者である。

（坂本勝朗）

公演

◉西崎　祥舞踊公演

西崎祥舞踊公演「今甦る昭和の名曲」（西崎祥舞踊研究所主催）が9月28日、丹波の森公苑大ホールで開かれた。西崎さんが42曲の歌謡曲に振り付けをし、門下生らが華麗に舞った。

「誰か故郷を思わざる」「南国土佐を後にして」「贈ることば」「北の漁場」など、有名歌謡曲ばかり。観客たちは、おなじみの曲を口ずさみながら、優雅な舞を楽しんだ。

終盤では、西崎さんが、ジャニーズの「おまつり忍者」を披露。新潟から駆けつけた西崎潤さんと2人で、みこしを担いだり、太鼓をたたいたりする躍動感あふれる舞で、会場を沸かせた。フィナーレでは全員で「世界に一つだけの花」を踊った。カーテンコールで西崎さんは、「歌っていいですね。みなさんも昭和の歌を若い人に歌い継いで」と話し、公演を締めた。

（「丹波新聞」2008年10月2日付記事より転載）

「世界に一つだけの花」を舞う出演者たち

展覧会

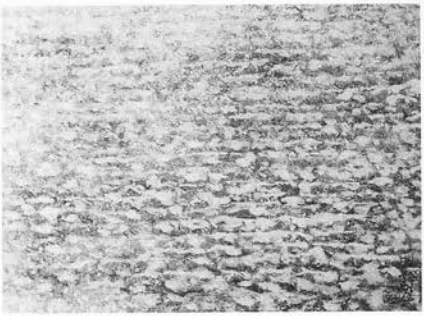
◉常岡幹彦さんの個展

常岡さんの日本画展が5月8日から1週間、京橋のギャルリー・コパンダールで開かれた。今年も〝玄に向って〟とする日本画の深奥への挑戦が続く。小品20点の新作だが、これまでにないソフトムードを感じたのは私だけだったろうか。いつもの大作がなかったせいかもしれないが、さわやかというか、親しみを持って画境に入っていけたのだ。例えば彼が永年好んで描いた高源寺山門の石段だが、それが今年はがらりと変わってみごとな心象風景に昇華している。「寂響・丹波」と題するその画面からは、まさにモー

ツアルトのようなやさしいハーモニーさえ聞こえてくるのだ。

重ねた年齢の効とでもいうべきか、台北の故宮に中国名画を渉ろうし、スイスの氷河に丹波のあの温もりを重ねたのだろうか、今年の作品には親しみというか滋味がひと味深さを増したように思えたのである。

常岡さんもいよいよ〝晩年〟と称する名の妙境に入ったようだ。これからが〝本番〟ですぞ！　（渡邊）



「寂響（丹波）」P 12号

◉可部美智子陶展のお知らせ

・第38回全陶展

日時＝平成20年11月2日～11月12日

会場＝上野公園・東京都美術館

・可部美智子陶展

今年は会場の小田急百貨店アートサロンが改修工事のため開催を見送りましたが、来年春（5月か6月）開催の予定です。ご来場をお待ちします。

同窓会

◉平成20年度柏陵同窓会 東京支部総会開く

平成20年6月29日（日）例年の九段会館にて開催されました。

当日は、あいにくの雨でしたが、盛況だった昨年を更に上回る116名の参加となり、多くの懐かしい顔々が集いました。

今年の担当幹事は昭和37年卒（14期）17名。その皆さんのご苦労で、用意された円卓を囲む席指定も好評で、懇親会では丹波弁も飛び交い、新趣向の対談型セミナーなどを織り交ぜて楽しく有意義なひと時となりました。

総会では、役員改選の年として支部長・副支部長の再任と常任理事など役員の承認、会則の一部改訂等つつがなく行われました。

総会風景

恒例のセミナーは14回生の臨床心理士でもある岡田昌子さんと、同期の井上馨さんの対話形式で「家族のあり方と行方」。今日、相次いで世間を驚かす家族間の事件、その根っこに潜む原因や問題について、豊富な事例を元に解き明かされて、各人大いに啓発されたことでしょう。

当日のご来賓には、母校の吉田校長、丹波市から辻市長と中川企画部長、同窓会として本部田中会長、阪神稲継・京滋酒井・東海竹内の各支部長、県東京事務所岡田次長のほか西山酒造の裕三蔵主には沢山のお酒をご恵贈賜り、乾杯は故郷の銘酒となりました。

特別ゲストとしてお迎えした荻野巨舟先生は昨年卒寿とは思えない若々しさで段上にお立ちになり、また、お越しの支部会員の中での最高齢であった高女昭和12年卒竹内恵美子様には、米寿のお祝いをいたしましたが凛とした美しいお姿に全員感嘆しました。

あっという間の4時間の最後は、校歌を大合唱。日曜日の静かな九段に響き渡ったように思えました。

来年度の総会懇親会は6月28日(日)に予定されています。より多くの同窓の皆様のご参加を楽しみにしています。

＊同窓会東京支部のホームページは、閲覧数が二千五百を超えました。是非ご覧の上、ご参加ください。

（支部長・高見記）

対談型セミナー風景

同好会

◉氷上ゴルフ同好会、回を重ね 次回は112回目を迎えます！

ついこの間100回の節目を迎えたと喜んでいたのが、次回は112回、熱心な会員の皆様に支えられ、どんどん記録を伸ばしています。

どのゴルフ場も歴史のある氷上会に驚きの声でご協力を頂き、いつも胸を張っての開催です。

現在会員数60余名（グロスは70点代～130点代といろいろです）、茨城、千葉、埼玉、神奈川等と会場を回りながら年4回の開催で各回の参加者30名強で推移しています。

次回は丹波からの参加者も予定しており、今後丹波他の地域にお住まいの同好者にも声を掛けながら、他地域との交歓もより進めていきたく思っています。丹波弁が楽しいゴルフ会です。

都合の良い会場の時だけでも参加さ

れませんか、気楽にお声を掛けて下さい、新会員大歓迎です。

この1年の成績は次の通りですが、大会の雰囲気のスナップや成績は下記のホームページを御覧下さい。

○第108回（よみうりゴルフ倶楽部／19年09月07日）

優勝　山田　良一
2位　岡林　逸男
3位　矢持　信行

○第109回（取出国際ゴルフ倶楽部／19年12月14日）

優勝　野村　修己
2位　川畑　明光
3位　足立　圭造

○第110回（筑波カントリークラブ／20年03月07日）

優勝　大里　崇
2位　西川　宜孝
3位　上田　雄彦

○第111回（桜ヶ丘カントリークラブ／20年06月13日）

優勝　三宅　良夫
2位　竹澤　美範
3位　直田　正

http://www.pcc-taiyo.co.jp
又は「氷上ゴルフ同好会」で検索して下さい。

氷上ゴルフ同好会事務係　岡　吉明
電話　048—460—1601

氷上町本郷の菜園と稲継城跡

本誌にご協力有難うございました ❖

猿友会

井田悦子
大石佐代子
小田明子
可部美智子
岸本昌子

喜田綾子
小糸イキ
笹倉郁子
篠原よね子
千葉淳子

長尾貴美代
安原三智子
塩見みつえ
渡邊貴美子

❖ 本誌にご協力有難うございました

① 丹波新聞　嘱託記者「丹波人ＮＯＷ」のコラムニスト
http://tanba.jp
② ＮＰＯ法人アジアの新しい風・理事・事務局長
http:www.npo-asia.org

上　　高　子（氷上町出身）

〒 154-0016　東京都世田谷区弦巻２－18－22－414
TEL／FAX 03－5426－6714
e-mail　takako-ue@t05.itscom.net

①過去 10 年間に、丹波新聞「丹波人ＮＯＷ」に掲載されたインタビュー記事を「丹波人と私」という題名で単行本として６月に出版しました。好評につき７月に増刷され、柏原町の谷書店、飛鳥書房春日店（アルティ内）、喜久屋（コモーレ丹波の森内）で販売されています。
②アジアの大学で日本語を学ぶ学生たちを支援するＮＰＯを立ち上げました。草の根の相互理解を目指しています。
アジアとの融和に関心のある方、ご支援ください。

akeland

エクステリア専門商社

株式会社　**トコナメエプコス**

会　　長　松下　文雄（柏原町）

代表取締役　広瀬　寿和（山南町）

〒160-0003　東京都新宿区本塩町23 第２田中ビル
TEL 03－3354－0211　FAX 03－3354－7767

本誌にご協力有難うございました

人と技術で社会に貢献する

株式会社 ユー・ティー・ケー

代表取締役
会　　長　水船　隆昌

本　　社：〒102-0081　東京都千代田区四番町六番地　パレブランビル5F
Tel 03（3556）4070　Fax 03（3556）9577

東海営業所：〒319-1111　茨城県那珂郡東海村舟石川764-10　東成ビル2F
Tel 029（283）0460　Fax 029（283）0469

業務内容：・原子力関連事業　・人材派遣事業
・節水工事業　・食品等の卸及び販売

コンピュータ・データ処理　－少量でもお任せください－

株式会社　**サイモン・デジタル・センター**

仕事内容：入力代行（名刺、ハガキ、アンケート、エクセルシート　ほか）
出　　力（宛名ラベル、直接印字、帳票出力　ほか）
そ の 他　データ管理・メンテナンス・事務局代行

専務取締役　塚口　智（氷上町油利）

営業部長　藤田　徹（市島町今中）

〒134-0088　東京都江戸川区西葛西6－16－7
第2白子ビル501
TEL 03－5679－8344

❖ 本誌にご協力有難うございました

春日大路の山里
春花・夏花の香りいっぱい。
美味しい山里の花密が採れています。

蜂の蜜

御贈答に！産地直送!!

健康食品

プロポリス（丹波春日産）

樹木の若芽が出て蜜蜂が一生懸命働いてプロポリスを集めました。ストレス解消・健康管理に大好評！

プロポリス

代表　山内秀樹（柏高 第11回生）

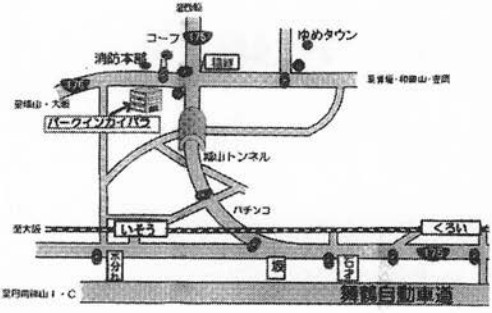
秀 やまひで猪肉店 養蜂部

丹波市春日町栢野1064　TEL.0795-75-1773　FAX.0795-75-0958

パークイン Park inn KAIBARA

(株)柏原ビジネスホテル
TEL. 0795-72-3525
FAX. 0795-72-3495
〒669-3311 兵庫県氷上郡柏原町母坪380

ご宴会・帰省の際のご宿泊に



・会議室、宴会場完備
・駐車場（50台、大型バス駐車可）

ＪＲ福知山線柏原駅よりタクシー5分
近畿自動車舞鶴道春日インター7分

●お食事は
蔵出し料理 あじくら
TEL. 0795-72-3715

調布市文化会館たづくり内
アカデミー愛とぴあ
文芸誌「たきおん」同人

木　村　つ　た　江

〒182-0005 東京都調布市東つつじヶ丘2－39－5
電話 03－ 3300－6895

水・電気・熱などエネルギー全般の御相談に応じます。

電気主任技術者第一種免状　第2-319号
技術士（電気部門）登録証　第15810号
エネルギー管理士（電気）免状　第 2857号
エネルギー管理士（熱）　免状　第 5191号

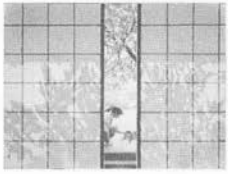
若森技術士事務所

所長　若　森　敏　郎

〒302-0023　茨城県取手市白山5－4－13
TEL・FAX 0297－72－0907

❖ 本誌にご協力有難うございました

「丹波人」と私



上 高子 著　定価 1,200円

本紙「丹波人NOW」でインタビューした
東京近辺在住の丹波出身の人たちを、
再取材をまじえ単行本に収録しました。

丹波新聞社発行

申し込みは当社へ

〒669-3309 兵庫県丹波市柏原町柏原201
TEL.0795-72-0530 FAX.0795-72-1956
http://tanba.jp

さすが&されど

60歳からの知恵と体験交流誌

隔月刊誌【さすが＆されど】好評発売中

書く・読む・交流する雑誌

年間購読料 3700円（税・送料込み）見本誌進呈

時代と共にあなたの歴史
自分史年表
書く・読む・調べる便利な歴史年表
定価 1,800 円（税・送料込）

これから書き継ぐ生活ノート
メモリー50
1年2頁、50年間書ける気軽なメモ帳
定価 1,800 円（税・送料込）

あなたの本つくりませんか

安心の35万円システム（100頁・100部）お気軽にご相談下さい。

自分史・評伝・記念誌・小説・エッセイ・句集・詩歌集・写真集

株式会社ホンゴー出版　〒247-0005 神奈川県横浜市栄区桂町1-1-1
TEL045(895)2712 FAX 045(895)4338

本誌にご協力有難うございました ❖

あだち眼科院長／医学博士
順天堂大学眼科　非常勤講師
足立和孝
〒347—0015
加須市南大桑字下鳩山一六二〇—一
TEL〇四八〇—六五—五九八八
FAX〇四八〇—六五—六〇九七
E-mail : kazu358@pastel.ocn.ne.jp

東京都渋谷区日中友好協会理事
日産労連・エルダークラブ幹事
広範な国民連合・東京世話人
EMネット埼京理事
足立和巳
〒183—0051
東京都府中市栄町一—一五—二七
TEL・FAX〇四二—三六四—七二二七

足立かをる

株式会社ナレッジリンク
足立国際会計事務所
代表取締役
税理士・米国公認会計士(Certificate)
足立知佳子
〒152-0035
東京都目黒区自由が丘一—一三—四 藤タワービル六〇二
TEL〇三—三七一八—八〇四七 FAX〇三—三七一八—八一四七
E-mail : cadachi@aia.gr.jp

足立静雄

飯田光雄
〒285—0045
千葉県佐倉市白銀三—八—十一
電話〇四三—四八五—〇五〇三
FAX〇四三—四八五—〇二九一

❖ 本誌にご協力有難うございました

生田清弘
東京都世田谷区成城一―七―七
電話 〇三―三四一五―一八九三

井本義一

上野重喜
〒234―0054 横浜市港南区港南台三―一七―二三
TEL・FAX 〇四五―八三二―七三三一

有限会社 PPC大洋
岡吉明
〒351―0014 朝霞市膝折町三―七―五
TEL 〇四八―四六〇―一六〇一
FAX 〇四八―四六〇―二三九七
http://www.ppc-taiyo.co.jp

岡林逸男
〒177―0051 東京都練馬区関町北二―七―一七

小田富士夫

本誌にご協力有難うございました ❖

梶原　清
やす子

金出一郎

株式会社 アイ・ケイ・アイ
株式会社 ホームワールド
代表取締役 岸田　勇
〒103—0013 東京都中央区日本橋人形町三—七—一〇
電話 〇三—三二四九—五二六一

木呂子　恵美子

久保春雄
〒300—0031 土浦市東崎町十三—二—六〇四
電話〇二九八—二一—二九七八

栗田　功

❖ 本誌にご協力有難うございました

坂上　明

坂上勝朗

坂上　登
山口泰男
仲　一聰
仙台市在住

坂上　豊

合唱指揮者
笹倉　強
〒352―0014
新座市栄四―五―二五
TEL・FAX　〇四八―四七七―五六四〇

高見嘉都司
〒173―0025
東京都板橋区熊野町四〇番十一号
電話　〇三―三九五六―〇六〇〇

本誌にご協力有難うございました ❖

高見秀史

柏高在京同窓会のホームページは検索サイトで「柏陵同窓会東京支部」でご覧いただけます。

谷口浩章

株式会社 シードコーポレーション
代表取締役 千種倫幸
〒104—0061 東京都中央区銀座一丁目二一—九
電話 〇三—三五六七—九七〇〇

日本画家
常岡幹彦
〒357—0205 飯能市白子一七三—七
電話 〇四二—九七八—一〇九八

鶴田宏

日本舞踊 西崎祥
端唄 根岸妙
〒224—0027 横浜市都筑区大棚町五〇〇—八
電話 〇四五—五九一—六六五五

❖ 本誌にご協力有難うございました

青葉山 真照寺
八王子 青葉霊苑（都営八王子霊園隣り 第二期墓地分譲案内中）
住職 堀井隆川
〒193—0821 東京都八王子市川町四九三—二
電話 〇四二—六五二—二〇一一

村上末吉

村上久夫
〒168—0072 東京都杉並区高井戸東三—四—十二
電話 〇三—三三三二—七一三四

山口和久
恵理子・賢一・寧々・藤吉郎秀吉・由佳・愛々・茶々・凪人・愛莉・思温
〒196—0031 東京都昭島市福島町二—一〇—二七
電話 〇四二—五四四—八八六一
http://plaza.rakuten.co.jp/yamaguchi0330/

PHP文化フォーラム 埴生の宿
代表 吉住自由造
〒216—0033 川崎市宮前区宮崎五—五—三五
電話 〇四四—八六六—三六二一

渡邊隆男

編集後記

★年齢も性別も関係なく、たとえ初対面であっても丹波への世界に誘ってくれるのが、関東氷上郷友会の「ふるさと会」と『山ざる』誌だと思います。語るほど読むほどに、丹波がそのまま関東に引っ越して来たのではないかという気分になります。（本城）

★八ヶ岳山麓で自然保護運動に活躍中の俳優・柳生博氏の「花鳥風月の里山」なる講演を聴いた。話は丹波の隣・但馬のコウノトリ放鳥の取り組みにも及んだ。里山を守ることは、自然と人間が共生して、住み良い環境を後生に残すこと。

さて、丹波は由緒正しい里山だろうか。四十年も前に巣立って以来、モノクロのフィルムを通してしか眺めていないように思うこの頃、『山ざる』は遠近、今昔の丹波の架け橋だとの感を深くした。（原谷）

★寄稿文の文責は寄稿者にありますが、どうしても事実誤認や記憶ボケ？が見つかります。編集サイドから「恐れながら」と調整をかけますが、大議論はあっても皆さん最後は史実や国語審議会の指針に従って下さいます。ご協力有難うございました。（徳田）

★「ふるさとトッピクス〈丹波新聞〉から」を担当して、過去半年間の丹波新聞にもう一度目を通した。3大トピックスに分け、①昨年に引き続き、地域医療の崩壊と、それを必死に食い止めようとするお母さんたちの「県立柏原病院の小児医療を守る会」関連、②丹波竜関連で、古い地層から化石類の発見、希少植物の発見関連、③Uターンや I ターン関連ほか、うれしい話題などを選んだ。3ページで、丹波を大つかみできたでしょうか。（上）

★巻末の「会員名簿」について、個人情報保護の観点から、会員名簿の掲載を33号以来取りやめにしていましたが、多くの方々から要望がございましたので今号に復活いたしました。名簿のアップ・ツ・デイトに関しましては、藤田徹氏の絶大なご協力を得てできるかぎりの手を尽くしましたが、なお行きわたらぬ点が多々あると存じます。お気づきの節は、忌憚なくご指摘ください。

お知らせいただく場合は、記録の確実性を期すため、かならず文書（葉書・メールなど）にてお願いいたします。メールは unclemasaaki@yahoo.co.jp （坂上）

山ざる　第39号

平成二十年十一月一日発行

〈編集委員〉
足立静雄　池田　忍　井徳正吾
上　高子　上田正文　岡　吉明
木邑子恵美子　坂上勝朗　常岡幹彦
鶴田ゆき子　徳田八郎衛　原谷洋美
藤原ひさ子　本城英明

発行者　関東氷上郷友会会長　渡邊　隆男
〒174-0064　東京都板橋区中台3-27-1-401
坂上勝朗方・関東氷上郷友会事務局
☎〇三（三九三六）二四〇一
振替〇〇一一〇―三―一二三一三〇
製　作　株式会社二玄社
編集協力　株式会社ホンゴー出版

人材募集!! 関東地区　関西地区

当社は三井化学（株）、大日本印刷（株）、アサヒビール（株）、ダイキン工業（株）、沖電気工業（株）、三菱商事（株）などを主力荷主に持つ総合物流会社です。東京、名古屋、大阪に主要倉庫を持ち、関東・関西圏の物流をつなぎます。

日本で一番大きなトレーラーが毎日、東海道を走っています。

平成19年秋完成。本格稼動に入った草加物流センター　倉庫規模5600坪（5階建）（埼玉県草加市）

丹波事業所 開設準備！

キリンビール（株）神戸工場（三田）、大日本印刷（株）小野工場を中核に、丹有地区の基盤強化のため、西神戸物流センター及び丹波事業所・丹波物流センターを新設（準備中）

三協運輸 株式会社

代表取締役社長　岸本勲（氷上町出身）

本　　社　東京都足立区保木間 1-1-3　TEL.03(3860)8112
大阪支店　大阪府大東市新田中町 3-3　TEL.072(806)2821
埼玉支店　埼玉県桶川市加納峯 3-7-9　TEL.048(728)9380

物流倉庫所在地　東京　埼玉　神奈川　名古屋　大阪

附録DVD：コンピュータ上で全頁閲覧可能！

B5判変型（260×190㎜）・上製布貼表紙・函入・総3056頁

通常価格：50,400円（税込）

郷友会々員特別価格：40,320円（税込）

大書源

二玄社創立五十周年記念出版

全三巻＋索引冊

［附録：DVD・書道史年表］

●書体字典の最高峰。未曾有の二十一万字収録！

漢字の姿は、一つではありません。

三千年の歴史の中で、数多くのスタイルが生まれました。

◉魚の例……

殷の甲骨・金文から清末の斉白石まで、あらゆる時代の様々な書体を収集し、二十一万を超える史上最多の字例を収載しました。二玄社の半世紀に亘る出版活動で蓄えた膨大な資料を基礎に作り上げた、書体字典の決定版です。

＊詳細カタログをご請求ください。

二玄社　会長 渡邊隆男

〒101-8419 東京都千代田区神田神保町2-2 Tel.03-5210-4733 Fax.03-5210-4723 http://nigensha.co.jp